

友留遺跡範囲確認調査報告書

友 留 遺 跡

2009年3月

鹿児島県知名町教育委員会

序 文

この報告書は、畠地帯総合整備事業（担い手育成型）第二住吉地区に伴い平成17年度と平成18年度に実施した確認調査及び一部の本調査、平成19年度に文化庁並びに鹿児島県教育委員会の補助を受け実施した保存目的の確認調査の成果をまとめたものです。

この遺跡は、当初記録保存の予定でしたが、調査の進展に伴い多数の住居跡や土坑、土器や石器などが出土したため、その重要性や隣接する住吉貝塚との関連性を考慮し、多くの関係者のご協力により盛土保存する運びとなりました。

友留遺跡の調査成果は、住吉貝塚をはじめとした周辺遺跡の調査成果とあわせて、縄文時代後半から弥生時代初めの奄美諸島の様相を知るうえで貴重な資料となることでしょう。この報告により多くの方々が遺跡や文化財について理解を深め、今後の保存活用について活発な意見が交わされることを期待いたします。

最後に、調査から報告書作成に至るまで、ご指導・ご協力くださいました文化庁・鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター、ご指導並び玉稿を賜りました諸先生、発掘調査や整理作業に従事された皆様、調査にご配慮くださいました沖永良部事務所農村整備課、その他関係各位に深く感謝申し上げます。

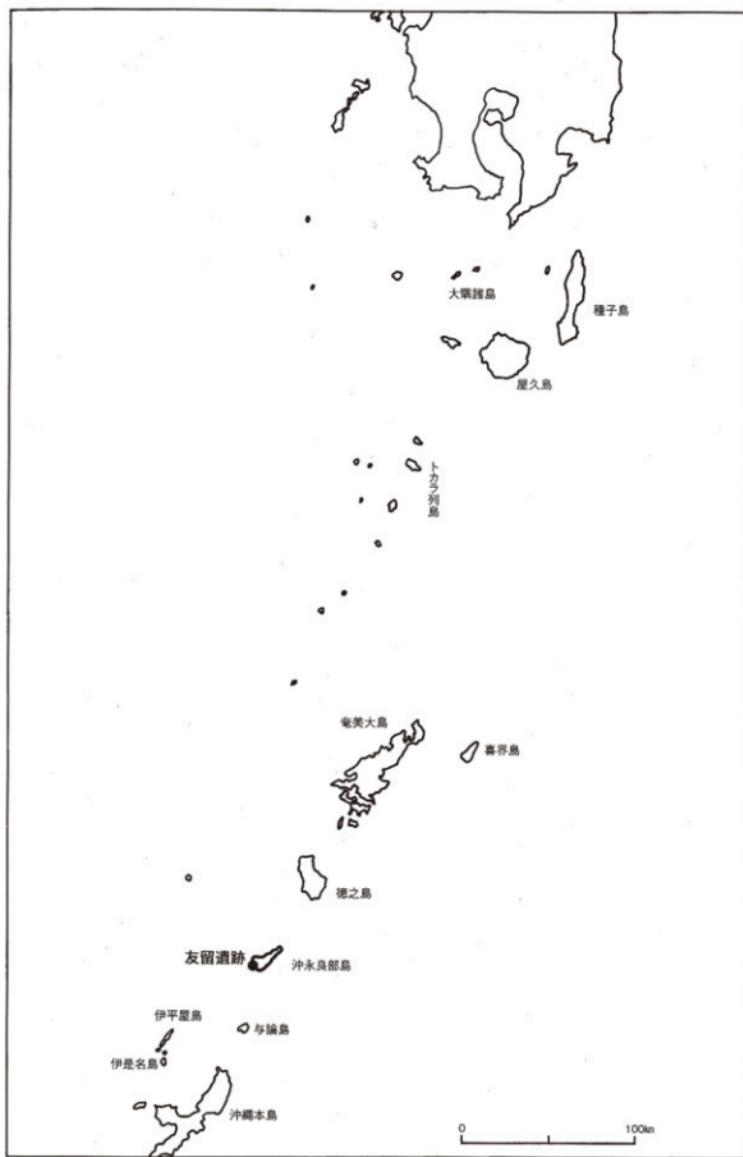
平成21年3月

知名町教育委員会

教育長 大山 修

報告書抄録

ふりがな	ともるいせき							
書名	友留遺跡							
副書名	友留遺跡範囲確認調査報告書							
卷次								
シリーズ名	知名町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	(11)							
編著者名	森田太樹・堂込秀人							
編集機関	知名町教育委員会							
所在地	〒891-9295 鹿児島県大島郡知名町知名307番地 Tel.0997-93-3111							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因 確認
		市町村	遺跡番号	°	'			
友留遺跡	鹿児島県 大島郡知名町住吉 字友留	465348	95-28	27° 21' 37"	128° 31' 39"	2005.12.7 ~2006.3.17 2006.6.20 ~2006.12.22 2007.2.22 ~2007.10.26	2,010	範囲 確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
友留遺跡	集落	縄文時代晚期 ～ 弥生時代中期	竪穴住居跡15基 土坑3基 ピット52基	宇宙上層式土器 仲原式土器 石斧・磨石・敲石 黒曜石・骨製品				



第1図 沖永良部島知名町友留遺跡の位置

例　　言

- 1 本書は、文化庁及び鹿児島県教育委員会の補助を受け2007年に実施した友留遺跡範囲確認調査の調査報告書である。本遺跡の理解を深めるため2005・2006年に実施した県営畠地帯総合整備事業（担い手育成型）第二住吉地区に伴う友留遺跡の試掘確認調査・一部本調査の成果も合わせて掲載する。
- 2 発掘調査は、知名町教育委員会が主体となり、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得た。
- 3 本書で用いたレベル高は海拔を表し、方位は磁北を示す。
- 4 遺物は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 5 本書の執筆は次のとおりである。
第Ⅰ章・第Ⅱ章 森田太樹
第Ⅲ章・第Ⅴ章 森田太樹・堂込秀人
第Ⅳ章 黒住耐二・樋泉岳二
- 6 現地調査に関する実測及び写真撮影は、森田・堂込・寺原・川口・馬籠が行った。遺物の実測トレースは森田・市來・森・新納が行い、出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター西園勝彦が行った。石器の実測は、九州文化財研究所に委託した。
- 7 調査・報告書作成にあたっては、次の方々に御協力を賜った。記して感謝申し上げます。
青崎和憲 伊藤慎二 大西智和 上村俊雄 川口雅之 北野堪重郎 黒住耐二 新里貴之
竹中正巳 寺原 徹 樋泉岳二 永田大作 新納忠人 西園勝彦 福永修一 馬籠亮道
水ノ江和同 最上優子 渡辺丈彦
- 8 本書の編集は、森田が行った。
- 9 出土遺物は、知名町教育委員会が知名町中央公民館に保管・展示する予定である。

序 文	(1)	第8図 1号住居跡出土土器(2)	19
報告書抄録	(2)	第9図 2号住居跡遺物検出状況	21
例 言	(4)	第10図 2号・3号住居跡完掘状況	22
		第11図 2号住居跡遺物出土状況	23
		第12図 2号住居跡出土土器(1)	24
本文目次		第13図 2号住居跡出土土器(2)	25
第Ⅰ章 調査の経過	1	第14図 2号住居跡出土土器(3)	26
第1節 調査に至る経緯	1	第15図 2号住居跡出土土器(4)	27
第2節 調査の粗總	1	第16図 2号住居跡出土土器(5)	28
第3節 調査の概要と経過	2	第17図 2号住居跡出土土器(6)	29
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5	第18図 2号住居跡出土石器	30
第1節 遺跡の位置及び地理的環境	5	第19図 A地点土坑・ピット	31
第2節 遺跡周辺の史的環境	6	第20図 4号住居跡	33
		第21図 4号住居跡出土土器	34
第Ⅲ章 発掘調査の概要	11	第22図 4号住居跡・検出面出土土器	35
第1節 発掘調査の概要	11	第23図 4号住居跡・検出面出土石器	36
第2節 基本層序	14	第24図 5号住居跡	37
第3節 土器の分類	14	第25図 5号住居跡・検出面出土土器	38
第4節 A地点の調査	15	第26図 6号・15号住居跡	40
第5節 B地点の調査	31	第27図 6号・15号住居跡出土土器	41
第Ⅳ章 同定・分析	76	第28図 6号・15号住居跡検出面出土土器(1)	42
第1節 沖永良部島友留遺跡から得られた貝類遺体	76	第29図 6号・15号住居跡検出面出土土器(2)	43
第2節 友留遺跡から出土した脊椎動物遺体群	83	第30図 7号住居跡	45
		第31図 7号住居跡出土土器	46
		第32図 7号住居跡検出面出土土器	47
第Ⅴ章 調査のまとめ	107	第33図 8号・14号住居跡	49
		第34図 8号住居跡・南側遺構出土土器	50
挿図目次		第35図 8号住居跡検出面出土土器(1)	51
第1図 沖永良部島知名町友留遺跡の位置	(3)	第36図 8号住居跡検出面出土土器(2)	52
第2図 周辺の遺跡	8	第37図 6号・8号・10号住居跡出土石器	53
第3図 友留遺跡トレンチ配置図及び遺跡範囲	12	第38図 14号住居跡・検出面出土土器	54
第4図 友留遺跡遺構配置図	13	第39図 9号住居跡	56
第5図 1号住居跡完掘状況	16	第40図 9号住居跡・検出面出土土器	57
第6図 1号住居跡遺物出土状況	17	第41図 9号住居跡検出面出土土器	58
第7図 1号住居跡出土土器(1)	18	第42図 10号住居跡	60

第43図	10号住居跡検出面出土土器(1)	61	図版17	2号住居跡出土土器	125
第44図	10号住居跡検出面出土土器(2)	62	図版18	2号住居跡出土土器	126
第45図	10号住居跡検出面出土骨製品	63	図版19	4号住居跡出土土器	127
第46図	11号住居跡	64	図版20	4号住居跡出土土器	128
第47図	11号住居跡出土土器	65	図版21	5号住居跡・検出面出土土器	129
第48図	13号住居跡	66	図版22	6号住居跡・15号住居跡出土土器ほか	130
第49図	B地点ピット	68	図版23	7号住居跡・検出面出土土器	131
第50図	包含層出土土器	68	図版24	8号住居跡出土土器ほか	132
第51図	包含層出土石器	69	図版25	8号住居跡検出面出土土器ほか	133
第52図	包含層出土骨製品	70	図版26	9号住居跡・検出面出土土器	134
			図版27	9号住居跡検出面出土土器ほか	135
			図版28	10号住居跡検出面出土土器	136
			図版29	11号住居跡出土土器・骨製品・黒曜石	137
			図版30	包含層出土土器	138
			図版31	2号住居跡出土石器ほか	139
			図版32	6号住居跡出土石器ほか	140

表目次

第1表	知名町遺跡地名表	9
第2表	遺構出土土器点数一覧表	15
第3表	石器計測表	69
第4表	骨製品計測表	70
第5表	土器觀察表	71

図版目次

図版1	友留遺跡周辺航空写真	109
図版2	友留遺跡航空写真ほか	110
図版3	表土剥ぎ状況ほか	111
図版4	A地点全景・1号住居跡検出状況ほか	12
図版5	2・3号住居跡検出状況・1号土坑ほか	113
図版6	ピット2・A地点完掘状況	114
図版7	B地点遠景・4号住居跡ほか	115
図版8	6号・15号住居跡ほか	116
図版9	8号・14号住居跡ほか	117
図版10	10号・12号住居跡ほか	118
図版11	C3サブトレント1ほか	119
図版12	1号住居跡出土土器	120
図版13	1号住居跡・2号住居跡出土土器	121
図版14	2号住居跡出土土器	122
図版15	2号住居跡出土土器	123
図版16	2号住居跡出土土器	124

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

鹿児島県農政部農地整備課（沖永良部事務所農村整備課、以下県農政部）は、知名町第二住吉地区において畑地帯総合整備事業を計画し、地区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。昭和60年度の分布調査及び確認調査の結果並びに、平成16年度に実施された分布調査により古留遺跡が存在することが判明し、平成17年度に確認調査を実施した。この結果に基づき、埋蔵文化財の保護と事業の推進について知名町教育委員会、県農政部、知名町耕地課で協議を行い、平成18年度に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査の結果、一部で土壤改良のための搅乱がみられたものの、多量の遺物を含む包含層の残存や住居跡と思われる石組みの遺構が良好な状態で多数確認された。知名町教育委員会では、その重要性に鑑み、再度、県農政部、知名町耕地課、文化庁、文化財課、知名町教育委員会及び地元推進委員会と保存と工事計画の変更について協議を重ね、盛土工法により遺跡を保存することで合意した。

平成19年度は、文化庁・鹿児島県教育委員会の補助を受けて保存を目的とした確認調査を実施した。

第2節 調査の組織

〈平成17年度 確認調査〉

事業主体	鹿児島県農政部農地整備課（沖永良部事務所土地改良課）
調査主体	知名町教育委員会
調査責任者	知名町教育委員会教育長 大山 修
調査事務担当	知名町教育員会生涯学習課長 林 富義志
調査担当者	知名町教育委員会生涯学習課主事 森田 太樹
	知名町教育委員会生涯学習課主事 森田 太樹
	鹿児島県教育庁文化財課文化財主事 堂込 秀人

〈平成18年度 本調査・確認調査〉

事業主体	鹿児島県農政部（沖永良部事務所土地改良課）
調査主体	知名町教育委員会
調査責任者	知名町教育委員会教育長 大山 修
調査事務担当	知名町教育員会生涯学習課長 林 富義志
調査担当	知名町教育委員会生涯学習課主事 森田 太樹
	知名町教育委員会生涯学習課主事 森田 太樹
	鹿児島県教育庁文化財課文化財主事 堂込 秀人
調査指導	川口 雅之
調査作業員	水ノ江 和同
	知名町シルバーハウスセンター

整理作業員 木下光 濱田学 林未幸

〈平成19年度 確認調査〉

事業主体	知名町教育委員会	
調査主体	知名町教育委員会	
調査責任者	知名町教育委員会教育長	大山修
調査事務担当	知名町教育委員会事務局生涯学習課長	林富義志
調査担当	知名町教育委員会事務局生涯学習課 鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事	森田太樹 川口雅之 馬籠亮道 渡辺大彦
調査指導	文化庁文化財部記念物課調査官	
調査作業員	知名町シルバー人材センター・最上優子	
整理作業員	市來美穂	

〈平成20年度 報告書作成〉

事業主体	知名町教育委員会	
調査主体	知名町教育委員会	
調査責任者	知名町教育委員会教育長	大山修
調査事務担当	知名町教育委員会事務局生涯学習課長	林富義志
調査担当	知名町教育委員会事務局生涯学習課主事	森田太樹 堂込秀人 樋泉岳二 黒住耐二
遺物指導	鹿児島県教育庁文化財課埋蔵文化財係長 早稲田大学非常勤講師	
整理作業員	千葉県立中央博物館上席研究員 市來美穂 森ユキエ 新納美保	

第3節 調査の概要と経過

〈平成17年度〉

調査期間 12月7日（水）～3月17日（金）

12月7日（水）～12月9日（金）

機材搬入。トレンチ設定、重機による表土剥ぎ。遺構検出作業、清掃、写真撮影、トレンチ配置図測量。

12月13日（火）～12月16日（金）

重機による表土剥ぎ。遺構検出作業、写真撮影。トレンチ配置図測量。

12月19日（月）～12月20日（火）

包含層掘り下げ、遺物出土状況写真、遺物取り上げ。写真撮影。埋め戻し、整地作業。

3月14日（火）～3月17日（金）

トレンチ設定。重機による表土剥ぎ。遺構検出作業。清掃、写真撮影。トレンチ配置図測量。

埋め戻し、整地作業。

〈平成 18 年度〉

調査期間 6月 20 日（火）～12月 22 日（金）

6月 20 日（火）～6月 23 日（金）

機材搬入・テント設営・重機による表土剥ぎ（A 地点西側）。遺構検出作業。拡張トレンチ設定。

一部、東側に重機爪痕確認。和泊町教育委員会北野堪重郎氏来跡。

6月 26 日（月）～6月 29 日（木）

遺構検出作業。噴霧器による水散布。調査区清掃、検出状況写真撮影。

7月 3 日（月）～7月 7 日（金）

包含層掘り下げ。ピット掘り下げ、写真撮影。遺構検出状況実測。調査区南側拡張。台風対策。

7月 10 日（月）～7月 14 日（金）

包含層掘り下げ。2 号遺構清掃。土坑掘り下げ。1 号住居跡サブトレンチ掘り下げ、黒色層に土器集中箇所確認。

7月 24 日（月）～7月 28 日（金）

住居跡サブトレンチ掘り下げ、2 号住居跡に炭化物・土器片集中箇所確認。2 号住居跡遺物取り上げ。住居跡 1/2 掘り下げ。1 号住居跡断面実測。土坑清掃、写真、実測図。

7月 31 日（月）～8月 4 日（金）

1 号住居跡住居跡掘り下げ、遺物取り上げ。3 号土坑掘り下げ、写真撮影、断面実測。Pit 掘り下げ。2 号住居遺物出土状況実測。1 号住居実測。和泊町子ども会遺跡見学。

8月 7 日（月）～8月 13 日（日）

2 号住居跡出土状況実測、遺物取り上げ。1 号住居跡掘り下げ、遺物取り上げ。

8月 14 日（月）～8月 18 日（金）

重機によるトレンチ拡張、検出作業。1 号・2 号住居跡掘り下げ、遺物取り上げ。

8月 21 日（月）～8月 25 日（金）

1 号・2 号・3 号住居跡掘り下げ、遺物取り上げ、写真撮影、実測。A 地点調査終了、埋め戻し、整地作業。B 地点へ機材搬入。和泊町教育委員会北野氏来跡。

8月 29 日（月）～9月 1 日（金）

文化庁水ノ江和同調査官、鹿児島県文化財課堂込秀人文化財主事現地指導。B 地点遺構検出作業。

9月 5 日（火）～9月 8 日（金）

B 地点遺構検出作業。

9月 11 日（月）～9月 15 日（金）

遺構検出作業。黒色包含層部分掘り下げ。遺物出土状況写真撮影。台風対策。

9月 19 日（火）～9月 22 日（金）

包含層掘り下げ。重機による調査区拡張、検出作業。

9月 25 日（月）～9月 29 日（金）

- 遺構検出作業。4号・5号住居跡出土状況実測。重機による調査区拡張。
- 10月30日（月）～11月2日（木）
3トレンチ石列検出状況実測。調査区西側測量。10号住居跡検出状況実測。
- 11月13日（月）～11月17日（金）
5号住居跡1/4掘り下げ。平板取り上げ。
- 11月27日（月）～12月1日（金）
5号住居跡掘り下げ、遺物取り上げ、写真撮影。機材整理。
- 12月4日（月）～12月8日（金）
埋め戻し用砂搬入、埋め戻し作業。整地作業。
- 12月11日（月）～12月15日（金）
機材撤収。整地作業。
- 12月18日（月）～12月22日（金）
整地作業。
- 〈平成19年度〉
- 調査期間 7月24日（火）～10月26日（金）
- 7月24日（火）～7月27日（金）
調査開始。重機による表土剥ぎ及び作業員による昨年度調査区の検出。
- 7月30日（月）～8月2日（木）
表土剥ぎ。調査区清掃。グリッド設定。調査方針について検討。
- 8月6日（月）～8月10日（金）
調査区清掃。C3区・C4区黒色層掘り下げ。農村整備課と打ち合わせ。和泊町児童遺跡見学。
- 8月12日（日）
文化財めぐり・友留遺跡発掘体験
- 8月13日（月）～8月17日（金）
調査区内の泥水排出。B3区・B4区黒色層掘り下げ。C3区・C4区・C5区掘り下げ。サブトレンチ設定。D4区・E4区黒色層掘り下げ。
- 8月20日（月）～8月24日（金）
調査区拡張。拡張部分の清掃。住吉小学校児童発掘体験・土器づくり
- 8月28日（火）～8月31日（金）
C3区・C4区・C5区・D3区掘り下げ。6号住居跡検出作業・清掃。調査区遺物出土状況写真撮影。11号住居跡清掃。サブトレンチ設定。範囲確認トレンチ設定。10号住居跡南側拡張。鹿児島国際大学上村俊雄教授来歴。
- 9月3日（月）～9月7日（金）
10号住居跡南側拡張部掘り下げ。10号住居跡清掃、写真撮影。Pit検出写真撮影。
- 9月10日（月）～9月14日（金）
大雨により、調査区全面に浸水。ポンプによる排水作業。文化庁渡辺大彦調査官、鹿児島県文

化財課青崎和憲係長現地指導。調査区内の泥除去作業。C3 区・C4 区・D3 区サブとトレンチ掘り下げ。サブトレンチ写真撮影。4 トレンチ清掃。鹿児島国際大学大西智和准教授、鹿児島女子短期大学竹中正巳教授来跡。

9月 18 日（火）～9月 21 日（金）

5 トレンチ掘り下げ。6 トレンチ設定。遺構サブトレンチ設定。4 トレンチ南側掘り下げ。4 号住居跡サブトレンチ掘り下げ。6 号住居跡サブトレンチ掘り下げ。

9月 25 日（火）～9月 28 日（金）

7 号住居跡サブトレンチ掘り下げ。8 号住居跡サブトレンチ掘り下げ。9 号住居跡サブトレンチ掘り下げ。

10月 1 日（月）～10月 5 日（金）

遺構サブトレンチ写真撮影。住居跡サブトレンチ断面実測。ピット掘り下げ。

10月 9 日（火）～10月 11 日（木）

住居跡サブトレンチ断面実測。コンタ図作成。

10月 15 日（月）～10月 26 日（金）

ピット実測。5 トレンチ・6 トレンチ土層断面実測。遺跡写真撮影。埋め戻し用砂搬入、埋め戻し、整地作業。機材撤収。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置及び地理的環境

友留遺跡は、大島郡知名町大字住吉字友留に位置する。遺跡の所在する沖永良部島は、奄美群島に属する周囲 49.3 km、面積 94.51 km² の島である。知名町は鹿児島から南へ 542 km、東北に和泊町と隣接し、東北に約 32 km を隔てて徳之島、南に約 33 km を隔てて与論島を、さらに 60 km を隔てて沖縄を望む位置にある。

気候は亜熱帯モンスーン気候区に属し、四季を通じて温暖な島である。島を取り囲むように珊瑚礁が発達し、特に南部海岸に顕著にみられる。一方、北部海岸側では海食崖が連続してよく発達している。

地質学的にみると古生層を基盤とした第四紀琉球層群(隆起珊瑚礁)からなる比較的低平な島で、最高所の大山（標高 245m）を取り巻くような形で数段の段丘が形成されている。また、大山を取り囲むような形でカルスト地形が発達し、ドリーネ（凹地）が数多く分布している。全島にわたって石灰岩に覆われているため雨水は地下に浸透して段丘間の斜面下、ドリーネの底部、浸食の進んだ部分あるいは海岸付近に湧水・暗川となって現れ、地下には石灰岩洞穴を数多く形成している。これらの湧水・暗川は河川の少ない沖永良部島にあっては、この水源が遺跡の分布、集落の立地に大きな関わりをもっている。

今回調査を実施した友留遺跡は、知名町の西部の住吉海岸を目の前に望む標高約 13～15m の海岸

段丘上に立地する。遺跡南西側は、「マタ」と呼ばれる谷をはさみ住吉貝塚が位置する。マタに水流はみられないが地元の人の話によると海岸の砂浜には湧水があり「キシジャ」と呼ばれていたようである。海岸には珊瑚礁が発達しイノーが形成され、現在も地元の人々の漁場として利用されている。南の方向には与論島・沖縄本島・伊平屋島・伊是名島を望むことができる。

町内の遺跡は、南西部の海岸付近に多く分布している。

第2節 遺跡周辺の史的環境

知名町の遺跡が考古学的研究の対象となったのは昭和32年、九学会連合奄美大島共同調査の考古班による住吉貝塚（2）の発掘調査が最初である。調査では、自然の珊瑚礁の岩石面や石組みを壁面に利用した住居跡が1基され、遺物では宇宿上層式・宇宿下層式土器や石斧、貝・骨製品等が出土している。住居跡は、先行して調査が行われた宇宿貝塚の住居跡と同様に宇宿上層式期のものと考えられ、当該期における一般的な住居形態であったことが指摘されている。

以下、町内の代表的な遺跡について調査年をおって紹介する。

昭和57年から59年には河口貞徳氏・瀬戸口望氏・本田道輝氏らにより中甫洞穴（74）の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文早・前期の新型式の土器、縄文時代の土壙墓及び人骨、南九州の弥生時代後期の土器等が出土し、沖永良部島の歴史が縄文時代前半に遡ることや南九州との関わりが明らかにされた。

また、昭和57年、58年には沖縄国際大学、鹿児島大学により神野貝塚（39）、スセン當貝塚（40）の発掘調査が行われた。神野貝塚では縄文時代前期から縄文時代後期の土器が層序よく出土し、これにより從来不明であった南島縄文時代中期の土器に面縄前庭式があてはめられた。これらは沖縄国際大学の高宮広衛氏により面縄前庭様式として整理・編年され、後期前半の土器と併せて縄文時代中期から後期にかけての土器編年が明らかにされつつある。また、スセン當貝塚では、新形式の土器が出土しスセン當式土器と命名された。これら一連の調査の成果は不明な部分の多かった沖永良部島の先史時代を徐々に明らかにしていった。

昭和60年・63年には、県営圃場整備事業に伴い、赤嶺原遺跡（72）、前当遺跡（71）が発掘調査され、赤嶺原遺跡では、類須恵器、青磁、スクニジュと呼ばれる中世の排水路等が確認された。また、町が主体となり遺跡分布調査も実施され、この調査により友留遺跡の存在が確認された。

昭和62年には熊本大学考古学研究室により石原遺跡（65）が調査された。遺跡は、個人の畠地造成、いわゆる「天地返し」により遺物が多量に散布していたため発見されたもので、縄文時代後期～縄文時代晚期墳の土器や貝製品等が出土している。平成4年には農業基盤整備事業に伴い浜須A（31）、浜須B（30）遺跡の調査が実施され、浜須B遺跡では縄文時代後期の住居跡が5基確認された。

平成12年には、志喜屋武当遺跡（14）の調査が実施され縄文時代前期の包含層と縄文時代後期前半と考えられる住居跡が1基確認されている。平成13年～平成16年にかけては、友留遺跡の南東約200mに位置する住吉貝塚の範囲確認調査が実施され、14基の住居跡や土坑に伴い、多くの貝・骨製品などが発掘され、縄文時代後期～弥生時代初頭併行期の集落跡であることが判明した。平成19年に国指定史跡の指定を受けた。

《参考文献》

- 町誌編纂委員会 1982 『知名町誌』
- 国分直一、河口貞徳、曾野寿彦、野口義麿、原口正三 1959 「沖永良部島住吉貝塚調査報告」『奄美 その自然と文化』
- 日本学術振興会
- 沖縄国際大学考古学研究室 1987 『沖國大考古』第9号 沖縄国際大学考古学研究室
- 上村俊雄 1983 「沖永良部島の考古学的調査」『南日本文化』第16号 南日本文化研究所
- 上村俊雄・本田道輝 1984 「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基的研究』 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 熊本大学考古学研究室 1988 『石原遺跡』研究活動報告 22 熊本大学考古学研究室
- 知名町教育委員会 1984 『中甫洞穴』 鹿児島県知名町埋蔵文化財発掘調査報告書
- 知名町教育委員会 1985 『赤嶺原遺跡』 鹿児島県大島郡知名町埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)
- 知名町教育委員会 1986 『知名町埋蔵文化財分布調査概報』 知名町文化財報告書 (5)
- 知名町教育委員会 1988 『前当遺跡』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)
- 知名町教育委員会 1993 『大当遺跡 派須A・B遺跡』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書 (7)
- 知名町教育委員会 2002 『志喜屋武当遺跡』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書 (8)
- 知名町教育委員会 2006 『住吉貝塚』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

知名町管内図



第2図 周辺の遺跡

第1表 知名町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	友留	住吉字友留	平地		無文土器	昭和60年度分布調査
2	住吉貝塚	住吉字兼久	砂丘	縄文後期	土器(宇宙上層・下層式)	昭和32年九学会調査
3	兼久	住吉字兼久	平地	中世		平成16年度分布調査
4	新場ノ前	住吉字新場ノ前	平地	中世	類須恵器	平成16年度分布調査
5	木部瀧迫	住吉字木部瀧迫	台地		無文土器・青磁片	昭和60年度分布調査
6	西文当	住吉字西文当	台地	中世		平成16年度分布調査
7	手殿	住吉字手殿	台地		青磁・灰付	昭和60年度分布調査
8	阿部塚	住吉字阿部塚	台地	縄文～中世		平成13年度確認調査
9	具屋原	住吉字具屋原	台地	縄文～中世		平成10年度分布調査
10	内納当	住吉字内納当	台地	縄文・中世		平成9年度確認調査
11	千間	正名字千間	台地	中世	類須恵器	
12	下田	住吉字下田	台地	中世		平成12年度発掘調査
13	志喜屋武當	住吉字志喜屋武當	台地	縄文	住居跡	平成12年度発掘調査
14	ウロク畠A	正名字ウロク畠	台地		ふいご羽口	
15	ウロク畠B	正名字ウロク畠	台地		土器片	
16	ウロク畠C	正名字ウロク畠	台地		土器片	
17	正名内間	正名字内間	台地	中世	類須恵器・白磁	昭和60年度分布調査
18	志良辺堂	正名字志良辺堂	台地	弥生・中世	類須恵器・石斧	平成9年度発掘調査
19	黒平	正名字黒平	台地			平成8年度確認調査
20	川仁堂B	正名字川仁堂	台地		土器片・類須恵器	
21	川仁堂A	正名字川仁堂	台地		土器片・類須恵器	
22	帝野	正名字帝野	台地		土器片	
23	池原	正名字池原	台地		類須恵器・青磁	確認調査
24	伊舍良	正名字伊舍良	台地		土器片	
25	池原B	正名字池原	台地	縄文・中世		平成7年度確認調査
26	二俣B	正名字二俣	台地	縄文・中世		平成12年度発掘調査
27	二俣A	正名字二俣	台地	縄文・中世		平成11年度確認調査
28	阿岩	正名字阿岩	台地	縄文		平成12年度発掘調査
29	大平	正名字大平	台地	中世		平成13年度確認調査
30	浜須B	田皆字浜須	台地	縄文後期～弥生	土器片	平成4年度確認調査
31	浜須A	田皆字浜須	台地	古墳～歴史	土器片・類須恵器	平成4年度確認調査
32	曾根	田皆字曾根	台地	古墳	土器片・チャート	
33	田皆伊美畠	田皆字伊美畠	台地		磨製石斧	
34	昇竜洞	住吉字野平川	山腹	中世	人骨・管玉	
35	永良部洞	瓢箪字スマン社	山腹		類須恵器・獸骨	昭和60年度分布調査
36	大津勘フバド	大津勘字フバド	台地		類須恵器	昭和60年度分布調査
37	大津勘フーダトウ	大津勘字フーダトウ	台地		石斧	昭和60年度分布調査
38	水連洞	大津勘字蓬木保	丘陵	中世	類須恵器	昭和60年度分布調査
39	神野貝塚	大津勘字神野	砂丘	縄文	土器(室川下層式等)石器	昭和57・58年冲国大調査
40	スセン當貝塚	屋子字スセン當	砂丘	古墳	土器(スセン當式)石器	昭和57年廣大調査

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
41	星子母セージマ古墳跡	星子母字妻々	丘陵			
42	星子母	星子母字植村・上坂	丘陵		土器・石器	
43	泊り原	星子母字泊り原	丘陵	中世		平成16年度分布調査
44	遙殿	星子母字遙殿	丘陵	中世	無文土器	昭和60年度分布調査
45	当ノ増	星子母字当ノ増	砂土		土器・石器	昭和60年度分布調査
46	川春	星子母字川春	砂土		青磁片	昭和60年度分布調査
47	浜倉	星子母字浜手名	平地			
48	塩津類比	星子母字塩津類比	丘陵			昭和60年度分布調査
49	ヤイント	星子母字ヤイント	丘陵	中世		平成16年度分布調査
50	シャノ平	知名字シャノ平	丘陵	古代	土器片・石器	平成14年度発掘調査
51	前兼久C	黒貫	台地	中世		平成9年度確認調査
52	星羅	芦清良字星羅	台地	縄文～中世		
53	前兼久B	黒貫	台地	弥生・中世		平成8年度確認調査
54	高アタ子	黒貫	台地	縄文		平成10年度確認調査
55	前兼久	芦清良字前兼久	台地	縄文～中世		
56	芦清良前金久	芦清良字前金久	砂丘		類須恵器	昭和60年度分布調査
57	星者流球式横墓	星者字勝丸	平地			
58	セキハナ	星者字セキハナ	台地	縄文		平成18年度分布調査
59	川切	余多字川切	台地	縄文～中世		
60	星者高アタ子	星者字高アタ子	台地	弥生		平成18年度分布調査
61	栄長鳥	余多字栄長鳥	台地	縄文～中世		
62	イクサイヨー洞穴	余多字石喜喜	洞穴	縄文～古墳	人骨・土器・貝輪	昭和60年度分布調査
63	上水塗	芦清良字上水塗	台地	中世	カムィヤキ	平成18年度分布調査
64	東風平	星者字東風平	台地	中世		平成18年度分布調査
65	石原	余多字石原	台地	縄文	土器・石器・貝器	昭和62年黒大發掘調査
66	夢田	余多字夢田	台地	縄文		平成6年度農政分布
67	本田	余多字本田	台地	縄文～中世		
68	下平川2	下平川	台地		類須恵器	
69	下平川1	下平川	台地	中世	類須恵器	
70	下平川3	下平川	台地		類須恵器	
71	前当	上平川字前当	台地	中世	類須恵器・鉄さい	
72	赤嶺原	赤嶺字赤嶺原	丘陵	縄文・歴史	土器・須恵器・青磁	昭和59年度確認調査
73	アーニマガヤ古墳跡	赤嶺字アーニマガヤ	丘陵			
74	中甫洞穴	久志横字水窪	トドキ	縄文・弥生・歴史	土器(爪形文)・石器・人骨	昭和57・58・59発掘調査
75	花城洞穴	上平川字花城	洞穴			昭和60年度分布調査
76	上城跡	上城字次石	山麓			
77	西目園内兵衛佐居城跡	下城字先間	山麓			
78	新城花塚二ツ墓	新城	平地			
79	アンギム	下城字アンギム	台地		無文土器・類須恵器	

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の概要

平成 17 年度 確認調査（第 3 図）

平成 17 年度は、遺跡の範囲や残存状況を把握するため調査対象範囲約 5000 m²に 1.2m 幅を基本としたトレーニングを任意に設定した。遺跡の残存の可能性がある部分については可能な限り長いトレーニングを設定し、必要に応じて拡張しながら遺物包含層・遺構の検出に努めた。調査の結果、1～4 トレーニング、16・17 トレーニングでは遺構や遺物の残存が確認された。5～15 トレーニング、18・19 トレーニングでは、遺構・遺物ともに確認されなかった。1 トレーニングは石灰岩礫と砂粒に近い細かい石灰岩が混じる土壤であり、貝などの自然遺物も比較的多く出土した。また、4 トレーニングは黒褐色の遺物包含層が確認された。5・6・7 トレーニング周辺は、以前に耕地改善のため石灰岩除去事業が実施されており、破碎された石灰岩礫が検出された。これらの状況から、以前の耕地改善により、遺跡の大部分は搅乱され、部分的に残存しているものと推定された。

平成 18 年度 本調査・確認調査（第 4 図）

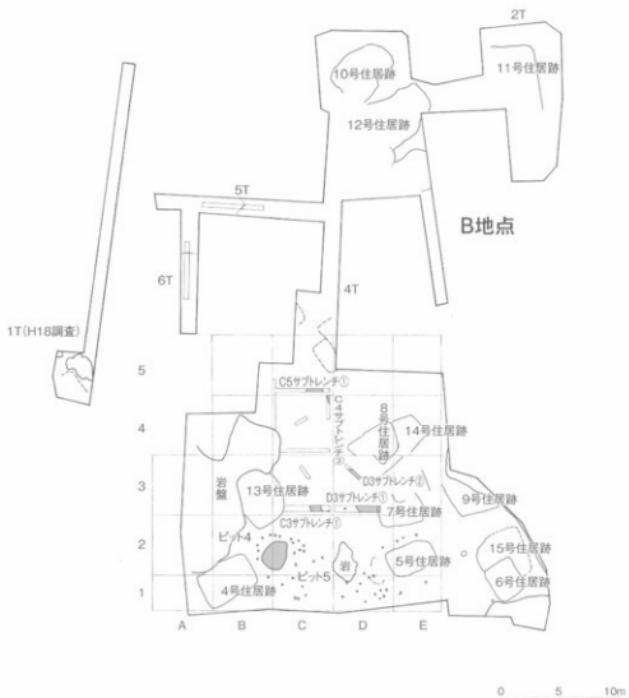
平成 18 年度は、作付けの関係から北側の一筆を A 地点、南側の一筆を B 地点とし、A 地点の調査から実施した。A 地点では、1 号住居跡・2 号住居跡・3 号住居跡が検出され、遺物の出土状況を記録しながら、全体を掘り下げた。土坑やピットについても同様である。B 地点は、平成 17 年度に遺跡の残存が確認された範囲を中心に調査を進めたが、調査が進むにしたがい住居跡などの遺構が多数確認されたため重要な遺跡であると判断し、再度、県農政部をはじめとした関係各機関と保存の可否について協議を重ねた。最終的に遺跡の重要性を理解いただき盛土保存に設計を変更することとなった。そのため、調査方針を当初の記録保存から保存のための確認調査に切り替え調査を続行した。包含層の掘り下げとともに石組みなどの一部が確認された地点では遺構の検出作業を行った。調査の結果、4～11 号住居跡及びピットを検出した。5 号住居跡のみ 4 分の 1 を掘り下げた。1 トレーニングでは、石灰岩盤に隣接し石灰岩礫の配置がみられ住居跡の可能性が考えられた。

平成 19 年度 確認調査（第 4 図）

平成 19 年度は、前年度の調査で確認された遺構の検出作業及び記録作業と新たな遺構の検出を目的として適宜トレーニングを設定し遺構の検出を試みた。調査区 B の中央部付近では、土器を中心とした多量の遺物を含む包含層が厚く堆積しており、遺物の集中状況や礫の配置を手掛かりに遺構の検出作業を行った。当初、赤土面で遺構を把握すべく遺物包含層を全体的に掘り下げたが遺物量が多いことや散水しながらの作業、また、台風等によるトレーニングの浸水などで多くの時間を費やした。調査の後半では、遺構の可能性がある部分に先行トレーニングを設定しながら遺構の把握に努めたが、新たな遺構の検出は難航し一部の確認に留まった。4 号・6 号・7 号・8 号・11 号・15 号住居跡にはサブトレーニングを設定し、遺構の構造や時期等を検討するための資料を得た。同

第3図 友留遺跡トレンチ配図及び遺跡範囲





第4図 友留遺跡遺構配置図

時に、水洗選別により自然遺物等を回収するための埋土サンプリングもおこなった。最終的には、15基の住居跡と52基のピットを確認した。そのほかにも遺構の可能性がある石列や遺物の集中がみられ遺跡全体での遺構数はさらに増加すると予想される。

第2節 基本層序

調査区により異なるが、灰留遺跡の基本的な層序は次のとおりである。

5トレンチ・6トレンチ周辺は、比較的層が厚く堆積しているが、その他の調査地点においては、第1層・第6層もしくは第1層・第4層・第6層のみの層序となる。

第1層 耕作土

第2層 灰褐色土（旧表土）

第3層 暗褐色土（遺物包含層）

第4層 黒褐色土（遺物包含層）

第5層 黄褐色土

第6層 赤褐色粘質土（基盤層）

第3節 土器の分類

住居跡及び検出面出土8,916点のうち307点を掲載した（第2表）。

土器は、以下の12類に分類した。

第1類

長頸の壺形土器で、細突帯や沈線により文様が構成されるもの。

第2類

壺形土器で口縁部上部が肥厚するもの。突起を付すものもある。第1類の沈線文を本類に施すものも考えられる。

第3類

頸部が比較的短い壺形土器。頸部と頸部下位に段を形成するものとしないもの、広口でやや外反するものがある。

第4類

口縁部が断面三角形または薄鉢状に肥厚する。口縁部は、平口縁と緩やかな波状、突起を付すもの。

第5類

第4類より肥厚部の幅がやや広く、肥厚部断面が長方形状をなす。突起を付すものもある。

第6類

第4類より肥厚部の幅がやや広く、肥厚の厚みがやや減するもの、肥厚部が扁平になるもの。

第7類

第4類より肥厚部幅がやや広がる。肥厚部中央をわずかにくぼませ、厚みの最大部が肥厚部下位にあるもの。

第8類

甕形土器で幅広の口縁肥厚部を形成するものをa類とする。口唇部に向かい直線的なもの、外反・屈曲するもの、やや内傾するものがある。口縁下端は、明瞭な段を形成するもの、口縁部下位を突出させ段を意識させるもの、緩やかに肥厚しなだらかに胴部に移行するものがある。口縁部下端に粘土紐を貼付け、突帯状をなすものもある。甕形土器で、口縁部が肥厚しないものはb類とする。

第9類

口縁部が屈折し、内傾する甕形土器。口縁部が肥厚するものとしないものがある。

第10類

把手状の突起をもつもの。

第11類

浅鉢形土器・塊形土器

第12類

第1類～第11類に分類できなかったものを便宜的に第12類とした。

土器の胎土は、次の2類に大別した。金雲母の有無を△で土器観察表に示した。

A類

粘質の胎土で、鉱物粒・砂礫等を多く含むもの。1mm以上の粗い粒子を含むものもある。

B類

泥質の胎土で、粗い鉱物粒をほとんど含まないもの。

第2表 遺構出土土器点数一覧表

遺構名等	掲載	未掲載	計	遺構名等	掲載	未掲載	計
1号住居跡	33	906	939	8号住居跡(アーチンチ)	4	140	144
1号住居跡検出面	0	6	6	8号住居跡検出面	21	659	680
2号住居跡	55	2916	2971	8号住居跡南側遺構(アーチンチ)	6	43	49
4号住居跡(アーチンチ)	13	231	244	14号住居跡(アーチンチ)	7	220	227
4号住居跡検出面	6	0	6	14号住居跡検出面	5	44	49
5号住居跡(1/4)	7	177	184	9号住居跡(アーチンチ)	1	12	13
5号住居跡検出面	13	214	227	9号住居跡検出面	18	467	485
6号住居跡(アーチンチ)	3	67	70	10号住居跡検出面	32	639	671
15号住居跡(アーチンチ)	7	151	158	11号住居跡(アーチンチ)	13	371	384
6・15号住居跡検出面	29	498	527	その他包含層出土遺物	3		3
7号住居跡(アーチンチ)	10	94	104				
7号住居跡検出面	21	754	775	合 計	307	8609	8916

●土器は1cm以上のものを集計した

第4節 A地点の調査(第4図)

A地点は、遺跡の北西側の調査区である。平成17年度の確認調査をもとに調査区を設定し、周辺に適宜トレッチを設定し遺構の有無を確認しながら遺跡の範囲を絞り込んだ。遺構は、現地表面から30～40cm程度の深さの基盤層である赤褐色粘質土面で検出された。遺物包含層は、削平を受けたようで調査区南西側(B地点側)に僅かに残存しているのみである。



第5図 1号住居跡完掘状況

(1) 1号住居跡（第5図・第6図）

1号住居跡は、調査区中央部付近で検出された。長軸3.3m、短軸2.4mの不定形プランで堅穴周縁には石灰岩礫を配置する。北側の壁面は、石灰岩礫の幅が広い。遺構中央部は、黒褐色をなし土器などの遺物の集中がみられた。貝や獸骨などの自然遺物は、ほとんどみられない。検出面から床面までの深さは35cmである。床面には、赤く焼けた焼上面がみられる。

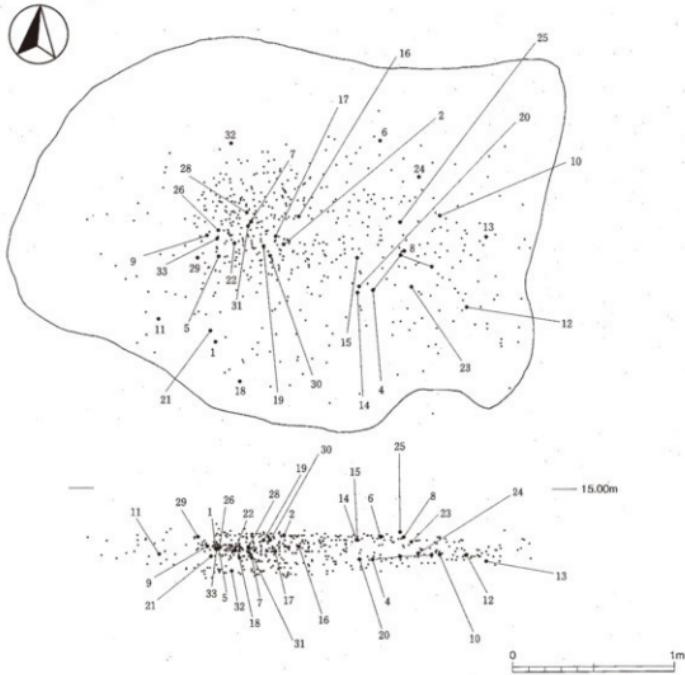
土 器

第1類（第7図1～2）

1は縦位に2条の沈線と横位に2条の細突帯を施し、その外側に斜位の短沈線を施している。薄手で、焼成は良好である。胎土には金雲母を含み、砂粒が目立つ。2は胴部片とみられ横位に廻る沈線と斜位の短沈線が施される。薄手で胎土に金雲母を含む。

第3類（第7図3～5）

3は口縁部片で、口唇部は、舌状を呈し突起を有する。4は頸部下端が緩やかに肥厚するものである。調整は土器内外面ともに比較的丁寧で焼成は、良好である。扁平な鉱物粒が目立つ。5は胴部片と思われる。泥質の胎土で混入物はほとんどみられない。



第6図 1号住居跡遺物出土状況

第4類（第7図6・8）

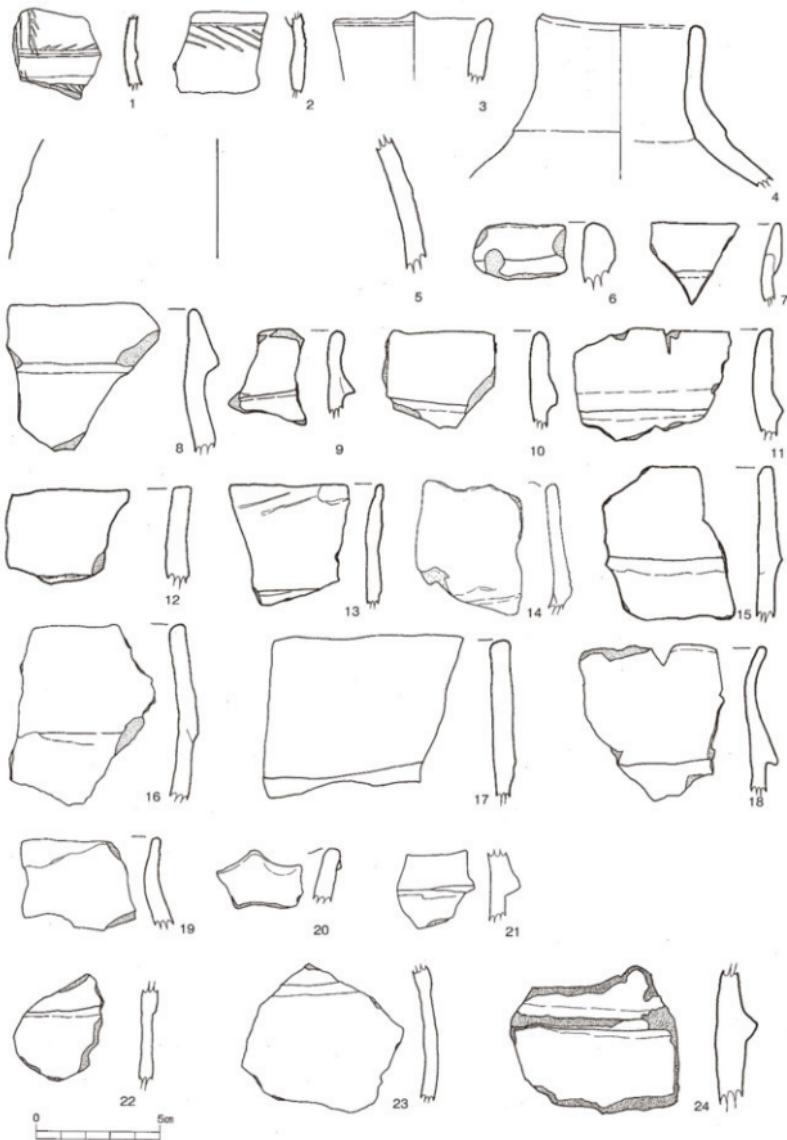
6は、平口縁で蒲鉾状肥厚する。8は口縁部断面が三角形を呈する。内外面とも丁寧に調整され、胎土にほとんど混入物を含まない。

第6類（第7図7）

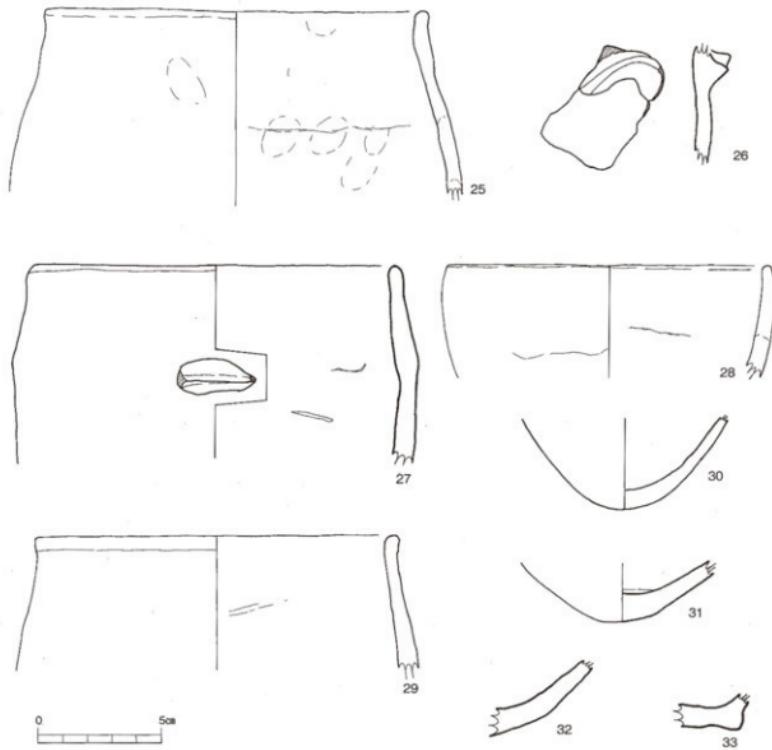
7は薄手の土器で、口縁部にわずかな厚みを持つ。

第8類（第7図9～第8図25）

10は口縁部下端が肥厚し段をなしている。胎土は石英や石灰岩粒など1mm程度の粒子を多く含み、やや脆弱である。12・13は口縁部下端がわずかに肥厚し段をなす。14は山形口縁が推定される。15・16は、口縁部肥厚部がほぼ平坦面をなす。15は胎土に乳白色の粒子を多く含む。16は口縁部がやや内傾する器形である。17は口縁部が幅広でわずかに肥厚し、胴部との境に段をなす。混入物が多く、内面には指押さえの痕を残す。18は口縁部が屈曲するもので、口唇部から口縁部下端に向けて厚みを増し段をなす。20は口縁上部が突起状をなす。24は口縁部下端が突尖状をなす。1mm程度の石英ほか鉱物粒が多く金雲母も含んでいる。25はb類で、口縁部に肥厚帯を形成



第7図 1号住居跡出土土器(1)



第8図 1号住居跡出土土器(2)

せず、胴部に向かい緩やかに膨らむ器形である。1~2mm程度の黄褐色鉱物を含む。内面には、指押さえの痕を残す。

第10類（第8図 26~27）

26は弧状の外耳を有する比較的薄手の土器である。27はやや内傾する口縁部で、胴上部の最大径のある部分に直状の外耳を付する。胎土は、1~3mm程度の混入物を多く含む。復元口径15cmである。

第11類（第8図 28）

28は塊形土器の口縁部片と思われる。胎土には1mm以下の鉱物粒を多く含む。

第12類（第8図 29）

29は口縁部上端が7mm程度の幅でわずかに肥厚する。胴部に向かい緩やかに膨らむ。胎土には1~3mm程度の鉱物粒が比較的多い。

底 部 (第8図30~33)

30・31・32は尖底である。33は平底である。

(2) 2号・3号住居跡 (第9図・第10図・第11図)

2号・3号住居跡は、調査区東側で検出された。2号住居跡は、長軸3.5m、短軸3mの不定形プランで周縁には石灰岩礫が配置される。東～南壁側の掘り込みは緩やかであるが西～北壁側はしっかりと立ち上がり壁面に石灰岩礫が多く配置される。住居跡内部からは土器を中心とした大量の遺物が出土し、部分的に炭化種子も出土した。また、北東角では比較的浅い部分から炭化した木片や比較的大きな土器片も出土し炉跡の存在が窺える。石器は、磨石・敲石・石皿・石斧などが出土している。検出面から床面までの深さは約50cmであるが、焼土塊や炭化物の集中部分が複数確認され回数の使用が考えられる。3号住居跡は、2号住居跡に切られる遺構で、検出面から床面までの深さは約25cmである。竪穴周縁の石灰岩礫の配置が部分的にみられる。遺構内から遺物の出土はない。遺構の詳細は不明であるが、住居跡として取り扱うこととする。

土 器

第2類 (第12図34~35)

34・35は口縁部が肥厚するものである。肥厚部は丸みを帯びずほぼ平坦である。泥質の胎土で、焼成は良好で堅緻である。34は黒褐色を呈している。

第3類 (第12図36~44)

36・37・38は頸部下位に段をなすものや緩やかな膨らみを有するものである。38は胴部があまり膨らまない卵形の胴部が推測される。39・40は、やや外反する。復元口径は39が11.5cm、40が10cmである。36・37・38・39は、いずれも1mm程度の鉱物粒を多く含む。41は泥質の胎土で、金雲母や微細な混入物を含む。

第4類 (第12図45~46)

45・46は口縁肥厚部断面が三角形や蒲鉾状に肥厚する。45は1mm以下の砂粒を多く含み、46は、泥質の胎土で金雲母を含む。

第5類 (第12図47~49)

47は口縁部断面がやや厚みをもった長方形で、肥厚部をまたぐように粘土紐を貼付け突起状を呈している。48は口縁部断面が長方形状に肥厚する。49は2つの突起を有する。

第6類 (第12図50~51)

50は口縁部が扁平でわずかに肥厚する。51は、0.5~2mmの混入物を多く含む。

第7類 (第13図52~54)

52・53・54は口縁部幅が2cm程度の土器で、下端が膨らみ段をなしている。54は緩い山形状を呈する。

第8類 (第13図55~第15図71・第17図88)

57・58は口縁部と胴部の器壁の厚さがほとんど変わらず、口縁部下端のみ肥厚させ段をなす。

58は復元口径22cmである。59・60は、口縁部がほぼ直口し、肥厚部が幅広である。59は復元口

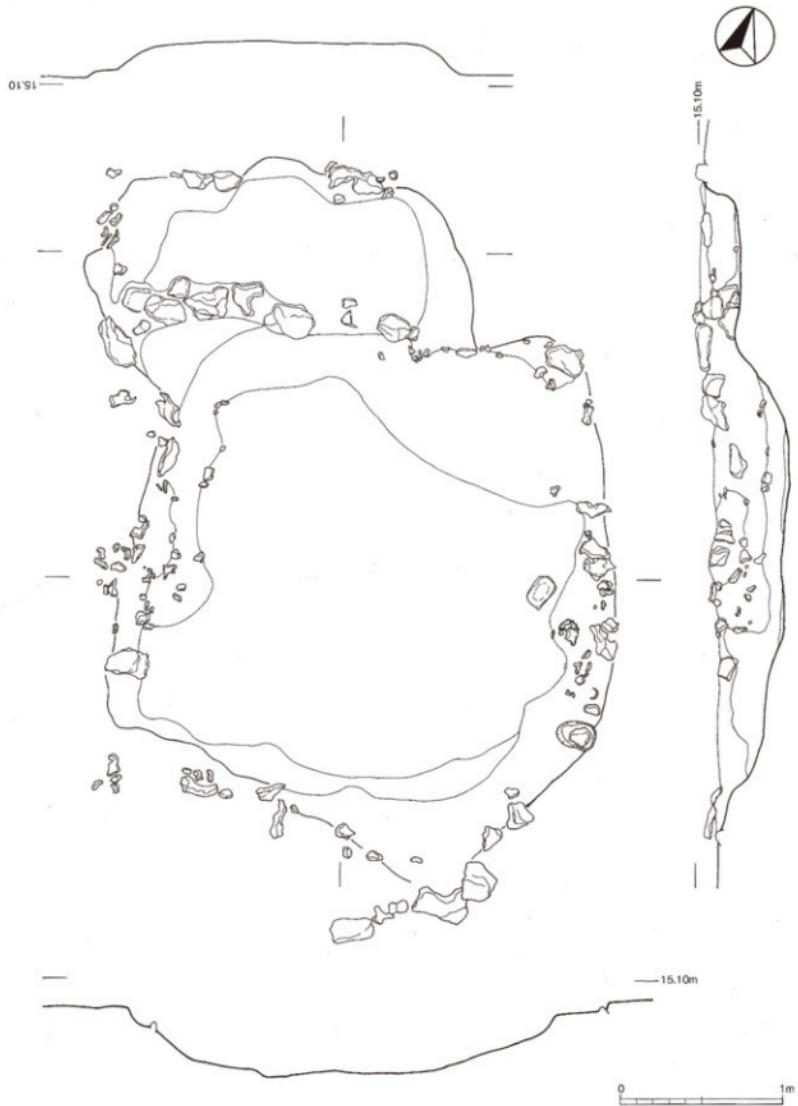


第9図 2号住居跡遺物検出状況

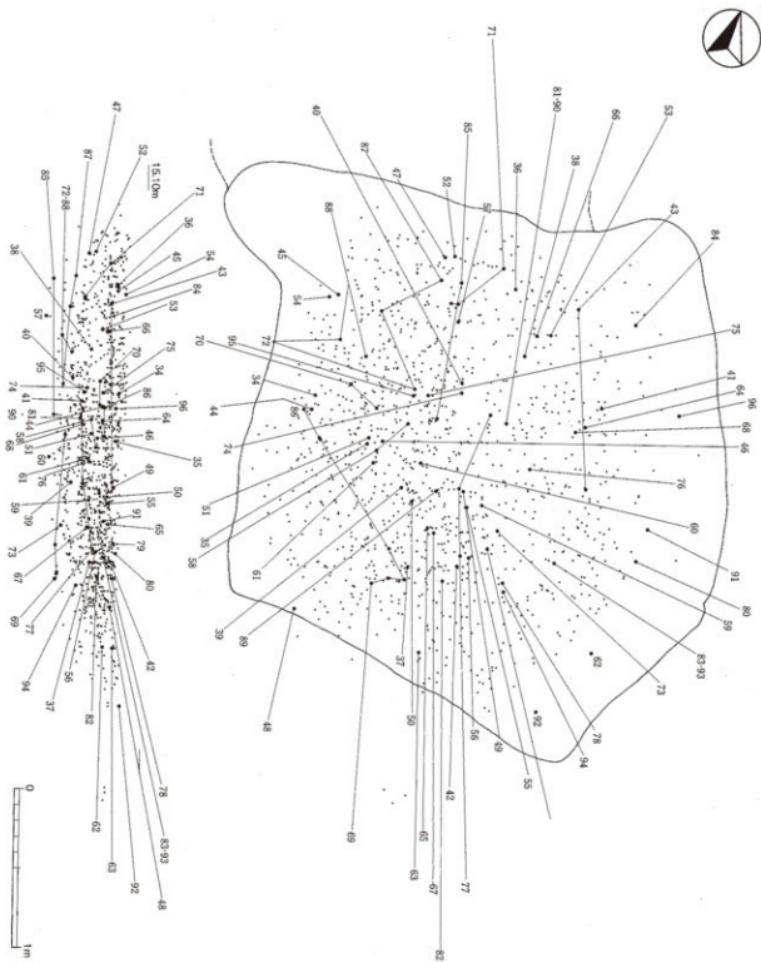
径 30 cm と大型である。61・62 は口縁部に縦位の粘土紐を貼り付け突起状をなすものであるが、59 と胎土や口縁部形状が類似しており、59 のような土器の口縁部に付されたものであることが推測できる。64 は口縁部下端が突帯状をなす。65 は、口縁部上位の内面を押さえ、やや外反させる。67 は b 類でやや外反する口縁部を有する。口縁部下端はわずかに段を形成していたと思われる。復元口径 29.5 cm である。68 は口縁部が屈曲し、胴部が膨らむ器形と推定される。口縁部下端は段をなす。復元口径 27 cm である。69・88 は、山形口縁をなし、口縁部下端は明瞭な段をなす。調整・焼成とも比較的良好である。69 の復元口径は 20.5 cm である。71 は口縁部がやや屈曲する土器で復元口径 21.5 cm である。口縁部下端がわずかに肥厚し、不明瞭な稜をなす。この部分が最大径となる。胎土は、1~3 mm 程度の混入物を多く含み、焼成は良好である。調整は、内外面とも比較的丁寧で、内面は指押さえの痕をナデ消している。住居跡内の底部の出土状況から、尖底が推測される。

第10類 (第15図 72~第16図 77)

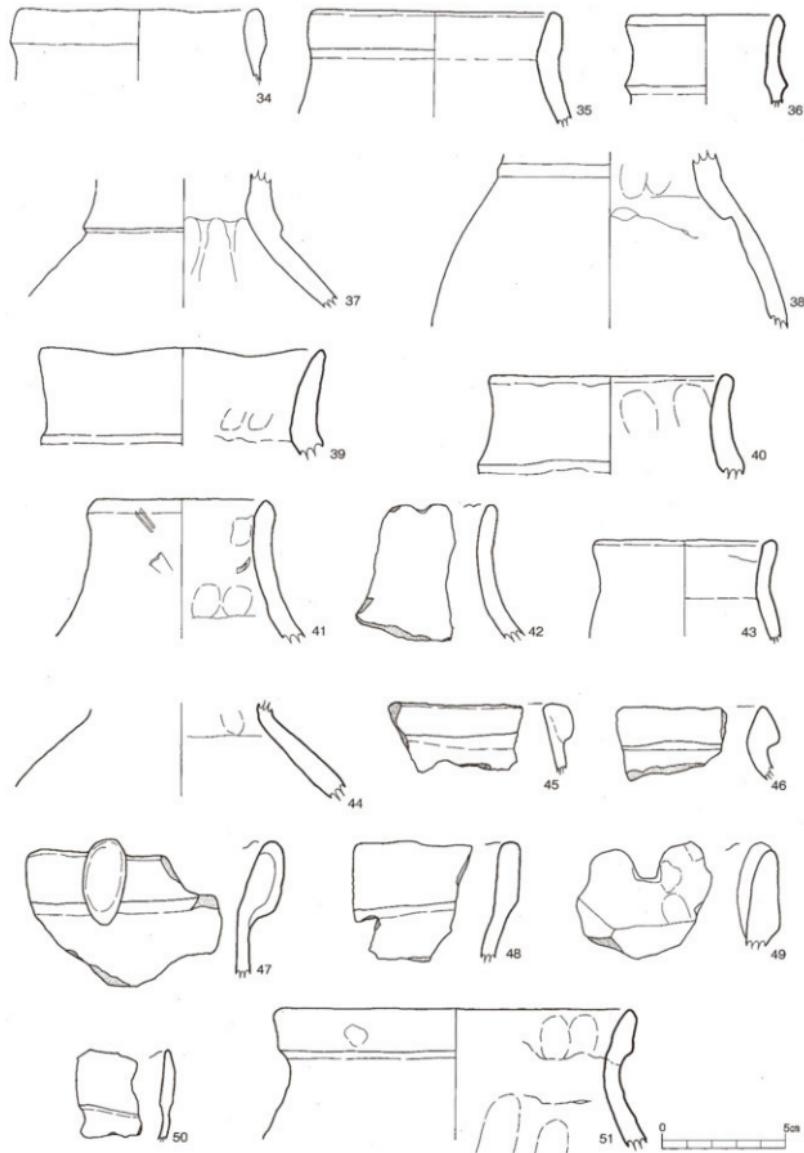
72 は口縁部がほぼ直口する器形で、口縁部下端の段の一部分が張り出し外耳状を呈している。胎土は、3~5 mm 程度の鉱物粒を含む。復元口径 28 cm である。73 は口縁部と胴部の境目ににぶい稜をなす。この部分に外耳が付されていたと推定される。内面には指押さえの痕を残す。復元口径 21 cm である。74 はビーナツ状を呈する外耳である。胎土には 1 mm 程度の白色鉱物粒を多く含み、やや脆弱である。75・76 は直状の外耳である。77 は胴部から口縁部まで直線状をなす器



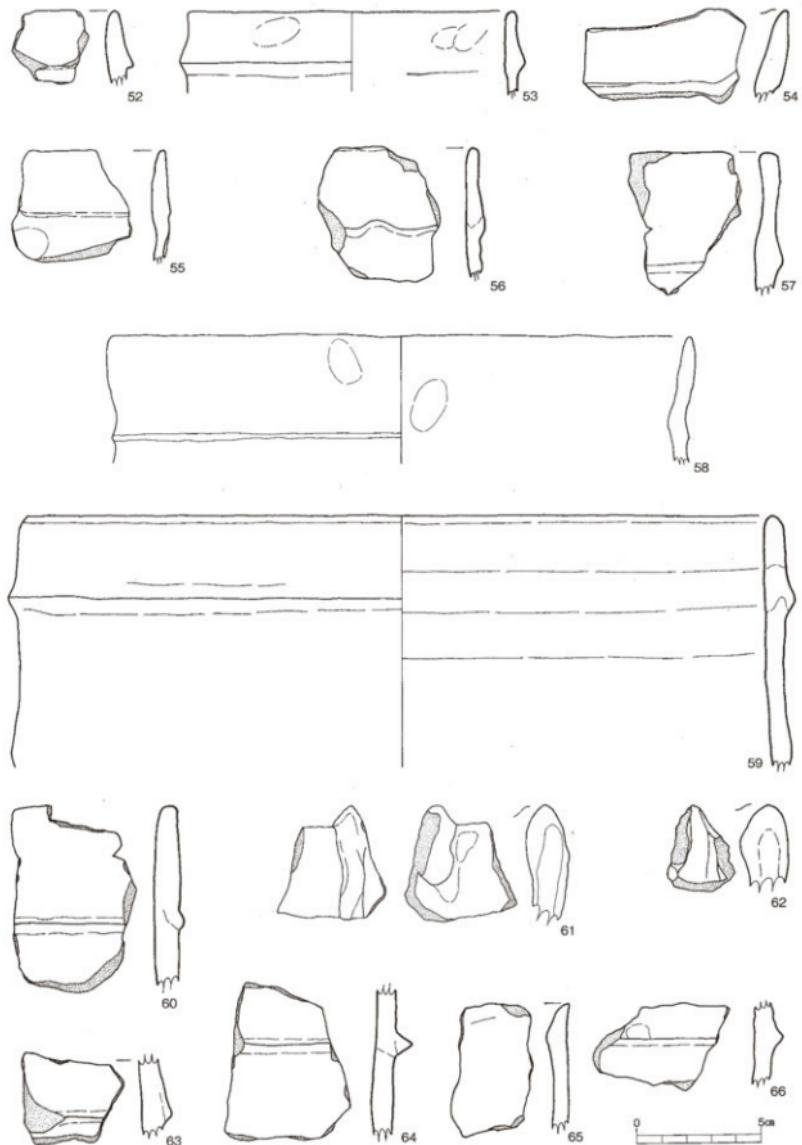
第10図 2号・3号住居跡完掘状況



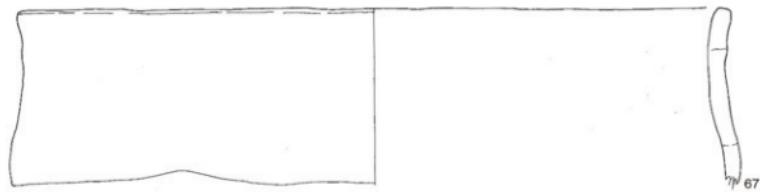
第11図 2号住居跡遺物出土状況



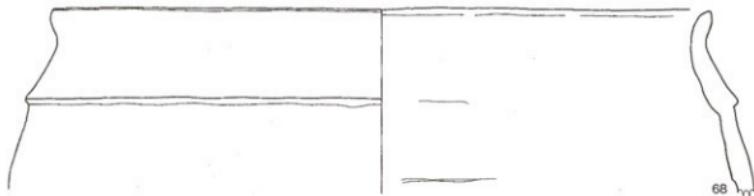
第12図 2号住居跡出土土器(1)



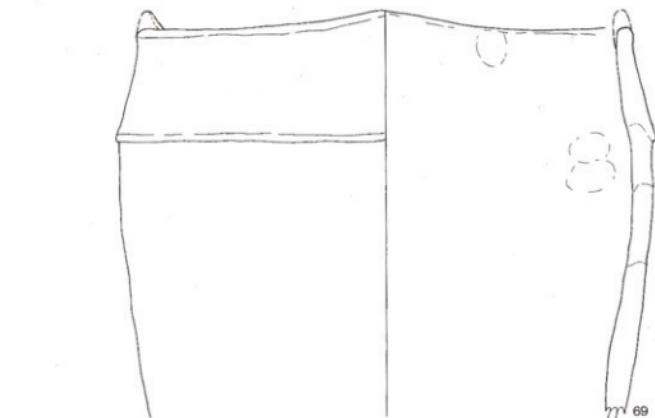
第13図 2号住居跡出土土器(2)



67



68

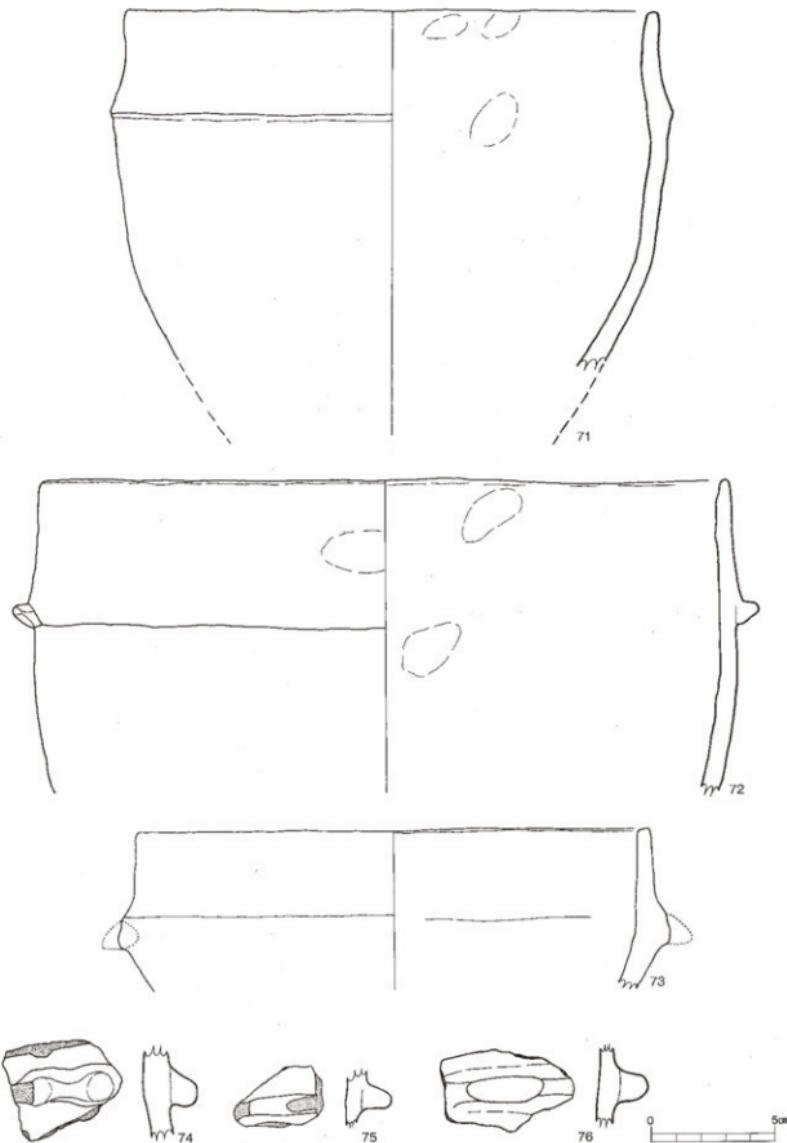


69

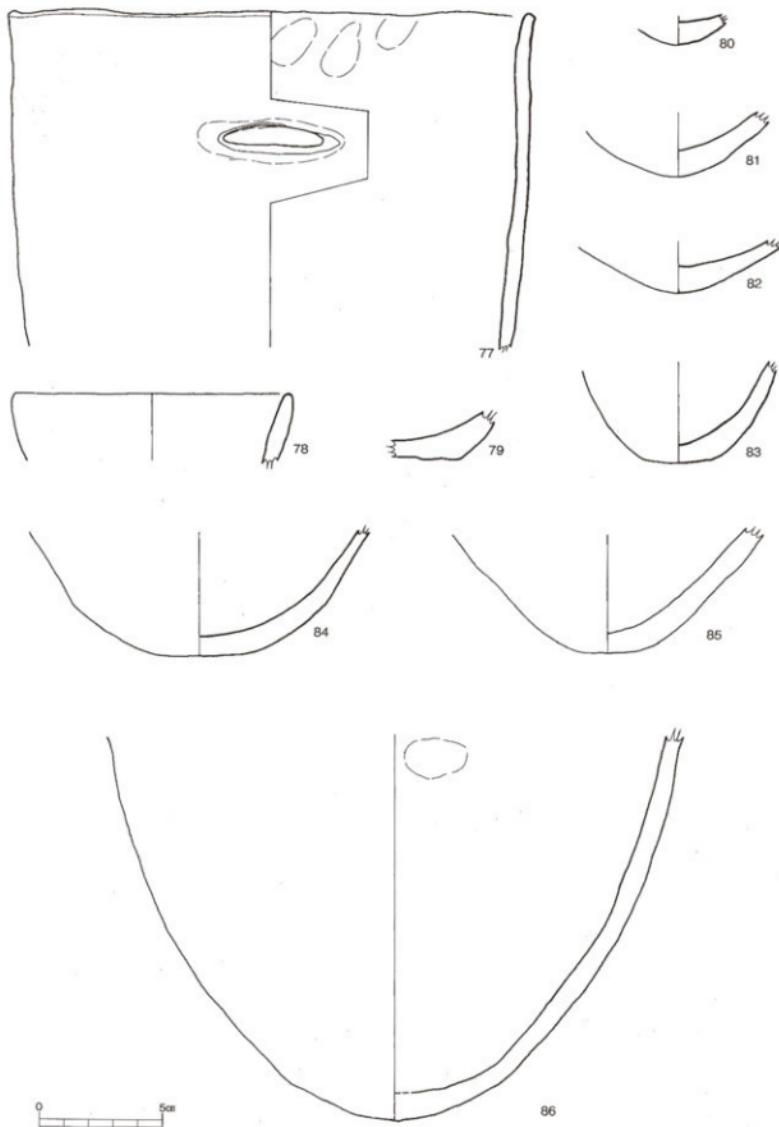


0 5cm

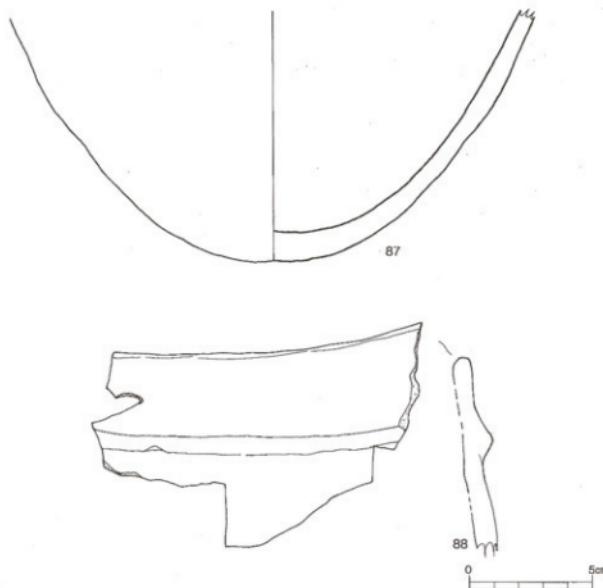
第14図 2号住居跡出土土器(3)



第15図 2号住居跡出土土器(4)



第16図 2号住居跡出土土器(5)



第17図 2号住居跡出土土器(6)

形で、直状の外耳を付す。薄手の土器で胎土には微細な鉱物粒を含む。焼成は良好である。
第11類（第16図78）

78は塊形土器の口縁部片と思われる。口唇部は丸みを帯びる。胎土は微細な鉱物粒が中心であるが、1mm程度の石英・石灰岩粒もわずかに含む。復元口径11cmである。

底 部（第16図79～第17図87）

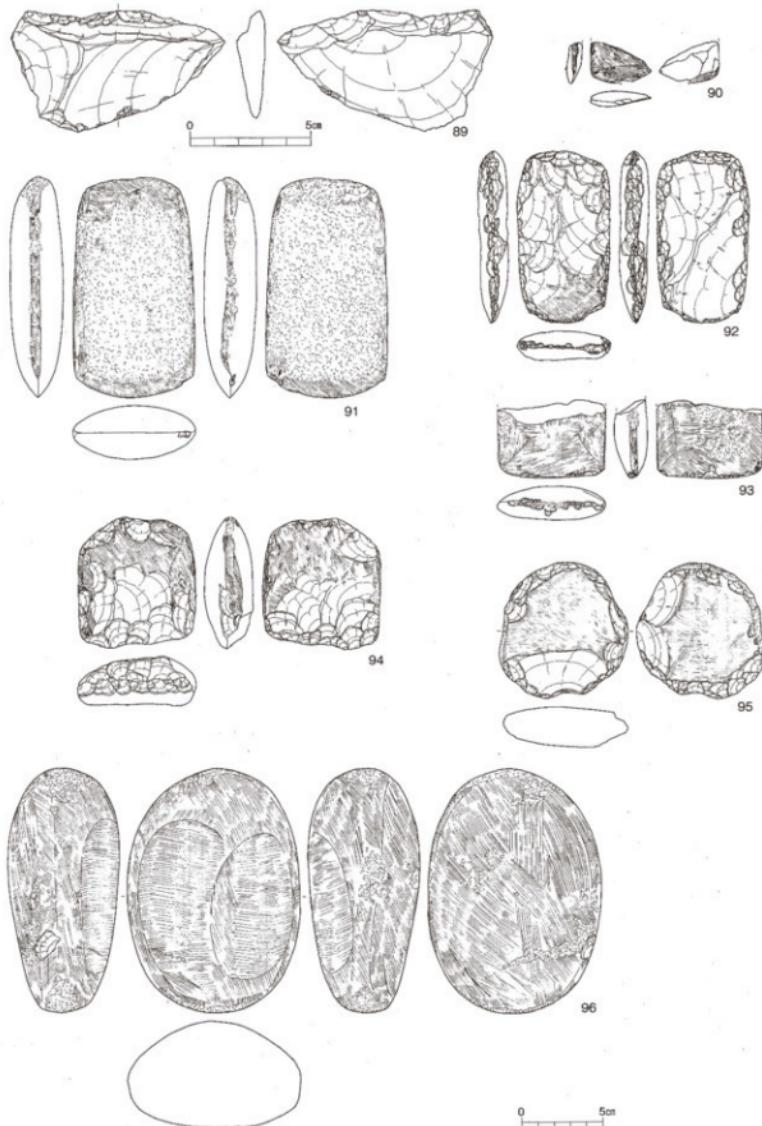
79は平底である。81・82・85・86は尖底である。84・87はやや丸みをおびる。87は出土状況から72の底部である可能性が高い。

石 器（第18図89～96）

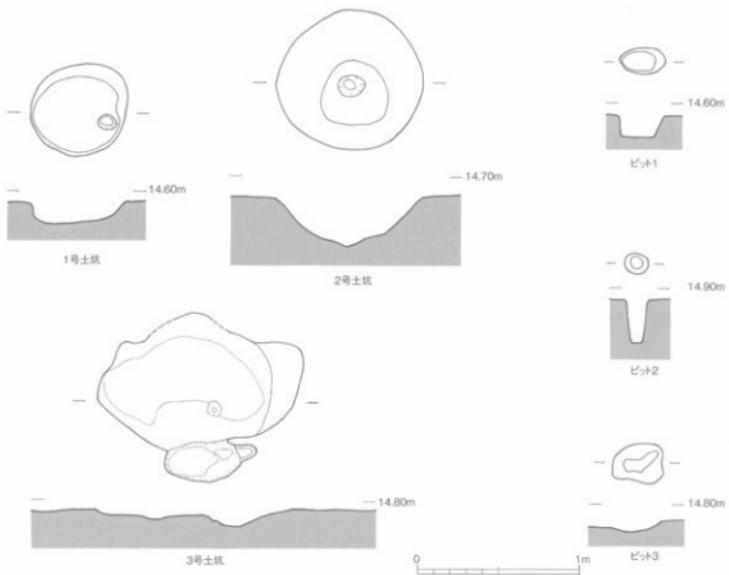
89は三角形を呈する不定形剥片を素材とする石器で、上端に細かい二次加工が施され鋭い縁辺側には使用痕と考えられる細かい剥離がみられる。90は、小型の石斧の刃部である。91は敲打による整形後に側面と上面の一部、刃部を磨いている。94・95は石斧の二次加工品で敲石として転用されたものである。96は磨石・敲石である。

(3) 土坑・ピット（第19図）

A地点では、3基の土坑が検出された。1号土坑の埋土は、黄褐色土と暗褐色土が入り混じる



第18図 2号住居跡出土石器



第19図 A地点土坑・ピット

状況で炭化物を少量含む。2号土坑の埋土は、暗褐色土で炭化物を少量含む。上部で3点の土器片が出土したが、いずれも小片であり分類不可能であった。その他の遺物の出土はみられない。3号土坑は、検出面・埋土中にも部分的に赤色焼土粒を含む部分がみられた。土坑内に礫の集積はなく、掘り込みは浅い。ピットは、3基検出された。規則的な配置はみられない。ピット2は石灰岩盤に至っている。

第5節 B地点の調査

B地点は、遺跡の南東側の調査区である。平成17年度の確認調査結果をもとに調査区を設定し、平成18年度・平成19年度と調査を実施した。調査は、黒色包含層や遺構の一部と思われる石灰岩礫を手掛かりに調査範囲を適宜拡張し調査を進めた。調査区南側では、包含層が削平され基盤層である赤褐色土面で4号住居跡・5号住居跡・6号住居跡・15号住居跡や円形のにぶい褐色部分の周辺にピット群が検出された。北側(A地点側)でも、同じく赤褐色土面で11号住居跡が検出された。旧地形は、調査区中央部分に向けて緩やかに落ち込むような地形であったと考えられ、土器を中心にも量の遺物を含む包含層が比較的厚く堆積していた。この黒色層面では、7号住居跡・8号住居跡・9号住居跡・10号住居跡・13号住居跡・14号住居跡が検出された。いずれも住居跡の周囲に廻らされていてと考えられる石灰岩礫の配列の一部が確認されたが、住居跡のプラ

ンを明確に示すような状況ではなく、切り合い関係を含めた住居跡プランの把握は困難を極めた。B 地点では、 $5\text{ m} \times 5\text{ m}$ を基本としたグリッドを設定し、住居跡のプランが明確でない C3・C4・C5 区では黒色層を全体的に掘り下げながら遺構検出作業を行った。また、遺構の可能性がある箇所については、サブレンチを設定し遺構の把握を試みた。

(1) 4号住居跡（第 20 図）

4号住居跡は、長軸 4.5 m 、短軸 3.3 m の長方形のプランである。赤褐色土面で検出された。北壁は基盤岩である石灰岩盤に接している。北壁中央部付近から、間仕切りをするように石灰岩が配置される。サブレンチを設定し、掘り下げを行った。埋土の上層部分からは、土器片が集中して出土した。礫層をはさみ下層は、遺物をほとんど含まず床面に至る。床面には焼土が確認された。検出面から床面までは 45 cm である。

土 器

第3類（第 21 図 97）

97 は頸部がしまる壺である。頸部下端は緩い突帯状の肥厚が廻る。外面は丁寧なナデ調整が施される。内面は、頸部と胴部の接合部に指おさえのくぼみが筋状に残る。胎土の混入物は、 1 mm 以下の粒子が中心であるが、 2 mm 程度の鉱物粒も含む。

第8類（第 21 図 98～第 22 図 106・108）

100 は口縁部の中央をやや窪ませ口縁部下端にぶい稜をなす。内外面ともにでこぼこしている。101・102 は同一個体と思われる。口縁部はほぼ直口するが、突起部はやや外反する。口縁部下端が横ナデにより窪められ肥厚が強調される。口縁部上端に 2 個一組の山形突起を有する。突起の数は 2 組あることは確実であるが、4 組を想定し図化した。推定口径 26 cm である。内外面ともナデ調整が施されるが、指押さえの痕がやや残り、でこぼこしている。胎土は 1 mm 以下の鉱物粒が中心で、焼成は良好である。103 は口縁部がほぼ直口し、口縁部下端に緩い段をなす。胴部はあまり張らずに底部に向かう器形である。胎土は、微細な鉱物粒が中心で金雲母を含む。表面はざらざらとしている。内外面とも、指おさえ痕をナデ消している。復元口径 27 cm である。104 は口縁部がやや屈曲する。内外面とも比較的丁寧に調整されている。焼成は、良好で堅緻である。105 は口縁部が幅広でやや外反する。108 は胴部片で、胎土・調整とも 103 と類似する。

第9類（第 22 図 107）

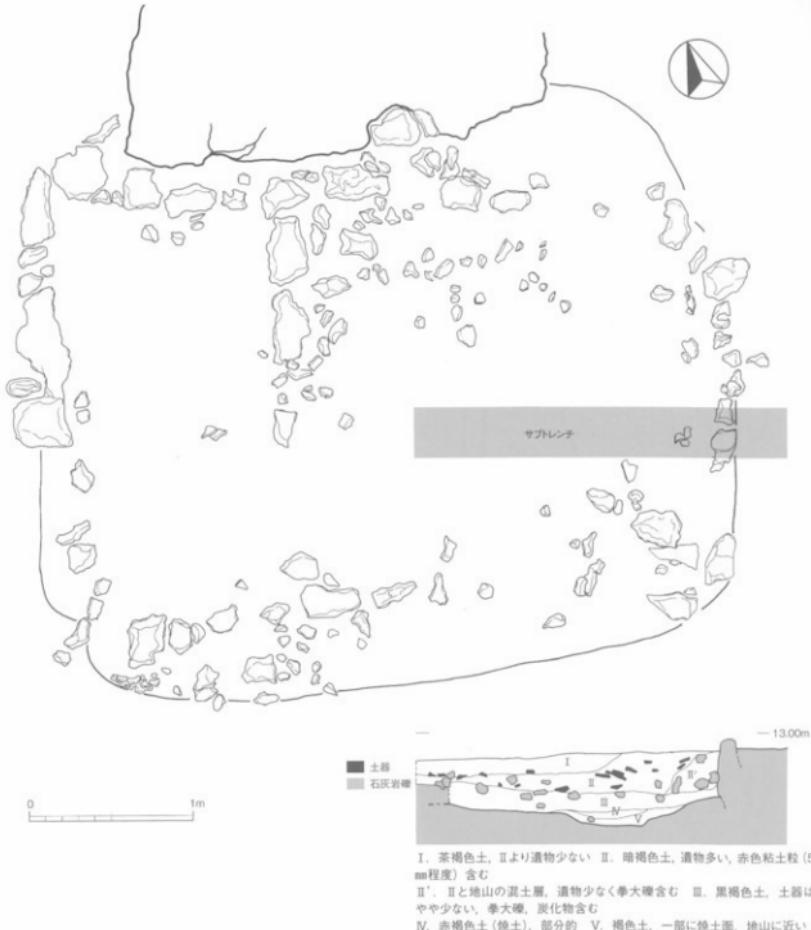
107 は、口縁部がやや内湾する厚手の土器である。口縁部下端は、しっかりと段を形成する。復元口径 27.5 cm である。

底 部（第 22 図 109）

109 は尖底である。胎土は、102・103 と類似する。

石 器（第 23 図 116～117）

116 は、横長の橢円形状の剥片を利用し、自然面が残る。上端右側面を自然面側から二次加工を加え、基部・刃部整形を行っている。117 は、石斧の欠損品で、刃部が潰れていることから敲石などに二次利用された可能性がある。



第20図 4号住居跡

検出土器

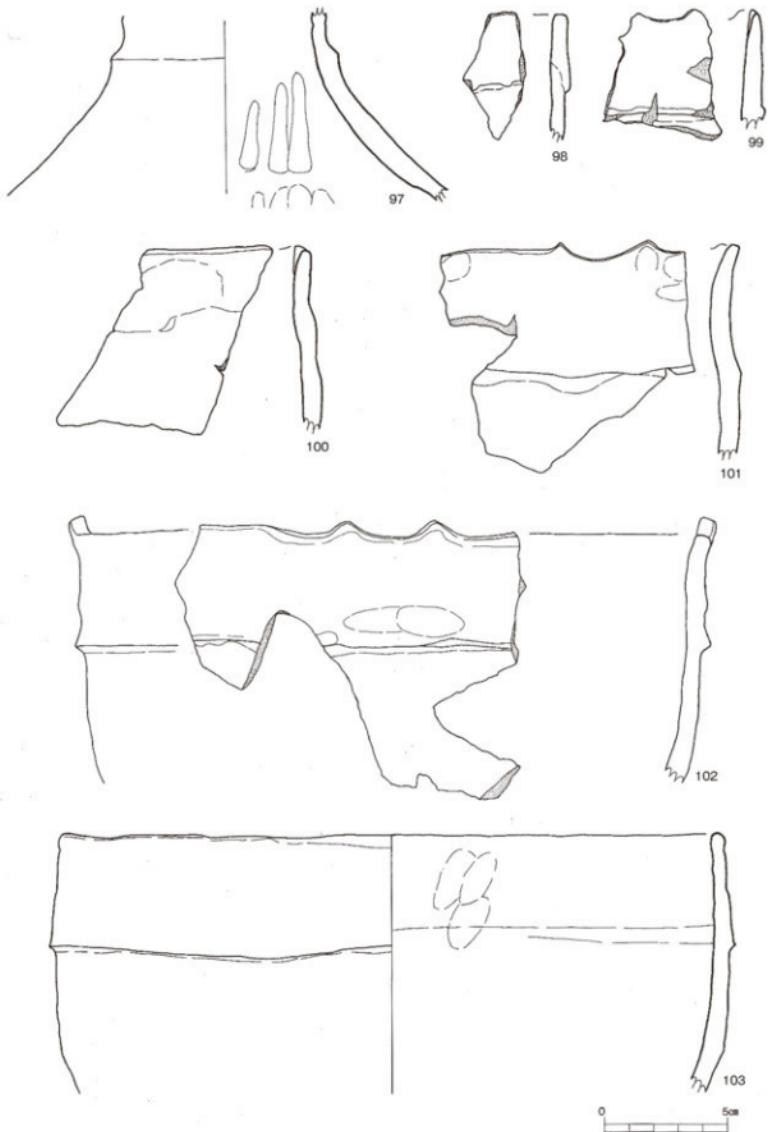
第4類（第22図110）

110は口縁部断面が三角形状を呈する。

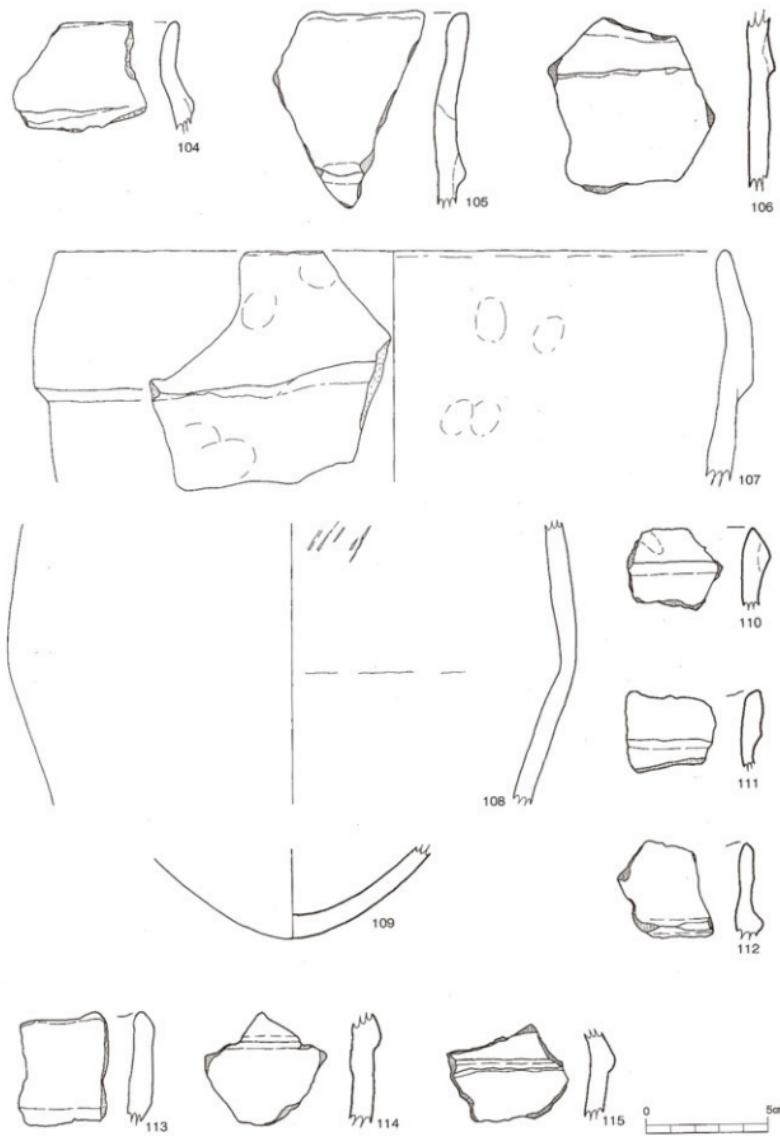
第6類（第22図111）

111は口唇部が突起状を呈すると思われる。

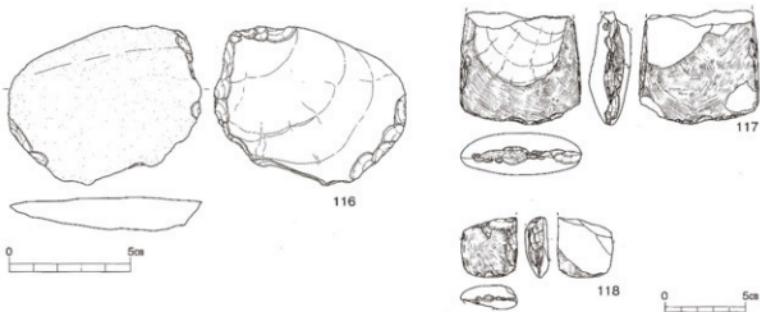
第8類（第22図112～115）



第21図 4号住居跡出土土器



第22図 4号住居跡・検出面出土土器



第23図 4号住居跡・検出面出土石器

112は口縁部下端が張り出し、突帯状をなす。113は口唇部が突起状を呈すると思われる。口縁部下端はわずかな段をなす。胎土に混入物が多く、やや脆い。

石 器（第23図 118）

118は、小型の磨製石斧の破損品で、加工工具と思われる。

（2）5号住居跡（第24図）

5号住居跡は、赤褐色土面で検出された住居跡で、長軸3.7m、短軸2.4mの不定形のプランである。周囲に7基のピットが不規則に検出された。4分の1を掘り下げた。埋土は、上層に暗赤褐色土、そして礫が集中する面をはさみ、遺物がやや多い暗褐色土が堆積する。床面の一部は、基盤の石灰岩に至る。南壁外側には、暗褐色土の部分があり、焼土が確認された。

土 器

第3類（第25図 119）

119は口縁部下端に段をなす。ナデ調整が施され、焼成は良好である。

第8類（第25図 120～124）

121は幅広の口縁部である。122・123・124は口縁部下端が肥厚する。内外面ともナデ調整が施されるが、指押さえの痕を残し、でこぼこしている。121・122・123・124は胎土に微細な混入物を含み、焼成も良好で共通した質感をもつ。

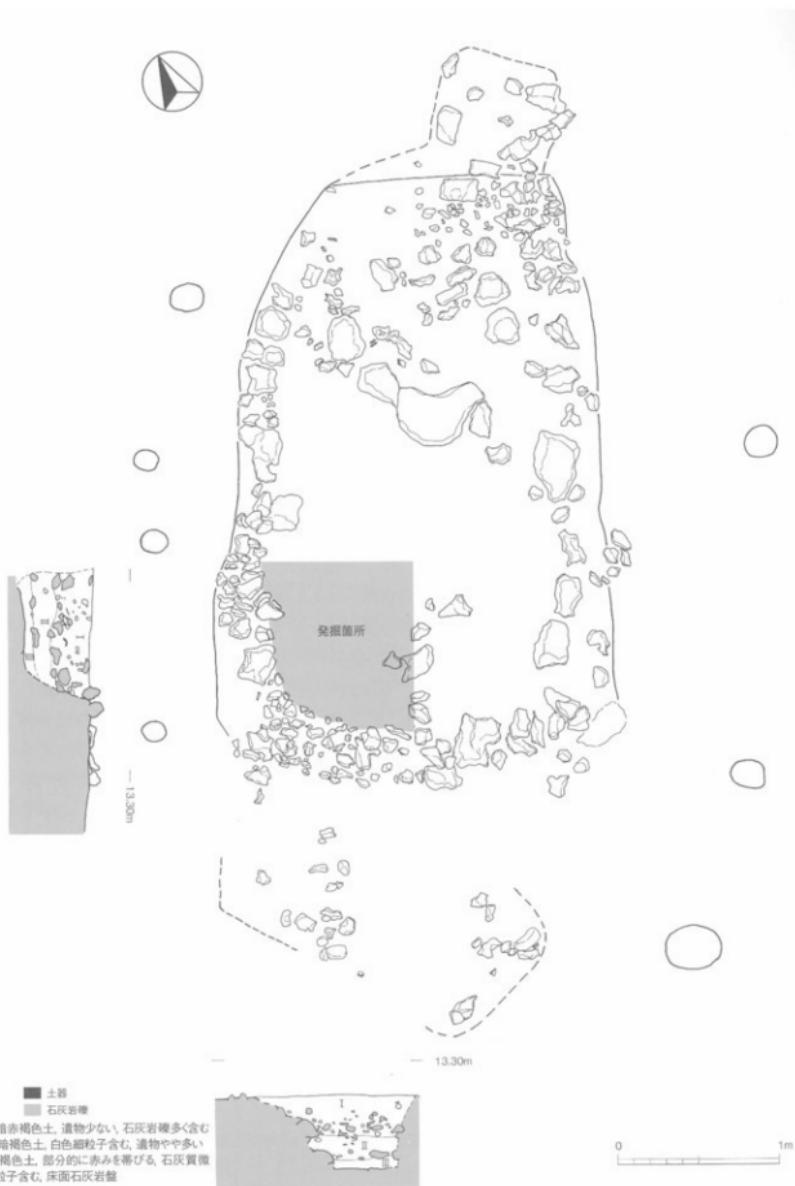
第10類（第25図 125）

125は弧状の外耳を付する。

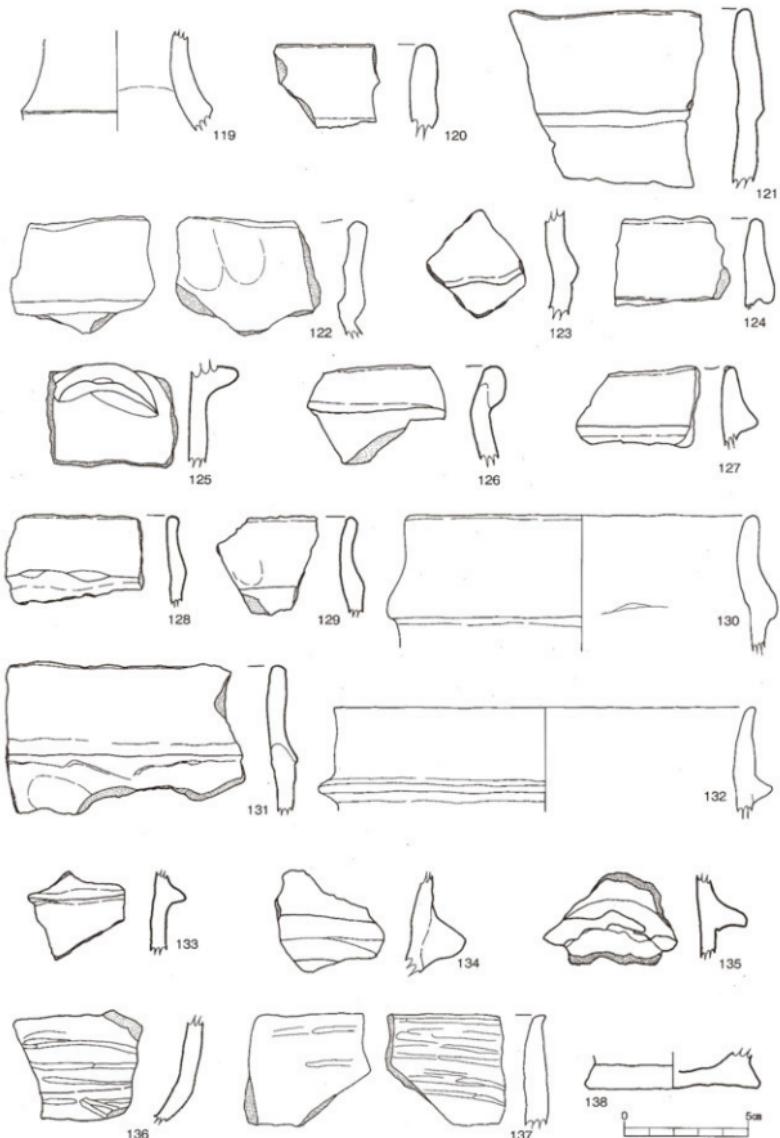
検出面土器

第4類（第25図 126）

126は口縁部断面が蒲鉾状を呈する。



第24図 5号住居跡



第25図 5号住居跡・検出面出土土器

第7類（第25図127）

127は口縁部下端が肥厚し段をなす。

第8類（第25図128～132）

128は、わずかに肥厚した口縁部で緩やかな段をなす。130は屈曲した口縁部で段をなす。復元口径14cmである。131は口縁部下端が肥厚し段をなす。132は、口縁部先端がやや外反する。口縁部下端は突帯状をなす。復元口径17cmである。

第10類（第25図133～135）

133・134は直状の外耳を付する。135は弧状の外耳である。

第11類（第25図136）

136は浅鉢形土器の破片と思われる。外面はミガキが施される。胎土は、混入物が少なく焼成は良好である。

第12類（第25図137）

137は口縁部上端がわずかに張り出す土器である。内外面にミガキが施される。

底部（第25図138）

138は、ややくびれた平底である。

（3）6号住居跡・15号住居跡（第26図）

6号住居跡は、長軸3.3m、短軸2.6mの長方形プランをなす、15号住居跡と切り合い関係にあり、6号住居跡が15号住居跡を切っている状態である。6号住居跡側に2基、15号住居跡側に1基ピットが確認された。6号住居跡は検出面に多数の石灰岩礫が確認でき、埋土の大部分を石灰岩礫が占めている。6号住居跡は、35cmで床面の石灰岩盤に至る。

15号住居跡は、6号住居跡に切られる住居跡である。北壁側部分は石灰岩除去事業による搅乱があり一部崩壊している可能性があるためプランは確定できない。埋土は上層に遺物が集中し、下位の焼土粒などを含む層では遺物の出土はあまりみられない。一部に砂を多量に含む部分が確認された。また、床面に赤く焼けた焼土面が確認された。検出面から床面までの深さは55cmである。

6号住居跡土器

第8類（第27図139～141）

139は、口縁部下端が肥厚し段をなす。内外面とも比較的丁寧なナデ調整が施される。胎土の混入物は少なく、焼成は良好である。140・141は、口縁部下端がわずかに肥厚する。

石器（第37図241）

241は、台石である。表裏の平坦面に擦痕がみられる。

15号住居跡土器

第1類（第27図142）

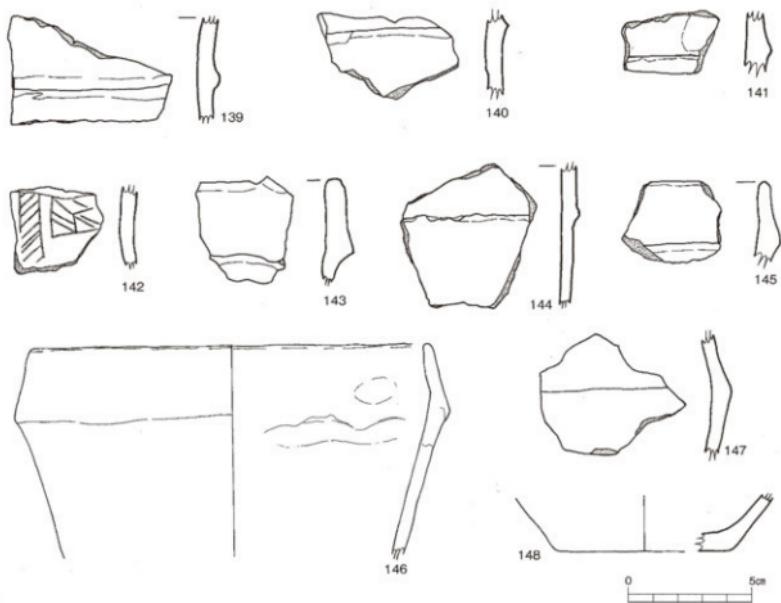
142は縦位と横位の沈線区画に斜位の短沈線を施す。

第8類（第27図143～144）

143は口唇部に突出を有する。144は口縁部下端が肥厚し段をなす比較的薄手の土器である。



第26図 6号・15号住居跡



第27図 6号・15号住居跡出土土器

第9類（第27図 145～147）

145・146・147は口縁部が屈折し、内傾する器形である。屈折部分がわずかに膨らみにぶい稜をなし、この部分が最大径となる。胎土に1mm以下の白色鉱物粒を含む。胎土・調整ともに類似している。146の復元径は17.5cmである。

底部（第27図 148）

148は胎土の混入物や器壁の厚さが第9類と類似しており、第9類に伴う底部の可能性がある。

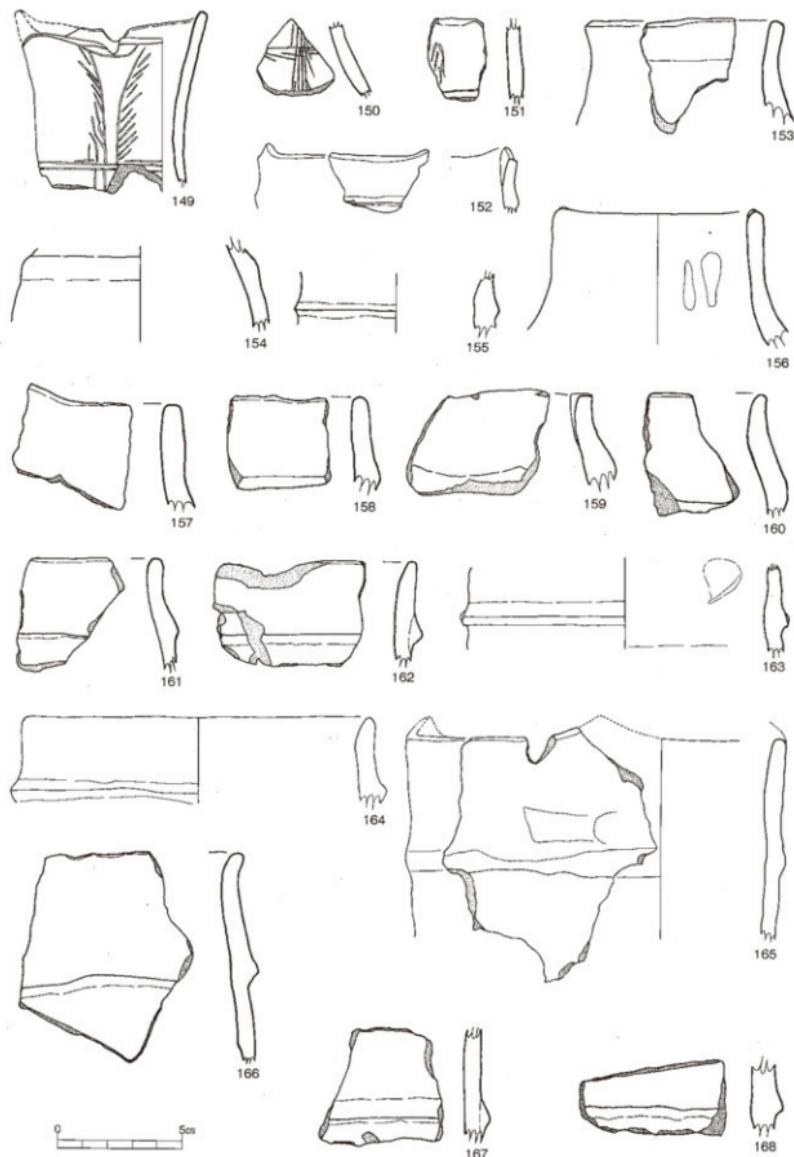
6号・15号住居検出土器

第1類（第28図 149～151）

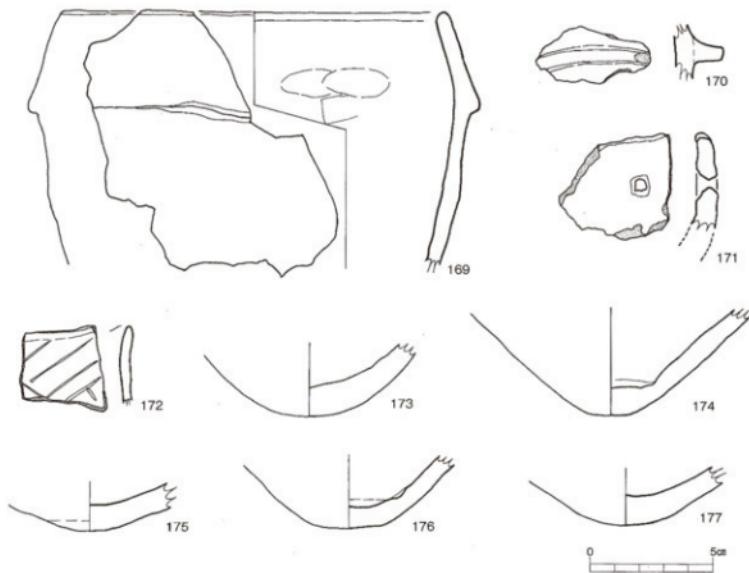
149は口唇部に向かい外反する器形で、2箇所に抉りを有し、その下位に弧状の沈線が施される。頸部は、縦位と横位の沈線で区画され、縦位の沈線には斜位の短沈線が組み合わされる。縦位の沈線は、図化されている面がY字状、反対側はX字状である。口縁部の上面観は、楕円形を呈する。薄手の土器で、胎土に金雲母を含む。151は斜位の短沈線のみで文様が構成される。

第2類（第28図 152）

152は口縁部が肥厚するもので、山形口縁をなす。



第28図 6号・15号住居跡検出面出土土器(1)



第29図 6号・15号住居跡検出面出土土器(2)

第3類（第28図 153～156）

153・156は短頸の壺形土器である。154は頸部下端が緩やかな突帯状を呈する。

第8類（第28図 157～168）

157は山形口縁と思われる。胎土には、微細な粒子を含み焼成は良好である。162・164は口縁部下端が突帯状に肥厚する。164の復元口径は14cmである。165は山形で幅広の口縁部である。内外面とも工具による調整をナデ消している。復元口径は15.5cmである。159・160・161は、口縁部がやや屈曲する口縁部で、口縁部下端に段をなす。

第9類（第29図 169）

169は口縁部が内傾し、下端に段をなす。最大径は口縁部下端にあり、復元径は18.5cmである。

第10類（第29図 170）

170はやや弧状を呈する外耳である。

第11類（第29図 171）

171は塊形土器の口縁部と推定される土器で、穿孔がみられる。内外面とも、鉱物粒が抜け落ちた痕跡が多くみられる。

第 12 類（第 29 図 172）

172 は薄手の土器で、斜位の沈線が施される。縄文時代後期相当の時期も考えられる。
底 部（第 29 図 173～177）
底部は、いずれも尖底で、173 は丸底気味である。
石 器（第 37 図 240）
240 は、円礫を素材とした剥片石器で、鋭い縁辺部に細かい剥離がみられる。

（4）7 号住居跡（第 30 図）

7 号住居跡は、長軸 3.6m の長方形プランであると推測される。南東壁は赤褐色土面でプランが確認できるが、北西壁は黒褐色土面で石組の配列もみられず住居跡プランははっきりとしない。黒褐色土面には住居跡の石組みを示すような石列があり、複数基の切り合いが推測される。検出面から床面までは 50 cm である。埋土中には、比較的石灰岩礫が多い。

土器

第 8 類（第 31 図 178～183）

178・179 はやや幅の狭い口縁部で下端が肥厚し段をなす。183 は厚手の土器で突帯状の張り出しを持つ。胎土には、微細鉱物粒が多く、金雲母も含む。焼成は良好である。

第 9 類（第 31 図 184～185）

184・185 は口縁部が内傾するもので、口縁部下端がわずかに肥厚し、不明瞭な段をなし、この部分が最大径となる。185 の復元径は 17 cm である。焼成は良好である。

第 12 類（第 31 図 186～187）

186 は口縁部がわずかに肥厚するもので、胴部にかけて緩やかに膨らむ器形が想定される。調整は難で表面はでこぼこしている。187 は斜位の沈線が確認できるが、摩滅が激しく詳細は不明である。

7 号住居跡検出土器

第 3 類（第 32 図 188）

188 は壺形土器の口縁部で復元口径 7.5 cm である。やや外反し、口唇部は先細りである。胎土は、泥質で混入物をあまり含まない。

第 4 類（第 32 図 189）

189 は断面が蒲鉾状に肥厚する。

第 5 類（第 32 図 192）

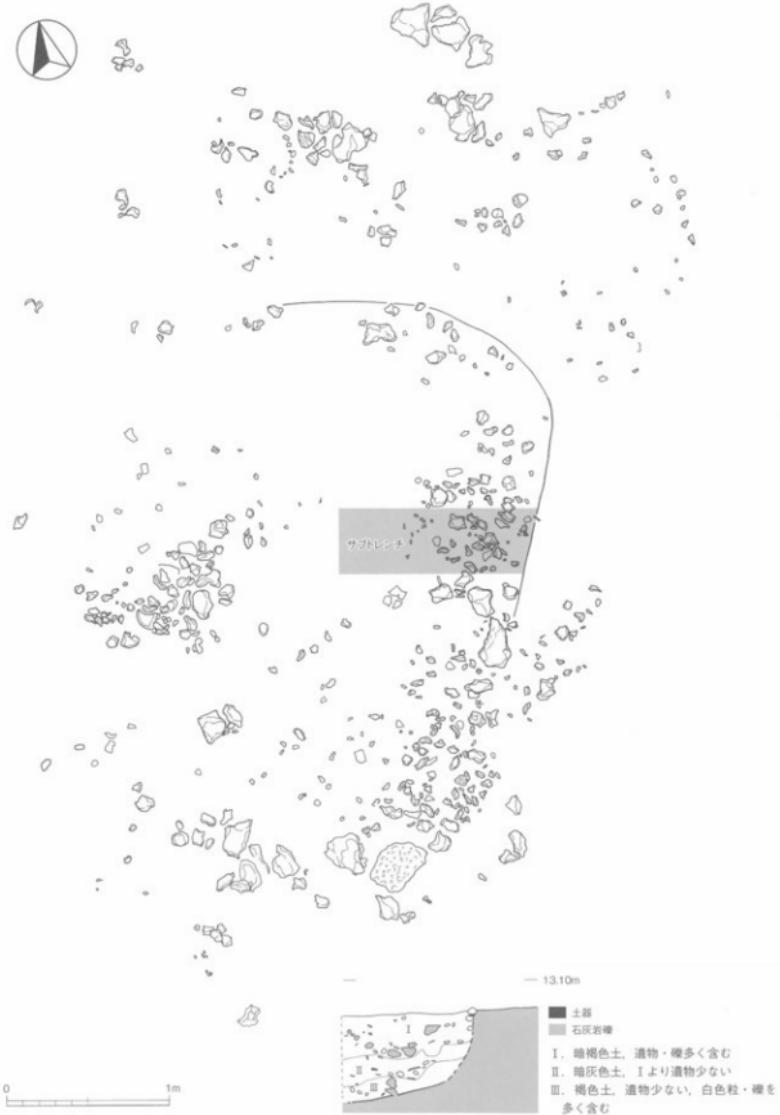
192 は口縁部が長方形状に肥厚する。口縁部下端にわずかな段をなす。復元口径 16 cm である。

第 6 類（第 32 図 190～191）

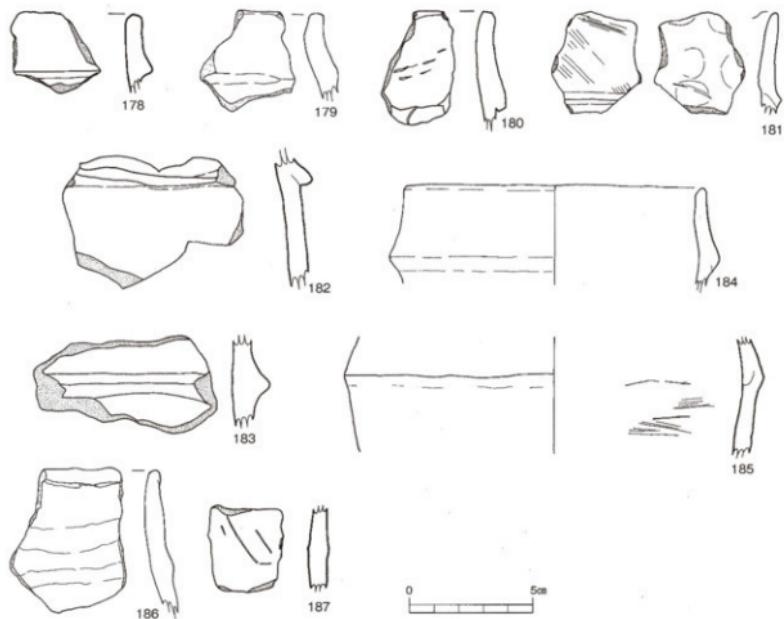
190・191 は口縁部が肥厚する薄手の土器である。

第 7 類（第 32 図 193～194）

194 は口縁部下端がやや肥厚し段をなす。



第30図 7号住居跡



第31図 7号住居跡出土土器

第8類（第32図 195～203）

195は泥質の胎土で石英粒などをわずかに含む。197は厚手の土器で胎土に鉱物粒、金雲母などを多く含む。口縁部上端に突起を有する。199は口縁部下端が突帯状をなす。200は口縁部下端が突帯状に張り出す。201は山形口縁の頂部である。202は口縁部外面に粘土紐を貼り付けている。

第10類（第32図 204～206）

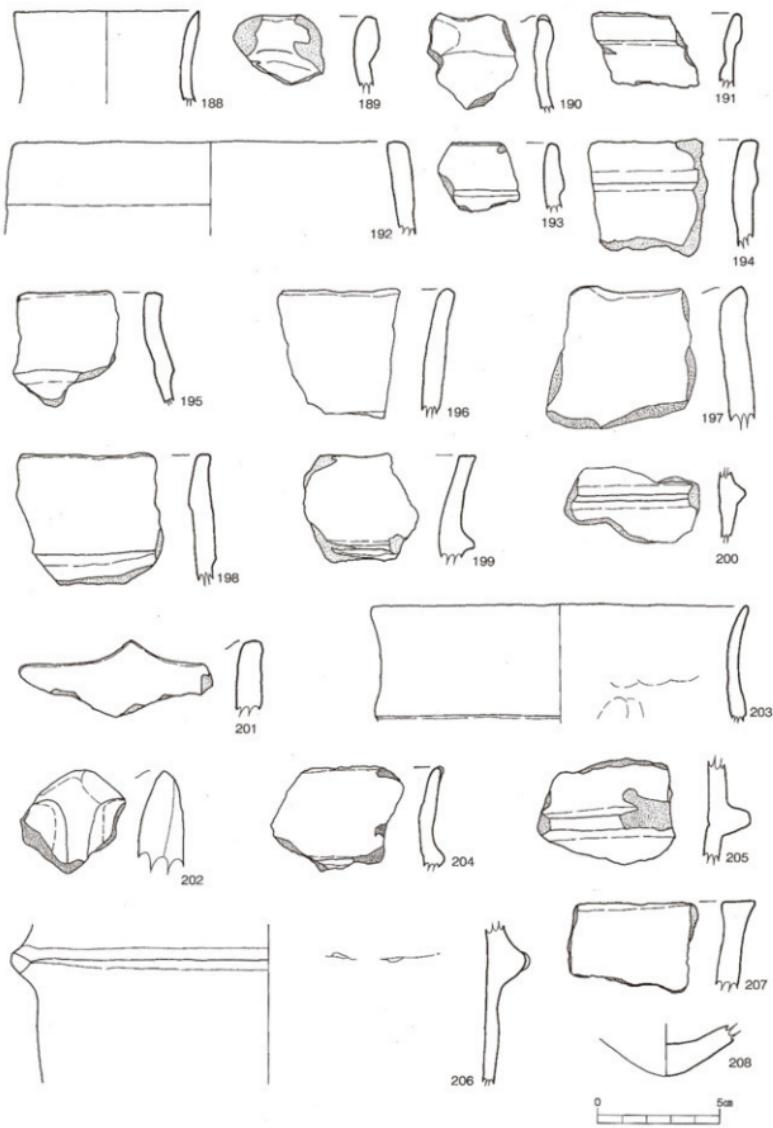
204・205・206は直状の外耳を有する。

第12類（第32図 207）

207は口唇部が平坦をなし、やや張り出るものである。内外面とも比較的丁寧なナデ調整が施される。

底部（第32図 208）

208は尖底である。



第32図 7号住居跡検出面出土土器

(5) 8号住居跡・14号住居跡（第33図）

8号住居跡は、長軸3.4m、短軸2.2~2.9mと推定される。西壁側の石組みは70cmほど幅があり、廃棄された住居跡の壁の一部を再利用し、その内側に新たな住居跡の石組みを構築した可能性がある。サブトレレンチを設定し掘り下げた結果、外側にもう一つの壁面の石組みが確認された。さらにその南東側には、深い掘り込みがあり、8号住居跡とその外側に別の住居跡が存在している可能性が高い。この遺構を8号住居南側遺構としておく。遺構中央部（サブトレレンチ北西端）で、20cm×20cmで柱状に埋土サンプルを採取した。検出面から床面までは40cmである。遺構中央部床面は石灰岩盤に至る。

14号住居跡は、8号住居跡に切られる住居跡である。サブトレレンチ設定部分で、床面まで55cmである。床面付近で磨石が出土した。8号住居跡に比べ、周囲の石組みはまばらである。

8号住居跡土器

壺形土器頸部（第34図209）

209は壺形土器の頸部片である。頸部がしまり、口縁部に向けて外反する器形が推定される。

第8類（第34図210・212）

210・212は幅広の口縁部で下端に不明瞭な段をなす。

第9類（第34図211）

211は口縁部が内傾する土器で、口縁部下端に段をなし、この部分が最大径となる。復元径は27cmである。胎土に混入物をあまり含まない。内外面とも比較的丁寧なナデ調整がほどこされ、焼成は良好である。

石器（第37図242）

242は磨製石斧の基部である。

8号住居跡南側遺構土器

第1類（第34図213）

213は壺形土器の頸部で縦位・横位の沈線と斜位の短沈線が組み合わされる。

第4類（第34図214~215）

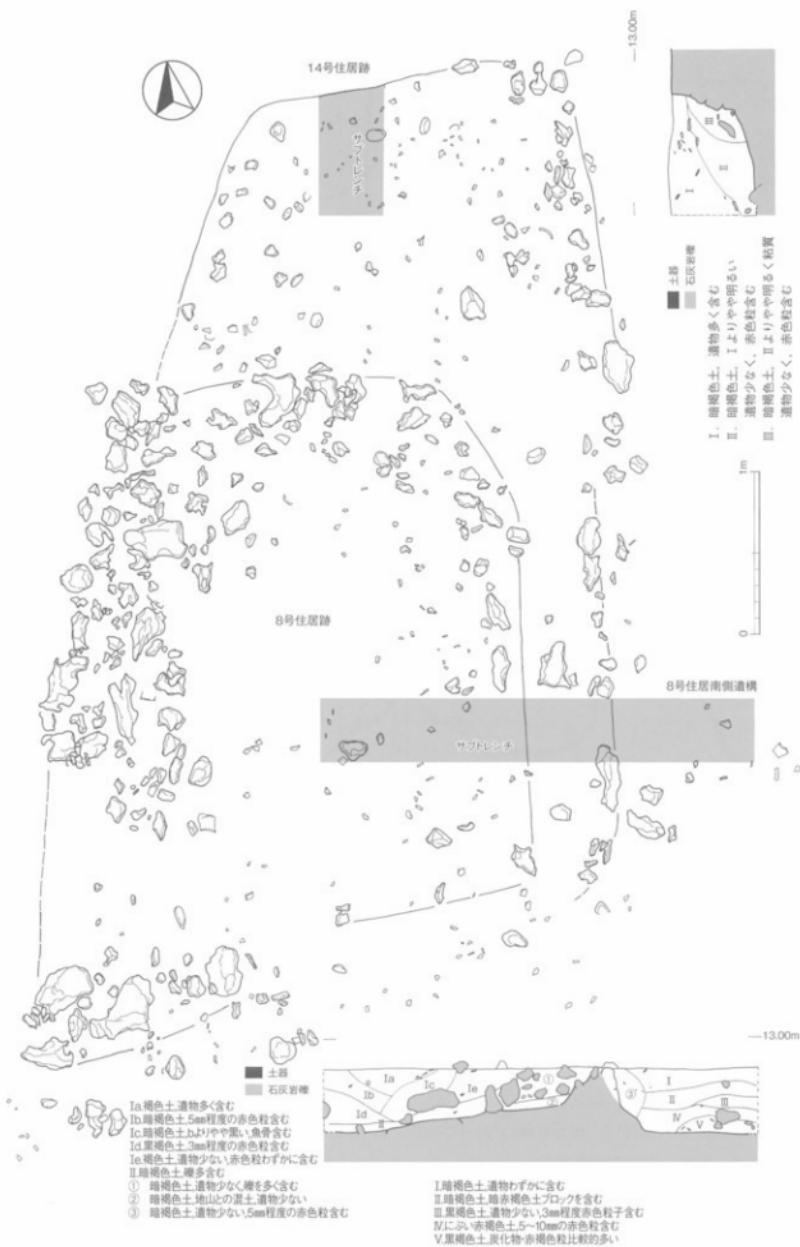
214は口縁部が丸く肥厚する。215は口縁部が強く外反し、肥厚部を形成する。内面には、指おさえ痕と工具による横位の調整痕を残す。復元口径25cmである。

第7類（第34図216）

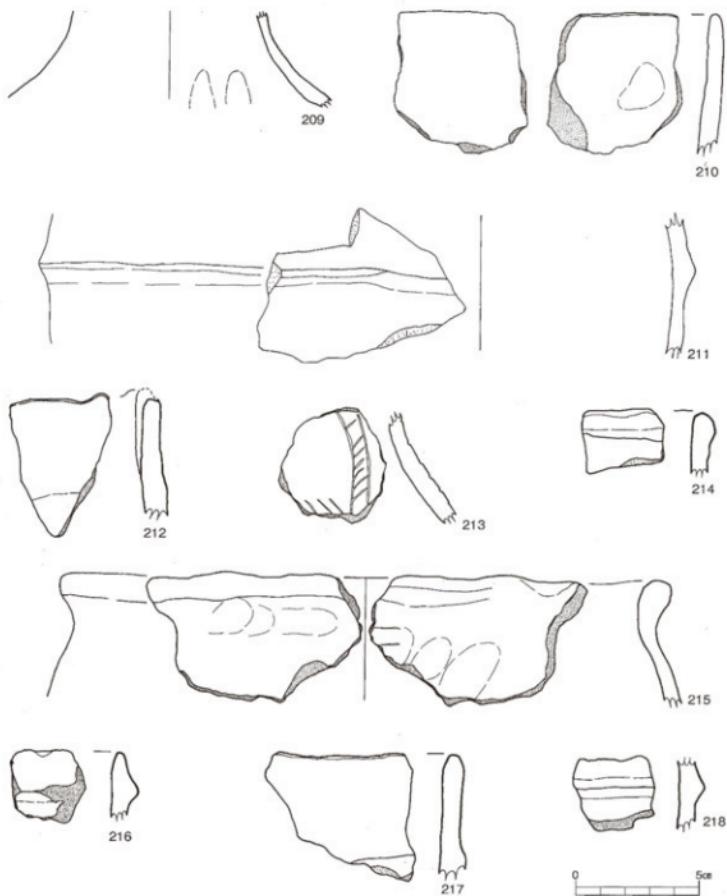
216は泥質の土器で、口縁部下端が肥厚し段をなす。黒褐色を呈している。

第8類（第34図217~218）

217は幅広の口縁部で、口縁部下端に段を有する。



第33図 8号・14号住居跡

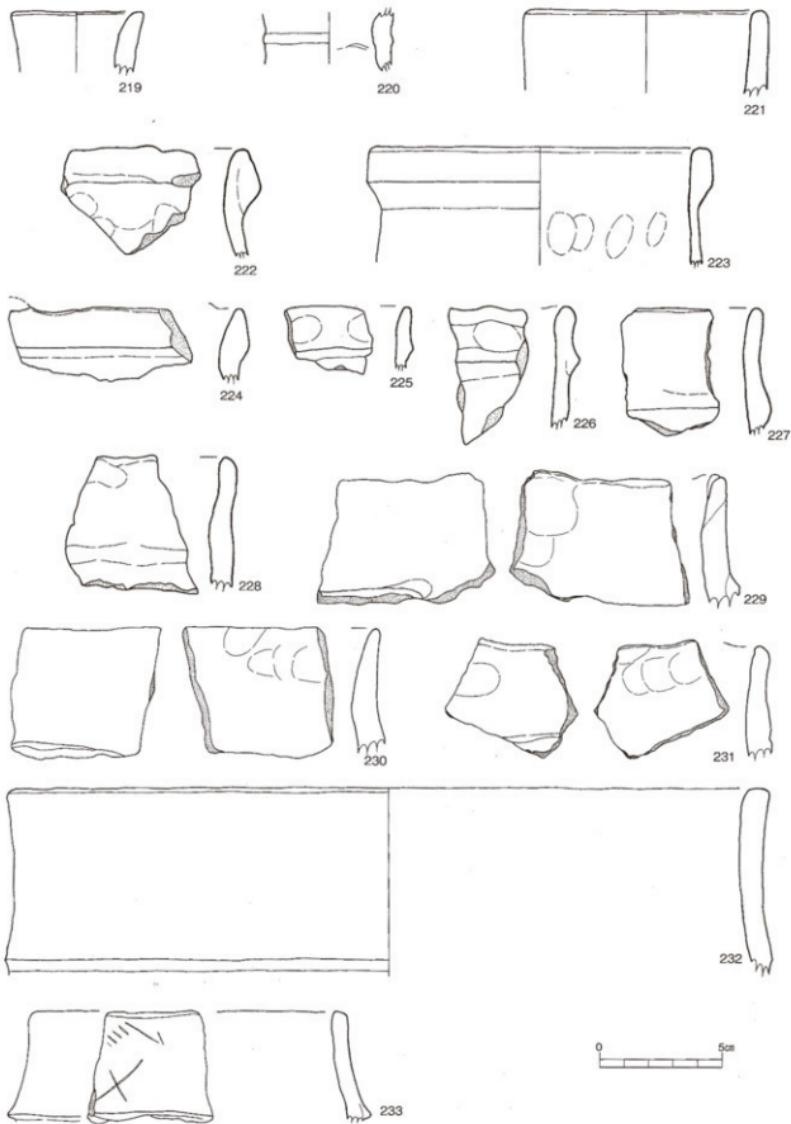


第34図 8号住居跡・南側遺構出土土器

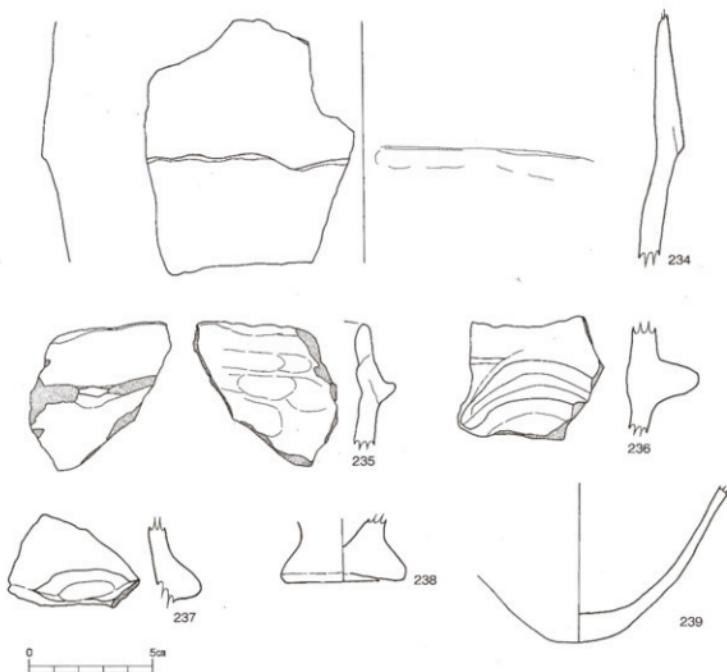
8号住居跡検出土器

第3類（第35図219～221）

219は壺の口縁部で、復元口径5.5cmである。胎土は、泥質で混入物はほとんどみられない。
220は、頸部下端に段を有する。



第35図 8号住居跡検出面出土土器(1)



第36図 8号住居跡検出土器(2)

第4類（第35図222）

222は口縁部断面が三角形状に肥厚する。

第5類（第35図223～224）

223・224は口縁部断面が長方形状を呈する。223は復元口径14cmである。224は、口唇部に突起を有すると思われる。

第6類（第35図225）

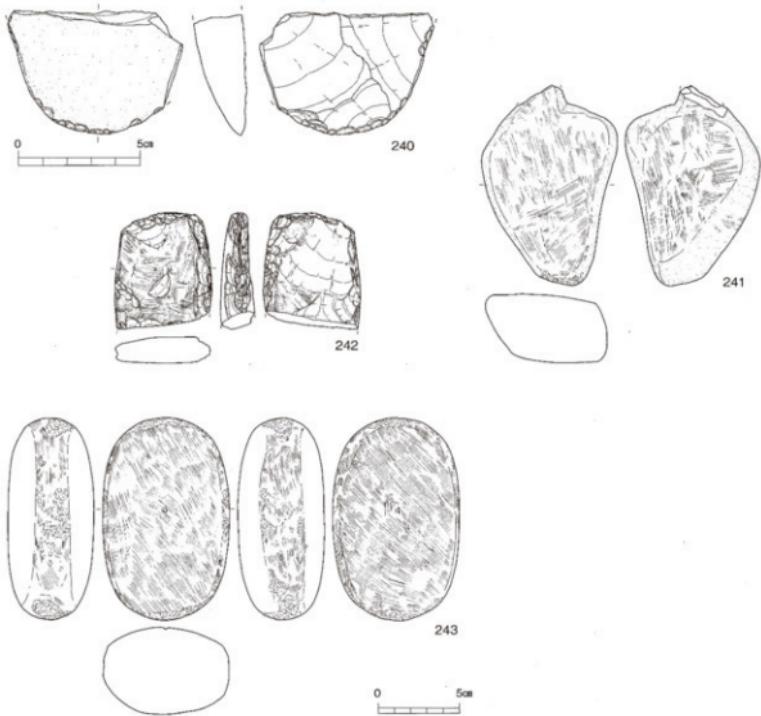
225は口縁肥厚部に押さえの痕を残す。

第7類（第35図226）

226は口縁部中央付近を指押さえにより窪ませて下位の肥厚を強調している。

第8類（第35図227～233）

227・228は口縁部下端がわずかに肥厚する。229・230は口縁部下端が肥厚し段をなす。229は、口唇部の突起状の部分のみ強く指で押さえ、粘土を延ばし整形していることが分かる。230・231は山形口縁である。232は幅広の口縁部で下端にわずかな段をなす厚手の土器である。外



第37図 6号・8号・10号住居跡出土石器

面は、ナデにより丁寧な調整が施される。復元口径 31 cm である。233 は、内傾する口縁部で下端に段をなす。調整は丁寧で焼成も良好である。復元口径 13 cm である。

第9類（第36図 234）

234 は口縁部が内傾する土器で口縁部下端に段をなし、この部分が最大径となる。復元径は 26 cm である。ナデ調整が施されるが、内外面に指押さえの痕をやや残す。

第10類（第36図 235～237）

235 は狭い口縁部で下端が外耳状をなす。内面には、指押さえの痕を残す。236 は弧状、237 は直状の外耳が付される。

底 部（第36図 238～239）

238 は脚台状、239 は尖底である。



第38図 14号住居跡・検出面出土土器

14号住居跡土器

第3類 (第38図 244)

244は屈曲する口縁部である。土器内外面とも鉱物粒の抜け落ちた痕が多くみられる。焼成は、良好である。

第8類（第38図246～249）

246・247はやや内傾する器形で、口縁部がやや肥厚し段をなす。胎土は、微細な白色粒を含み共通した特徴を持つ。焼成は良好である。比較的薄手の土器で内外面に指おさえの痕を残す。246の復元口径は21cmである。248は厚手の土器で、口縁部下端が肥厚し段をなす。胎土は1mm程度の混入物が多く含まれる。

第10類（第38図250）

250は弧状の外耳が付される。胎土や色調が246・247と類似している。

第12類（第38図245）

245は薄手の土器で口唇部は平坦である。調整は丁寧である。

14号住居跡検出土器

第5類（第38図252）

252は口縁部断面が長方形状に肥厚する。胎土は1mm以下の鉱物粒が中心であるが、5mm程度の粒子も含む。

第6類（第38図251）

251は口縁肥厚部に指押さえの痕を残す。復元口径20.5cmである。

第8類（第38図253～254）

254は口唇部が突起をなす。

底部（第38図255）

255は緩やかな尖底である。

（6）9号住居跡（第39図）

9号住居跡は、石灰岩除去事業による搅乱により遺構の半分程度は崩壊しているものと思われる。埋土の中間に礫面をはさみ床面に至る。サブトレーナー床面では、掘り込みが確認された。検出土面から床面までは60cmである。

土器

第8類（第40図256）

256は口縁部下端に段をなす。内外面ともナデ調整が施され、焼成も良好である。

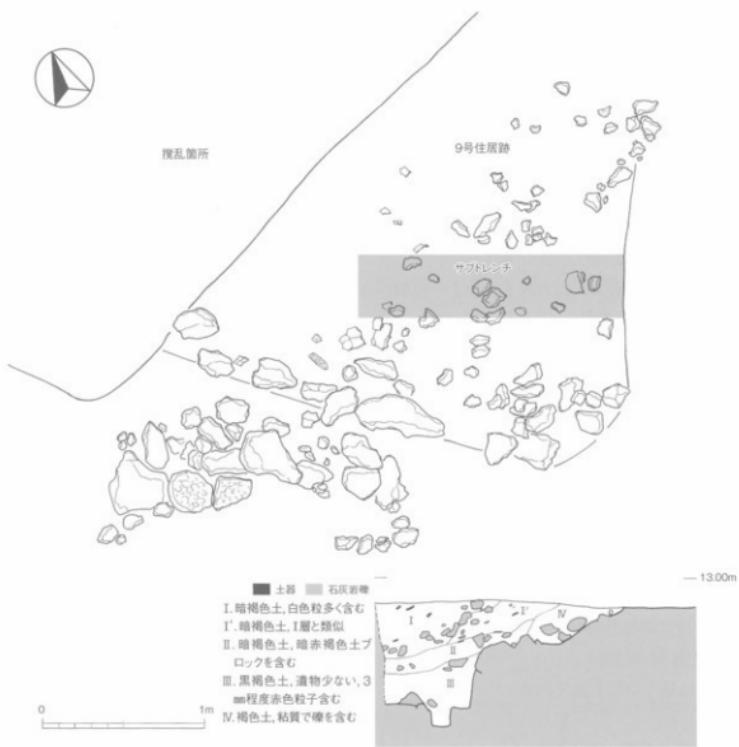
9号住居跡検出土器

第1類（第40図257）

257は頸部で縦位と横位の沈線により区画される。胎土は、白色鉱物粒を多く含む。

第2類（第40図258）

258は口縁部が扁平に肥厚し、口唇部に緩い突起を有する薄手の土器である。復元口径8cmである。



第39図 9号住居跡

第4類（第40図259）

259は口縁部が丸く肥厚する。明瞭な段をなさず、なだらかに胴部に移行する。

第5類（第40図260）

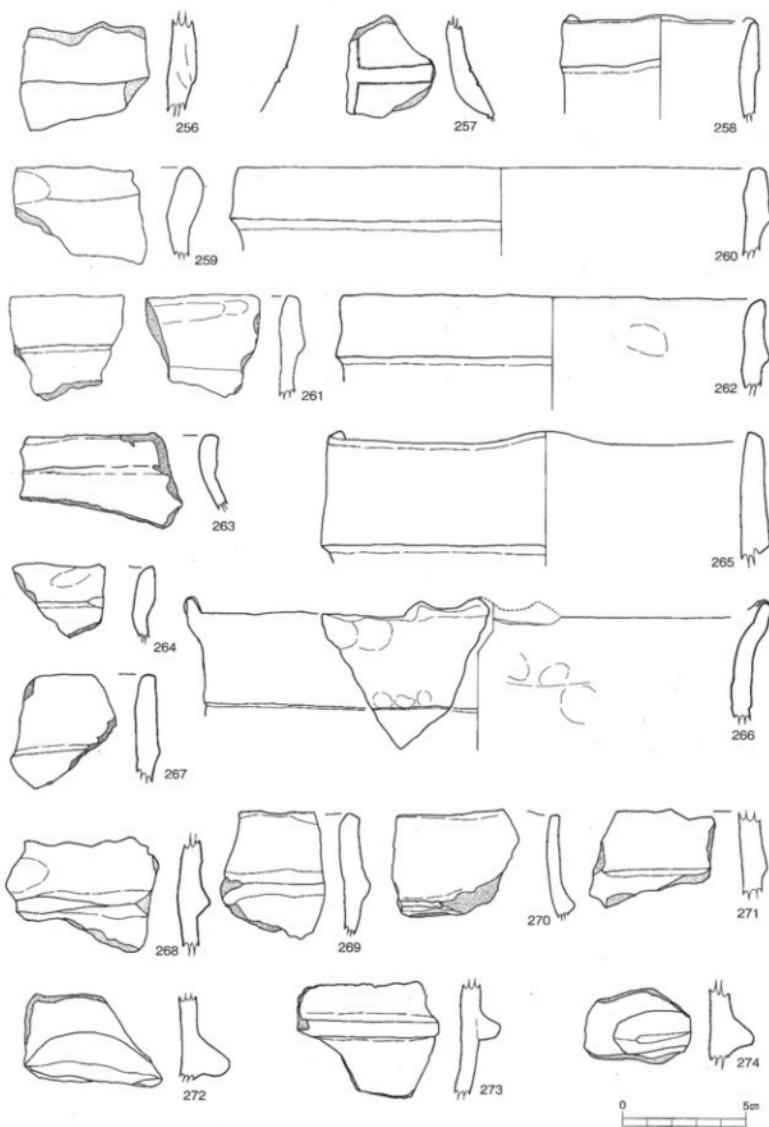
260は口縁部が長方形状に肥厚する。復元口径21.5cmである。

第7類（第40図261～264）

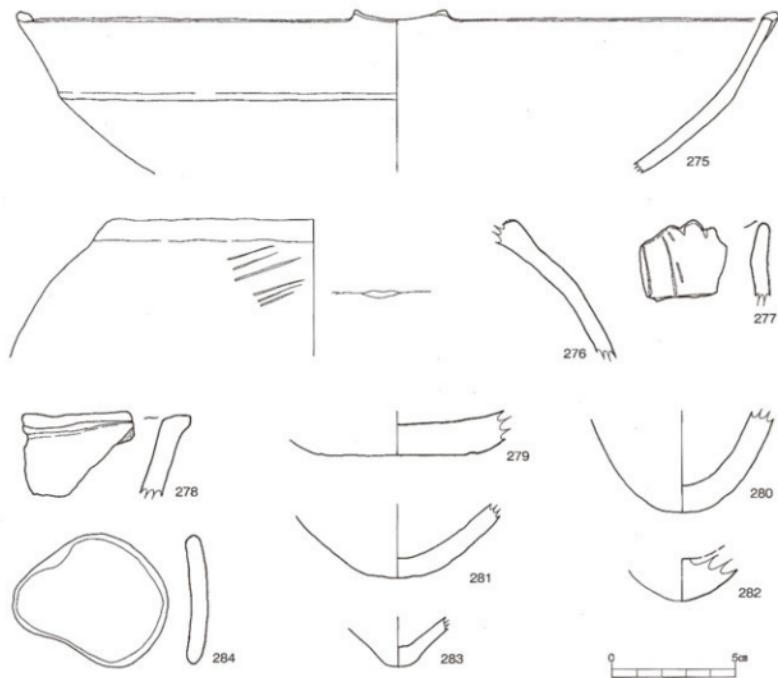
261・262・263・264は口縁部が肥厚し段をなす。262の復元口径は17cmである。

第8類（第40図265～271）

265は口縁部下位に明瞭な段をなす。復元口径18cmである。266はやや外反する口縁部で突起を付す。突起の数は3つと推定し図化した。胎土には白色鉱物粒が多く、やや脆弱である。復元口径24cmである。267は口縁部下部がやや壅み段を意識させる。268は口縁部下端が突帯状をなす。270は緩い山形口縁である。



第40図 9号住居跡・検出面出土土器



第41図 9号住居跡検出面出土土器

第10類（第40図272～274）

272は弧状、273・274は直状の外耳を付す。

第11類（第41図275）

275は浅鉢形土器で口縁部にリボン状突起を付す。突起は4組を想定している。口縁部下端はわずかに肥厚する。薄手の土器で内外面とも丁寧な調整が施される。復元口径31cmである。

第12類（第41図276～278）

276は丸みをおびた胴部片で胴上部は緩やかに肥厚する。外面には調整痕が筋状に残りでこぼこしている。277は、壺形土器の口縁部と思われる。山形口縁の頂部に2箇所抉りが入る。278は口唇面が平坦で外側に張り出すものである。内外面とも調整は丁寧である。

底部（第41図279～283）

279は平底、280・281・282は尖底である。283は薄手で乳房状を呈する。

円盤状土製品（第41図284）

284は外縁が丸く加工されている。

(7) 10号住居跡（第42図）

10号住居跡は長軸5m、短軸3.6mである。平成18年度年度のトレンチ調査時に深掘りした部分では、しっかりととした石灰岩の配置が確認できる。切り合いの可能性も考えられるが、検出面での観察では明確な把握が困難であったため、ここでは、複数基の切り合いの可能性を示しておきたい。

10号住居跡検出土器

第1類（第43図285～287）

285は横位に細い突帯を貼り付け、その両側に斜位の短沈線を施す。胎土は泥質で焼成は良好である。286は縦位と横位の沈線で区画を設け、斜位の短沈線を組み合わせる。287は斜位の短沈線で文様が構成される。

第2類（第43図288）

288は口縁部が肥厚し突起を有する。復元口径8cmの薄手の土器である。

第4類（第43図289～290）

289・290は口縁部断面が蒲鉾状・三角形状に肥厚する。

第5類（第43図291～292）

291は口縁部に突起を有する。292はやや口縁部下端に厚みをもつ。

第7類（第43図293～295）

295は緩やかな山形をなす口縁部で、肥厚部中央に指押さえによる痕が残る。復元口径13cmである。

第8類（第43図296～第44図312）

298は山形口縁部である。300は薄手の土器で焼成は良好である。301・302・303は口縁部がやや屈曲・外反する土器である。301は山形口縁をなす。復元口径は、それぞれ23cm・22cm・21cmである。303は胎土に1mm程度の石英・石灰岩粒を多く含む。305は口縁部下部が突帯状をなす。胎土には、1～2mmの石灰岩粒等を含む。

第10類（第44図313～314）

313・314は、直状の外耳を付す。

底部（第44図315～316）

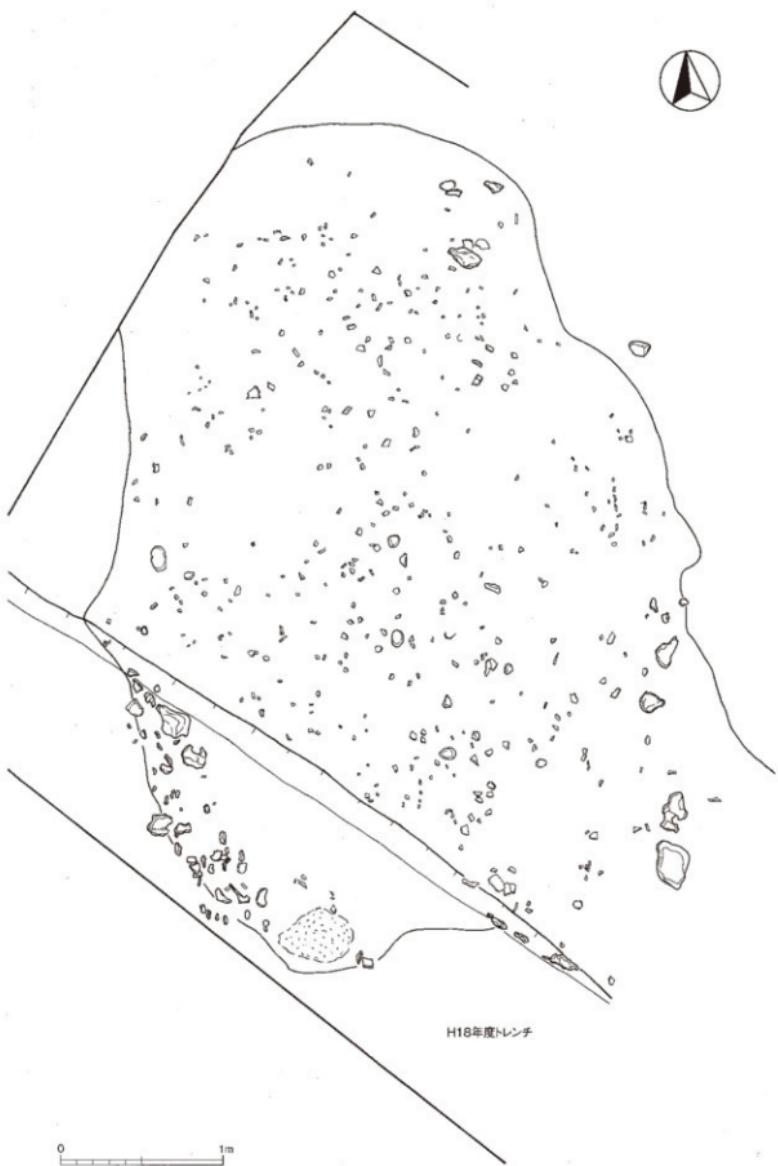
315は平底で胴部に向かい直線的に開く。316は底径の広い平底で浅鉢形が想定される。

石器（第37図243）

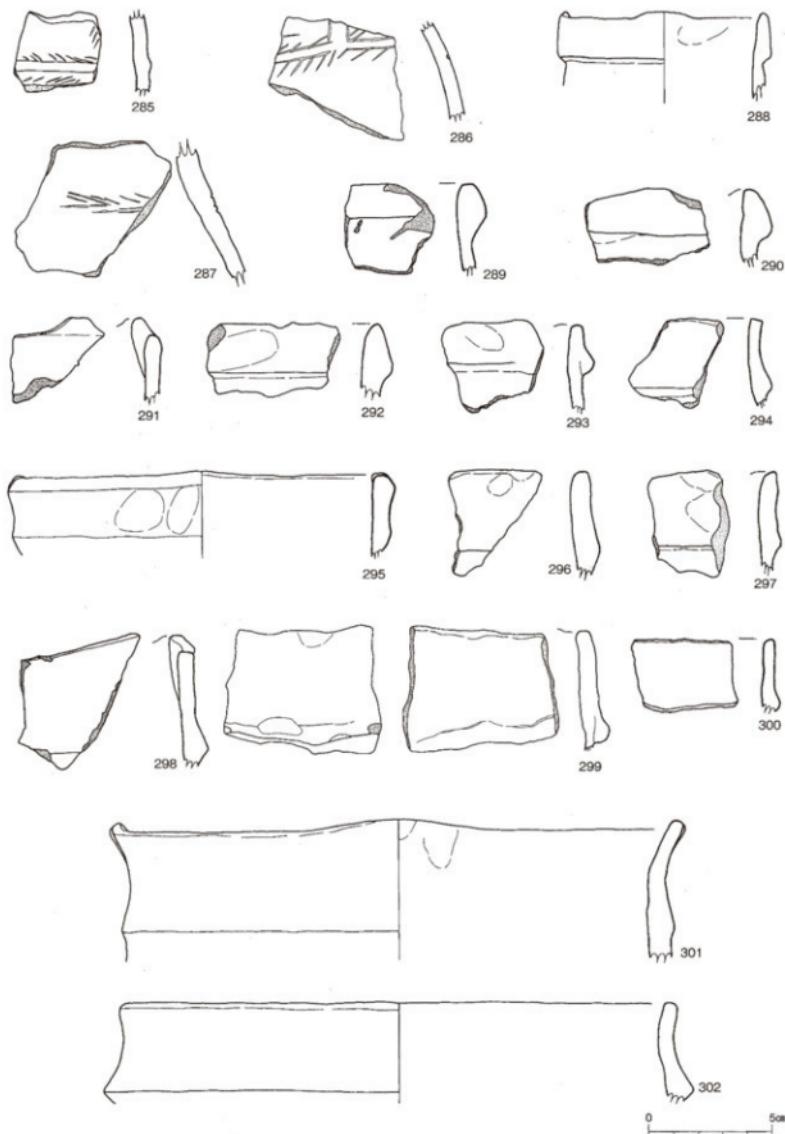
243は磨石・敲石で両端部と側面に敲打痕がみられる。

骨製品（第45図）

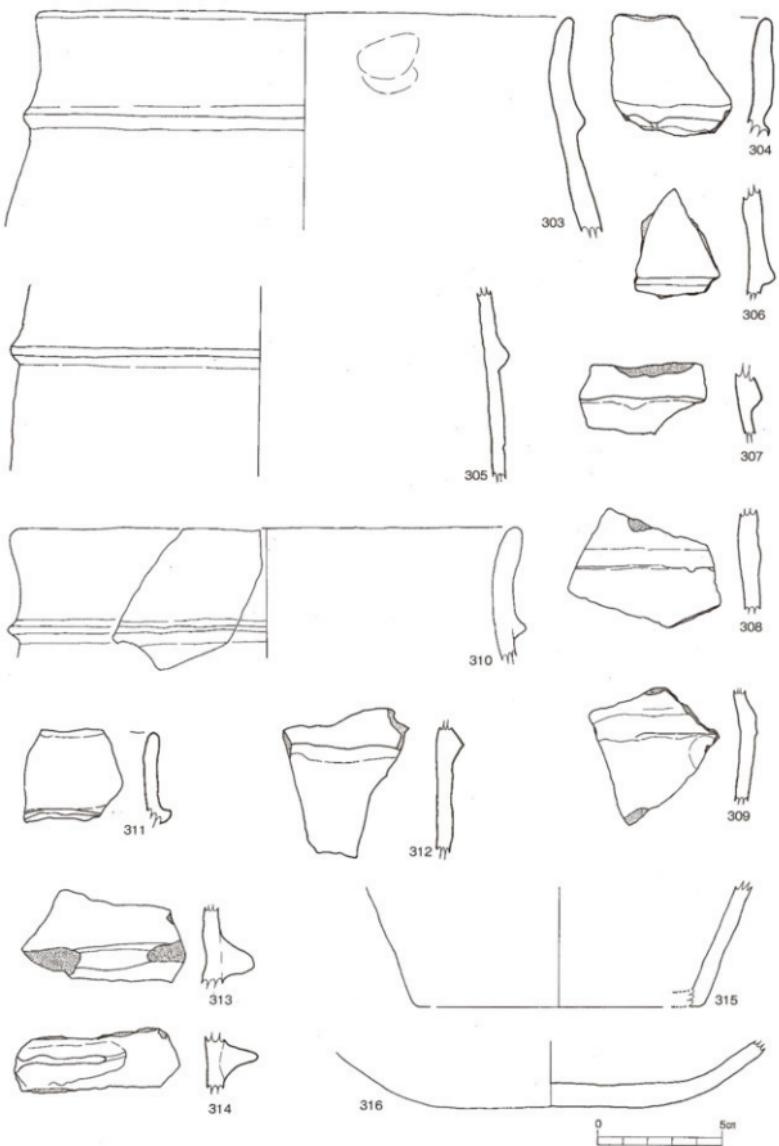
317はクジラの骨製で、かんざし状骨製品の一部と思われる。



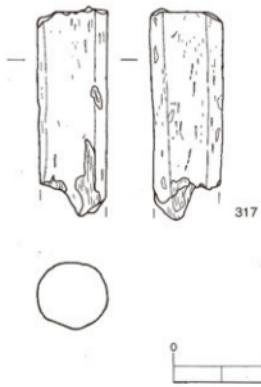
第42図 10号住居跡



第43図 10号住居跡検出面出土土器(1)



第44図 10号住居跡検出面出土土器(2)



第45図 10号住居跡検出面出土骨製品

(8) 11号住居跡（第46図）

11号住居跡は、長辺4.5m、短辺2.7mの石列が確認された。東側と南側部分は、石灰岩礫の配置がみられずプランは確定できない。北壁・西壁側は、比較的しっかりと大きな石灰岩礫が配置されている。2基の切り合いの可能性を考えサブトレンチを設定した。断面の観察では切り合い関係は確認できなかったため1基の住居跡と考えたい。埋土中には石灰岩礫をほとんど含まない。遺構の中央部付近（サブトレンチ南端）で20cm×20cmで柱状に埋土のサンプリングを行った。

第1類（第47図318）

318は壺形土器の頸部で、縦位の沈線と斜位の短沈線が組み合わされる。

第8類（第47図319～328）

319・320・321・323・324は口縁部下端が肥厚し段をなす。いずれもナデ調整が施されるが内面には指押さえの痕がわずかに残る。321は薄手の土器である。323・324は口縁部がやや外反する。325はやや屈曲する口縁部で下端が丸く肥厚する。326は山形口縁の頂部である。328はやや外反する山形口縁部で、突帯に刺突を施している。

第12類（第47図329～330）

329は口縁部がすぼまる器形で、口縁上端をわずかに肥厚させる。330は外反する口縁部で、復元口径23cmである。

(9) 12号住居跡（第4図）

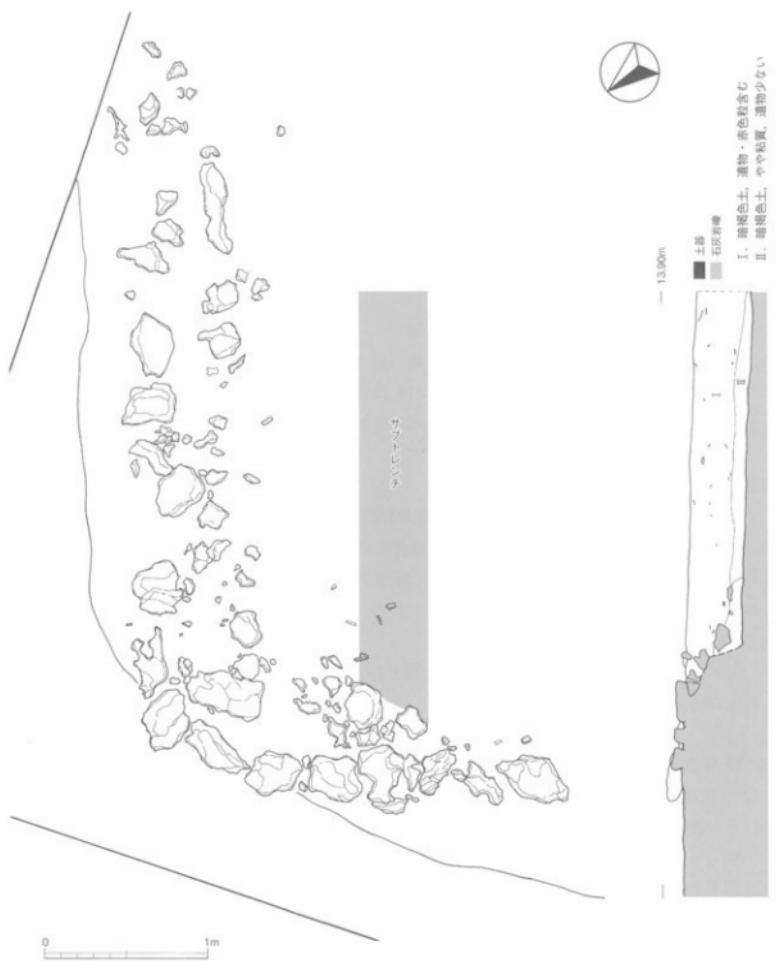
12号住居跡は、10号住居跡の南側に検出された。10号住居跡と一部切り合い関係にあると思われる。検出のみに留め掘り下げは行っていない。

(10) 13号住居跡（第48図）

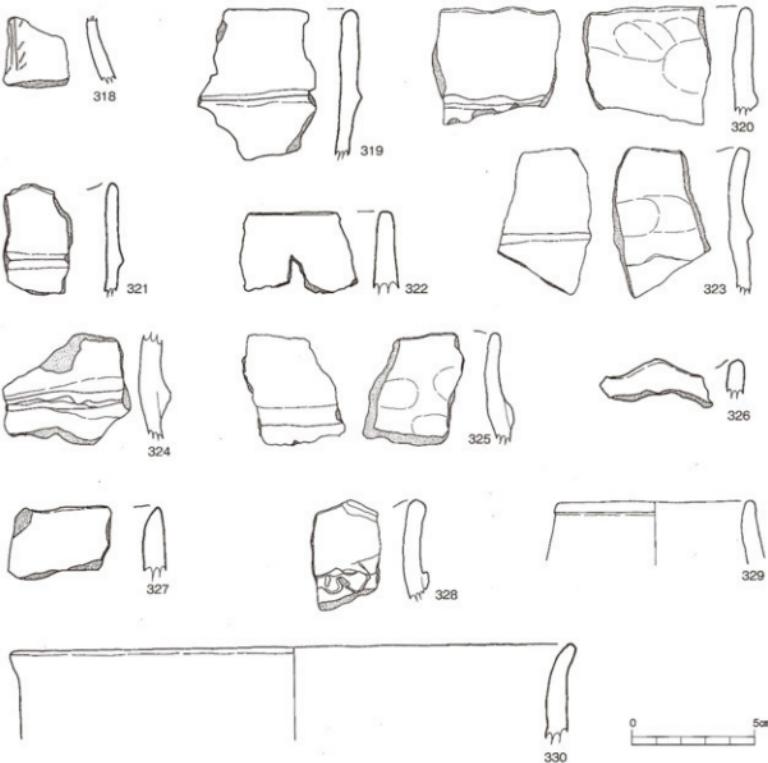
13号住居跡は、4号住居跡の北西側に検出された遺構で、南西壁は石灰岩盤の縁辺を利用してある。一部焼土面が確認された。検出のみに留め、掘り下げは行っていない。

(11) B地点ピット（第4図・第49図）

4号住居跡と5号住居跡の間には、ピット群が検出された。多くは、不規則な配置である。4号住居跡北側の赤褐色土面の一部には、シミ状のやや暗い色の部分があり、それを取り囲むように14基のピットが検出された。掘立柱建物の可能性がある。ピット2基を掘り下げた。



第46図 11号住居跡

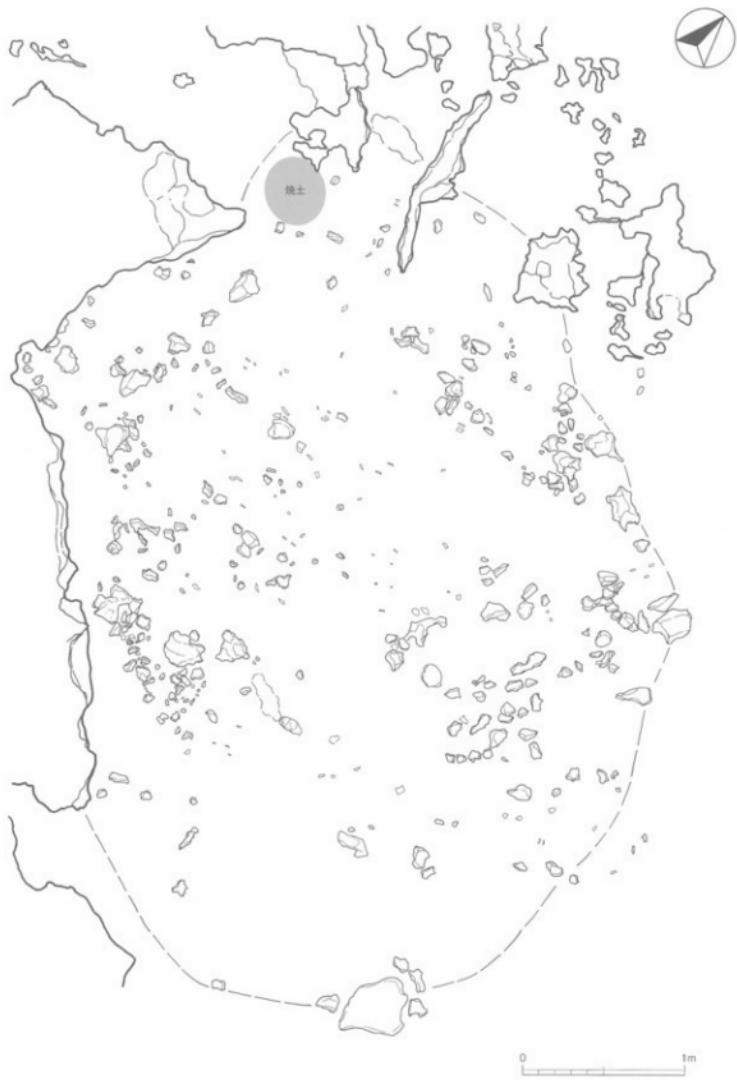


第47図 11号住居跡出土土器

(12) トレンチ・サブトレンチの概要（第3図・第4図）

1 トレンチ（平成17年度調査）

1 トレンチは、調査区の南側に設定したトレンチである。石灰岩盤から南側に細かい石灰岩粒を含んだ暗褐色土が確認された。掘り下げたところ石灰岩礫が一面に広がっている状況で、他の調査地点に比べ貝類も比較的多く出土した。貝類では、ヤコウガイ内側の真珠層側から擦り切り、外側の稜中層部分を折った痕跡がうかがえるものがある。また、オオベッコウガサでも明確な加工痕は認められないが、割れ口が古く貝輪の可能性が考えられるものも出土した。



第48図 13号住居跡

1 トレンチ（平成 18 年度調査）

1 トレンチは、平成 18 年度調査時に調査区西側に南北方向に設定したトレンチである。トレンチ南側に石灰岩盤に沿って石列が確認された。

5・6 トレンチ

5 トレンチは、B 地点中央部に東西方向に設定した。遺構の有無を把握するため、サブトレンチを設定し掘り下げたところ、一部で黒褐色土が落ち込み地山の赤褐色土面が確認された。プランは確定できないが、住居跡の可能性も考えられる。6 トレンチは、5 トレンチから南北方向に設定したトレンチで5 トレンチ同様にサブトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。サブトレンチ北側では、石灰岩礫の配置が認められ、住居跡の可能性が考えられる。

サブトレンチ

C3 サブトレンチ 1・C4 サブトレンチ 3・C5 サブトレンチ 1・D3 サブトレンチ 1・D3 サブトレンチ 2 では、遺構の一部と黒色土範囲が確認された。C3 サブトレンチ 1・D3 サブトレンチ 1 では、ピットが 1 基ずつ確認された。

土 器

第 1 類（第 50 図 333）

333 は縦位に 3 条、横位に 3 条の沈線が施され、斜位の沈線と組み合わされる。

第 8 類（第 50 図 332）

332 はやや内傾する幅広の口縁部で、口縁上部には 2 つの突起を有する。口縁部下端はわずかに肥厚する。外面は丁寧なで調整が施されるが、内面には指おさえの痕を残す。

第 12 類（第 50 図 331）

331 は口縁部が肥厚するもので、口縁部下位に刻みの施された突帯が廻る。口縁部形態は第 4 類に類似する。

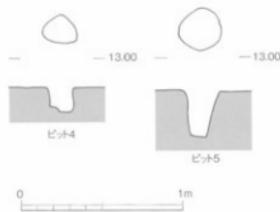
石 器（第 51 図）

334・335 は黒曜石の石器である。334 はドリルで、335 は剥片である。黒色で気泡がなく、腰岳産の黒曜石と思われる。336 は磨製石斧の基部である。337 は片刃の磨製石斧で、全体を入れ念に研磨している。338 は敲打整形後、部分的に磨いている。339 は石斧の欠損品で、敲石への転用品と思われる。

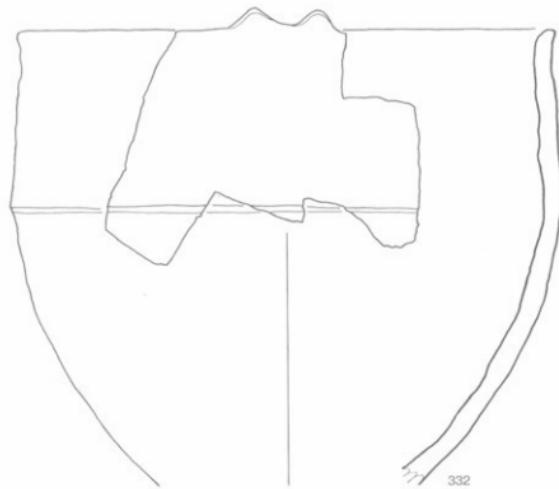
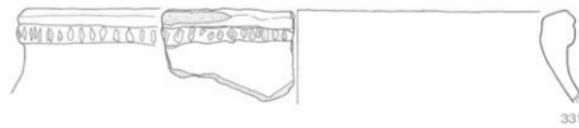
骨製品（第 52 図）

340 は、かんざし状骨製品の一部と想定している。ジュゴンの骨を利用していると思われる。

341 はかんざし状骨製品の基部と思われ方形を呈している。下部には穿孔の形跡がみられる。クジラの骨製と思われる。342 はサメの椎骨に穿孔している。

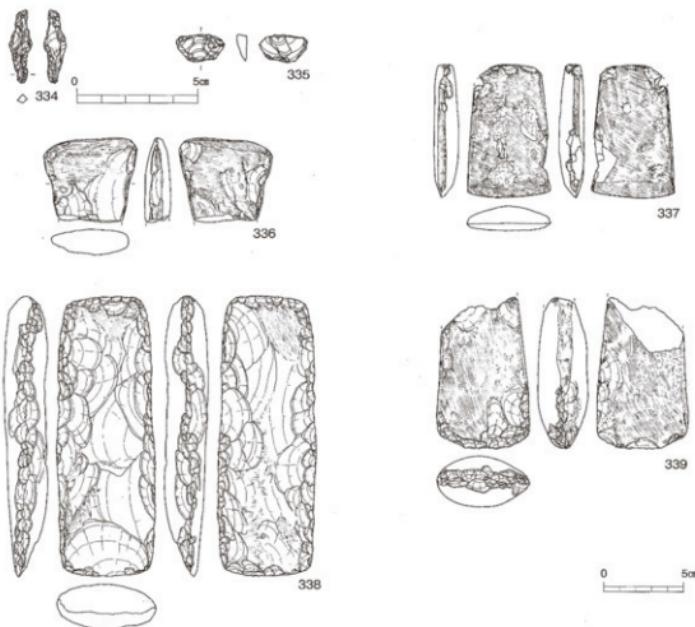


第49図 B地点ピット



0 5cm

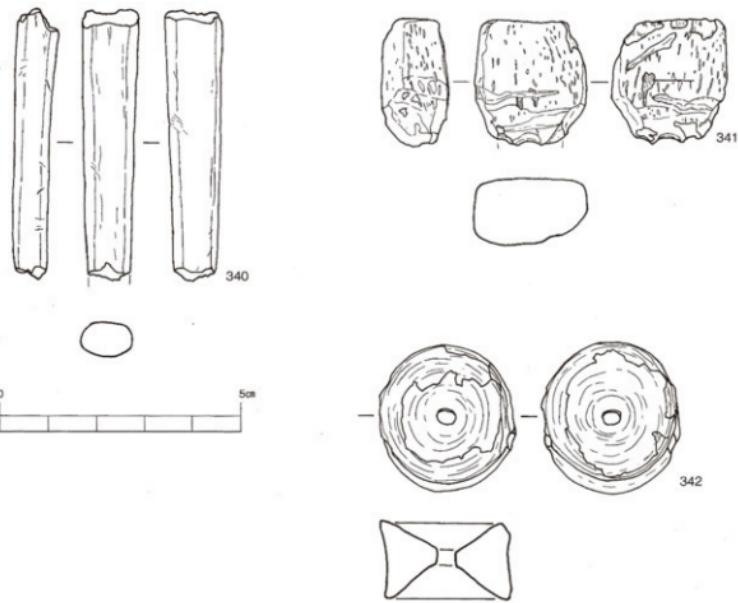
第50図 包含層出土土器



第51図 包含層出土石器

第3表 石器計測表

括図	番号	器種	石材	出土場所	遺物No.	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
18	89	使用痕剥片	緑色片岩	2号住居跡	615	5.00	8.95	(1.20)	55
	90	石斧	緑色片岩	2号住居跡	856	(2.55)	(3.75)	(0.95)	9
	91	石斧	緑色片岩	2号住居跡	846	13.80	7.55	3.35	545
	92	石斧	緑色片岩	2号住居跡	43	10.75	5.85	1.90	180
	93	石斧	緑色片岩	2号住居跡	515	(4.85)	6.75	2.10	108
	94	石斧	緑色片岩	2号住居跡	1047	(8.20)	(7.35)	(3.10)	293
23	95	石斧	緑色片岩	2号住居跡	795	8.45	8.05	(2.50)	290
	96	磨石・敲石	花崗岩	2号住居跡	871	16.00	10.80	7.00	1620
	116	使用痕剥片	緑色片岩	4号住居跡Ⅱ層		6.60	7.90	1.40	93
	117	石斧	緑色片岩	4号住居跡Ⅲ層		(7.00)	8.00	2.60	208
	118	石斧	緑色片岩	4号住居跡検出面		(3.75)	3.50	1.50	27
	240	使用痕剥片	花崗岩	6号住居跡検出面		5.10	7.25	2.10	89
37	241	台石	緑色片岩	6号住居跡Ⅰ層		(12.45)	8.40	(4.15)	656
	242	石斧	緑色片岩	8号住居跡北Ⅰ層		(7.20)	(5.80)	(2.15)	146
	243	磨石・敲石	花崗岩	10号住居跡検出面		12.50	7.85	5.40	820
	334	ドリル	黒曜石	B地点包含層		3.05	0.95	0.35	1.45
	335	剥片	黒曜石	B地点包含層		1.10	2.00	0.40	1.02
	336	石斧	緑色片岩	D5		(5.25)	5.80	1.60	76
51	337	石斧	緑色片岩	10号住居跡南側包含層		8.00	4.15	1.60	108
	338	石斧	緑色片岩	6T		17.50	6.20	2.80	475
	339	石斧	緑色片岩	C3		5.80	(9.45)	3.20	249



第52図 包含層出土骨製品

第4表 骨製品計測表

番号	器種	材質	出土区	遺物No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
45	317 かんざし状製品	クジラ	10号住居跡検出面		(4.40)	1.50	1.35	6.1
	340 かんざし状製品	ジュゴン?	1T		(5.60)	1.15	0.85	5.0
	341 かんざし状製品	クジラ	E5		(2.60)	2.40	1.40	5.4
	342 羊椎	サメ	E5		2.80	2.90	1.50	5.5

第5表 土器観察表(1)

排 因	番 号	出土場所	色 調		調整等		胎土 分 類	分 類	備考
			外	内	外器面	内器面			
7	1	1号住居跡	明褐色	明褐色	細突溝・沈痕	ナデ	A △	1	
	2	1号住居跡	褐	明赤褐色	沈痕	オサエ	A △	1	
	3	1号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A	3	
	4	1号住居跡	褐	明赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A	3	
	5	1号住居跡	褐	褐	オサエ		B	3	
	6	1号住居跡	赤褐色	明赤褐色	オサエ・ナデ	ナデ	A	4	
	7	1号住居跡	褐	褐			A	6	
	8	1号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	B	4	
	9	1号住居跡	にぶい赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A △	8	
	10	1号住居跡	暗赤褐色	黒褐色			A	8	1mm粒多い
	11	1号住居跡	赤褐色	褐			A △	8	
	12	1号住居跡	明赤褐色	明赤褐色～褐	オサエ	オサエ・ナデ	A	8	
	13	1号住居跡	明褐色	明褐色	オサエ・ナデ	ナデ	A	8	
	14	1号住居跡	にぶい赤褐色	赤褐色	ナデ	オサエ	A	8	
	15	1号住居跡	褐	褐		ナデ	A	8	乳白色粒多い
	16	1号住居跡	明赤褐色	褐	ナデ	オサエ	A	8	1~2mm粒多い
	17	1号住居跡	明赤褐色	褐		オサエ	A	8	1mm粒多い
	18	1号住居跡	明赤褐色	褐		オサエ・ナデ	A	8	
	19	1号住居跡	明赤褐色	赤褐色	オサエ	ナデ	A △	8	
	20	1号住居跡	赤褐色	明赤褐色		ナデ	A	8	
	21	1号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ		A	8	
	22	1号住居跡	明赤褐色	小赤褐色			A	8	
	23	1号住居跡	黒褐色・暗褐色	明赤褐色			A	8	
	24	1号住居跡	明赤褐色	にぶい赤褐色		ナデ	A △	8	1mm粒多い
	25	1号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	オサエ・ナデ	オサエ・ナデ	A	8	1~2mm粒多い
	26	1号住居跡	褐	褐	外耳		A	10	
	27	1号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	外耳	オサエ	A	10	1mm粒多い
	28	1号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A	11	1mm以下粒多い
	29	1号住居跡	赤褐色	明赤褐色			A △	12	1~3mm粒多い
	30	1号住居跡	褐色	明赤褐色			A	底	
	31	1号住居跡	褐	褐			A	底	
	32	1号住居跡	明赤褐色	明赤褐色・赤褐色	ナデ	副毛目・ナデ	A	底	
	33	1号住居跡	赤褐色	明赤褐色			A	底	
12	34	2号住居跡	黒褐色	黒褐色			B	2	
	35	2号住居跡	褐	褐			B	2	2~3mm粒多い
	36	2号住居跡	暗赤褐色	にぶい赤褐色	オサエ	オサエ	A △	3	
	37	2号住居跡	明赤褐色	にぶい赤褐色	オサエ	オサエ	A	3	
	38	2号住居跡	暗褐色	暗褐色	ナデ	オサエ	A	3	
	39	2号住居跡	にぶい赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A	3	1mm粒多い
	40	2号住居跡	にぶい赤褐色	明赤褐色	オサエ・ナデ	ナデ	A △	3	1mm粒多い
	41	2号住居跡	灰褐色	灰褐色	ナデ		B △	3	
	42	2号住居跡	黄褐色	黄褐色	ナデ	オサエ	A	3	
	43	2号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ	A	3	
	44	2号住居跡	明黄褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ	A	3	
	45	2号住居跡	褐色	明赤褐色			A	4	1mm以下粒多い
	46	2号住居跡	褐	褐	ナデ	ナデ	B △	4	
	47	2号住居跡	にぶい赤褐色	暗赤褐色	部位粘土斑點付	オサエ・ナデ	A	5	
	48	2号住居跡	赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ	A	5	
	49	2号住居跡	にぶい赤褐色	黒褐色	ナデ	オサエ	A	5	
	50	2号住居跡	黄褐色	明赤褐色	ナデ		A △	6	
	51	2号住居跡	褐	赤褐色	ナデ	オサエ	A	6	2mm以下粒多い
	52	2号住居跡	褐	褐	ナデ	ナデ	A	7	
	53	2号住居跡	明褐色	明褐色		オサエ	A	7	
	54	2号住居跡	明赤褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	B	7	
	55	2号住居跡	褐色	明赤褐色	オサエ		A	8	1mm粒多い
	56	2号住居跡	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			A △	8	
	57	2号住居跡	明褐色	にぶい赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A	8	
	58	2号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ		A	8	
	59	2号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ	A	8	
	60	2号住居跡	赤褐色	赤褐色	オサエ		A	8	調整良好
	61	2号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	粘土組點付	粘土組點付	A	8	
	62	2号住居跡	褐	褐	粘土組點付	粘土組點付	A	8	
	63	2号住居跡	暗褐色	明褐色	ナデ		A △	8	1mm粒多い
	64	2号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ		A	8	
	65	2号住居跡	赤褐色	明赤褐色～褐	ナデ	オサエ	A	8	

第5表 土器觀察表(2)

排 回	番 号	出土場所	色 調		調査等		出土 分 類 金 屬 陶 器	備 考
			外	内	外器面	内器面		
13	66	2号住居跡	褐	褐	ナデ		A	8
	67	2号住居跡	明褐色	褐		ナデ	A	8
14	68	2号住居跡	赤褐色	黒褐色	ナデ		A	8
	69	2号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A	8
15	70	2号住居跡	灰褐色	赤褐色	ナデ		A	8 1~2mm粒多い
	71	2号住居跡	褐	明赤褐色・褐・純	ナデ	オサエ・ナデ	A	8 1~3mm粒多い
16	72	2号住居跡	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ・外耳	オサエ・ナデ	A	10 3~5mm粒含む
	73	2号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ・外耳	オサエ	A	10
17	74	2号住居跡	明赤褐色	理褐色	外耳		A	10 白粒多い
	75	2号住居跡	明褐色	褐	ナデ・外耳		A	10
18	76	2号住居跡	明赤褐色	褐色	ナデ・外耳		A	10
	77	2号住居跡	褐	褐~灰褐色	ナデ・外耳	ナデ	A	10
19	78	2号住居跡	明褐色	にぶい褐色			B	11
	79	2号住居跡	にぶい褐色	赤褐色			A △	迷
20	80	2号住居跡	赤褐色	赤褐色			A △	迷
	81	2号住居跡	褐	オサエ			A	底 1mm石英等多い
21	82	2号住居跡	褐	黒褐色			A	底
	83	2号住居跡	明褐色	明赤褐色	オサエ	A	底	地成良好
22	84	2号住居跡	明褐色	赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A	底
	85	2号住居跡	褐	褐	ナデ	ナデ	A	底
23	86	2号住居跡	褐	明赤褐色			A	底
	87	2号住居跡	褐~赤褐色・黒褐色	明赤褐色・褐	ナデ	ナデ	A	底
24	88	2号住居跡	褐	ナデ	ナデ	ナデ	A	8
	89	4号住居跡	褐	ナデ	オサエ	A	3 1~2mm粒	
25	90	4号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ・オサエ	A	8
	91	4号住居跡	褐	明褐色	ナデ		A △	8
26	100	4号住居跡	褐	明褐色	オサエ	A	△ 8	
	101	4号住居跡	明赤褐色	明赤褐色・赤褐色	ナデ	ナデ	A	8 102と同一個体
27	102	4号住居跡	にぶい赤褐色・明赤褐色	黒褐色・赤褐色	ナデ	工具ナデ	A	8
	103	4号住居跡	褐褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A △	8
28	104	4号住居跡	褐	明褐色	ナデ	ナデ	A	8
	105	4号住居跡	明赤褐色	にぶい褐色	ナデ	オサエ	A	8 2~3mm粒多い
29	106	4号住居跡	赤褐色	にぶい褐色	ナデ	オサエ	A △	8
	107	4号住居跡	明赤褐色	褐・にぶい赤褐色	オサエ	オサエ・ナデ	A	9
30	108	4号住居跡	明褐色・褐	黒褐色・赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A △	8 103と類似
	109	4号住居跡	褐	明赤褐色	ナデ		A	底
31	110	4号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ	A	4
	111	4号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A △	6
32	112	4号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ	A	8
	113	4号住居跡検出面	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	A	8 地入物多い
33	114	4号住居跡検出面	明赤褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	A	8
	115	4号住居跡検出面	灰黒褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	A	8
34	119	5号住居跡	褐	ナデ			A	3
	120	5号住居跡	赤褐色	褐	ナデ	ナデ	A	8
35	121	5号住居跡	褐	明褐色	ナデ	オサエ	A	8
	122	5号住居跡	褐	ナデ	オサエ・ナデ	オサエ・ナデ	A	8
36	123	5号住居跡	褐	ナデ	ナデ	ナデ	A	8
	124	5号住居跡	赤褐色	明褐色	オサエ・ナデ	オサエ	A	8
37	125	5号住居跡	褐	褐	外耳	ナデ	A	10
	126	5号住居跡検出面	褐	褐	ナデ	ナデ	A	4
38	127	5号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色			A △	7
	128	5号住居跡検出面	赤褐色	赤褐色・黒褐色	ナデ	ナデ	A △	8
39	129	5号住居跡検出面	明褐色	明赤褐色	ナデ		A △	8
	130	5号住居跡検出面	明赤褐色	明褐色	ナデ		A	8
40	131	5号住居跡検出面	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	A	8
	132	5号住居跡検出面	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	外耳 ナデ		A △	8
41	133	5号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	外耳		A △	10 Bに近い
	134	5号住居跡検出面	褐	赤褐色	外耳		A	10
42	135	5号住居跡検出面	褐	にぶい赤褐色	外耳	工具ナデ	A	10
	136	5号住居跡検出面	褐	ナデ			A	11
43	137	5号住居跡検出面	にぶい赤褐色	赤褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A	12 地盤良好
	138	5号住居跡検出面	赤褐色	赤褐色	ナデ		A	8
44	139	6号住居跡	褐	褐	ナデ	ナデ	A	8
	140	6号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ		A	8
45	141	6号住居跡	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ		A	8

第5表 土器観察表(3)

排 団	番 号	出土場所	色 調		調査等		粘土 分 類	分 類	備考
			外	内	外器面	内器面			
27	142	15号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	沈黒		A	1	
	143	15号住居跡	赤褐色	暗褐色			A	△	8
	144	15号住居跡	褐	褐			A	8	
	145	15号住居跡	褐	褐	ナデ	ナデ	A	9	
	146	15号住居跡	明赤褐色	褐	ナデ・ ナデ・ ナデ	オサエ	A	9	
	147	15号住居跡	褐	明褐色	ナデ		A	9	
	148	15号住居跡	褐	褐		ナデ	A	底	
	149	6-18号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色			A	△	1
28	150	6-15号住居跡検出面	褐	褐	ナデ 沈黒		A	1	
	151	6-15号住居跡検出面	赤褐色	褐	沈黒		A	△	1
	152	6-15号住居跡検出面	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ	A	2	
	153	6-15号住居跡検出面	褐	褐		オサエ	A	3	
	154	6-15号住居跡検出面	褐	褐	ナデ	ナデ	A	3	
	155	6-15号住居跡検出面	褐	褐		ナデ	A	3	
	156	6-15号住居跡検出面	褐	褐	ナデ	ナデ	A	3	
	157	6-15号住居跡検出面	褐	暗褐色	ナデ		A	8	
	158	6-15号住居跡検出面	暗褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	A	△	8
	159	6-15号住居跡検出面	褐	赤褐色	工具ナデ	ナデ	A	8	
29	160	6-15号住居跡検出面	にぶい褐	明褐色	ナデ	ナデ	A	8	
	161	6-15号住居跡検出面	褐	明赤褐色	ナデ	ナデ	A	8	
	162	6-15号住居跡検出面	褐	褐	ナデ		A	8	
	163	6-15号住居跡検出面	明褐色	褐		オサエ	A	△	8
	164	6-15号住居跡検出面	褐	褐	ナデ		A	8	
	165	6-15号住居跡検出面	褐	褐	ナデ・工具ナデ	ナデ	A	8	
	166	6-15号住居跡検出面	褐	褐	ナデ	ナデ	A	8	
	167	6-15号住居跡検出面	褐	赤褐色			A	8	
	168	6-15号住居跡検出面	褐	褐	ナデ	ナデ	A	8	
	169	6-15号住居跡検出面	灰褐色～黒褐色	赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A	9	
30	170	6-15号住居跡検出面	赤褐色	赤褐色	外瓦	ナデ	A	10	調査良好
	171	6-15号住居跡検出面	褐	明赤褐色	ナデ	補修孔	オサエ	11	粒子脱け
	172	6-15号住居跡検出面	明赤褐色	褐		ナデ	A	12	
	173	6-15号住居跡検出面	褐	暗褐色	ナデ	オサエ	A	底	
	174	6-15号住居跡検出面	黄褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A	底	
	175	6-15号住居跡検出面	褐	褐			A	底	
	176	6-15号住居跡検出面	褐	赤褐色	ナデ	オサエ	A	底	調査良好
	177	6-15号住居跡検出面	褐	明赤褐色	ナデ		A	底	
	178	7号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ		A	△	8
	179	7号住居跡	赤褐色	赤褐色	ナデ	オサエ	A	8	
31	180	7号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A	8	
	181	7号住居跡	黒褐色	暗赤褐色	工具ナデ	オサエ	A	8	
	182	7号住居跡	にぶい赤褐色	黒褐色	ナデ		A	△	8
	183	7号住居跡	明赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ		A	△	8
	184	7号住居跡	褐	褐	ナデ		A	9	
	185	7号住居跡	褐	にぶい赤褐色	鋼毛目	ナデ	A	9	
	186	7号住居跡	黒褐色	黒褐色			A	12	
	187	7号住居跡	にぶい褐	にぶい褐	細沈線		A	△	12
	188	7号住居跡検出面	明赤褐色	にぶい褐			B	3	
	189	7号住居跡検出面	赤褐色	赤褐色	ナデ		A	△	4
32	190	7号住居跡検出面	にぶい黄褐色	褐			A	5	
	191	7号住居跡検出面	褐	褐			A	6	
	192	7号住居跡検出面	明赤褐色	褐			A	5	
	193	7号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ		A	7	
	194	7号住居跡検出面	褐	褐			A	7	
	195	7号住居跡検出面	褐	褐			B	△	8
	196	7号住居跡検出面	褐	褐	ナデ	ナデ	A	8	
	197	7号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ・オサエ		A	△	8
	198	7号住居跡検出面	明赤褐色・褐	暗褐色	ナデ		A	△	8
	199	7号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A	△	8
33	200	7号住居跡検出面	褐	暗褐色			A	△	8
	201	7号住居跡検出面	にぶい褐	にぶい褐	ナデ		A	△	8
	202	7号住居跡検出面	赤褐色	赤褐色	擬似模様貼付		A	8	
	203	7号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ		A	8	
	204	7号住居跡検出面	褐	褐	外耳		A	△	10
	205	7号住居跡検出面	褐	暗褐色	ナデ		A	10	
	206	7号住居跡検出面	褐・褐	黒褐色・暗褐色	外耳		A	△	10

第5表 土器観察表(4)

排 固	番 号	出土場所	色 調		調査等		紹土 分 類	備考
			外	内	外器面	内器面		
32	207	7号住居跡検出面	桜	桜	ナデ	ナデ	A	12
	208	7号住居跡検出面	明赤褐色				A	底 1mm鉱物粒多い
34	209	8号住居跡	桜	淡褐	ナデ	オサエ	A △	- 黒色鉱物粒含む
	210	8号住居跡	明褐	明褐	ナデ	オサエ・ナデ	A	8
	211	8号住居跡	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	A	9
	212	8号住居跡	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A △	8
	213	8号住居跡南側遺構	明赤褐色	明赤褐色	淡狀況編	オサエ	A △	1
	214	8号住居跡南側遺構	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A △	4
	215	8号住居跡南側遺構	桜	桜	ナデ	オサエ・工具ナデ	A	4
	216	8号住居跡南側遺構	黄褐	黄褐	ナデ	オサエ	B	7
	217	8号住居跡南側遺構	桜	にぶい黄褐	ナデ	オサエ・ナデ	A	8
	218	8号住居跡南側遺構	桜	桜	ナデ	ナデ	A	8
35	219	8号住居跡検出面	桜	桜	ナデ	ナデ	B	3
	220	8号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ	A	3
	221	8号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A	3
	222	8号住居跡検出面	暗褐	黄褐	オサエ・ナデ	ナデ	A △	4
	223	8号住居跡検出面	桜	桜	ナデ	オサエ	A	5 1mm鉱物粒多い
36	224	8号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A △	5
	225	8号住居跡検出面	桜	明赤褐色	オサエ	ナデ・オサエ	A	6
	226	8号住居跡検出面	にぶい褐	明褐	ナデ	オサエ・ナデ	A △	7
	227	8号住居跡検出面	明赤褐色	暗褐	ナデ	オサエ・ナデ	A	8
	228	8号住居跡検出面	桜	黄褐	ナデ	オサエ	A	8
	229	8号住居跡検出面	にぶい桜～稍褐色	黄褐	ナデ	オサエ	A	8 黒色鉱物粒含む
	230	8号住居跡検出面	黄褐	淡褐	ナデ	オサエ	A △	8 黑色鉱物粒含む
	231	8号住居跡検出面	明赤褐色	黑褐	ナデ	ナデ	A	8 1mm鉱物粒多い
	232	8号住居跡検出面	暗褐	暗褐	ナデ	ナデ	A	8
	233	8号住居跡検出面	桜	明褐	ナデ	ナデ	A △	8
37	234	8号住居跡検出面	桜	黄褐	ナデ	オサエ・ナデ	A	9
	235	8号住居跡検出面	桜	暗褐	ナデ 外耳	オサエ	A	10
	236	8号住居跡検出面	桜	外耳	ナデ	オサエ	A	10
	237	8号住居跡検出面	明褐	明褐	外耳	ナデ	A	10
	238	8号住居跡検出面	桜	桜	ナデ	ナデ	A	底
	239	8号住居跡検出面	明赤褐色	黄褐	ナデ	ナデ	A	底
	240	14号住居跡	赤褐	赤褐	ナデ	オサエ	A	3 数子抜け
38	241	14号住居跡	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	A △	12
	246	14号住居跡	桜	にぶい黄褐	オサエ	ナデ	A	8
	247	14号住居跡	桜	オサエ・ナデ	ナデ	ナデ	A	8
	248	14号住居跡	暗褐	暗褐	ナデ	ナデ	A △	8 1mm粒多い
	249	14号住居跡	桜	桜	ナデ	ナデ	A	8
	250	14号住居跡	桜	暗褐	外耳	ナデ	A	10
	251	14号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A	6
	252	14号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色～黑褐	ナデ	オサエ・ナデ	A	5 鉱物含む
	253	14号住居跡検出面	明褐	明褐	ナデ	オサエ	A	8
	254	14号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A △	8
39	255	14号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A	底
	256	9号住居跡	桜	桜	ナデ	ナデ	A	8
	257	9号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	沈藻	オサエ・ナデ	A △	1 白色粒多い
	258	9号住居跡検出面	桜	明褐	ナデ	オサエ・ナデ	A △	2
	259	9号住居跡検出面	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	A △	4
	260	9号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A	5 2mm粒多い
	261	9号住居跡検出面	赤褐	桜	ナデ	オサエ・ナデ	A	7
	262	9号住居跡検出面	桜	桜	ナデ	オサエ・ナデ	A	7
	263	9号住居跡検出面	桜	明赤褐色	ナデ	工具ナデ	A	7
	264	9号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A	7 1mm鉱物粒多い
40	265	9号住居跡検出面	時褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	A	8
	266	9号住居跡検出面	桜	明赤褐色	ナデ	オサエ・ナデ	オサエ・ナデ	A
	267	9号住居跡検出面	桜	桜	ナデ	ナデ	A	8
	268	9号住居跡検出面	暗赤褐色	桜	ナデ	ナデ	A	8
	269	9号住居跡検出面	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	A △	8
	270	9号住居跡検出面	黑褐	黑褐	ナデ	ナデ	A △	8
	271	9号住居跡検出面	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	オサエ	A	8 1mm鉱物粒多い
	272	9号住居跡検出面	桜	明赤褐色	ナデ 外耳	ナデ	A	10
	273	9号住居跡検出面	明赤褐色	赤褐	ナデ	ナデ	A △	10
	274	9号住居跡検出面	明赤褐色	桜	ナデ	ナデ	A	10 1mm鉱物粒多い
41	275	9号住居跡検出面	桜	桜	ナデ	ナデ	A	11

第5表 土器観察表(5)

井	番 号	出土場所	色 調		調査等		出土 分 類 金 屬 部	備考
			外	内	外器面	内器面		
41	276	9号住居跡検出面	緑	緑	オサエ	オサエ・ナデ	A	12
	277	9号住居跡検出面	緑	緑	沈繩		A	12
	278	9号住居跡検出面	黄緑	黄緑			A	12
	279	9号住居跡検出面	緑	緑			A	底
	280	9号住居跡検出面	赤褐	赤褐	ナデ	オサエ	A	底
	281	9号住居跡検出面	明赤褐	明赤褐	工具ナデ	ナデ	A	底
	282	9号住居跡検出面	明赤褐	明赤褐			A	底
	283	9号住居跡検出面	緑	灰褐	外耳	ナデ	A	底
	284	9号住居跡検出面	緑	明赤褐			A	- 開縫加工
	285	10号住居跡検出面	緑	細突葉・沈繩			B △	1
43	286	10号住居跡検出面	赤褐	明赤褐	ナデ 沈繩	オサエ	A	1
	287	10号住居跡検出面	にぶい赤褐	にぶい赤褐	沈繩	オサエ	A △	1
	288	10号住居跡検出面	赤褐	赤褐		ナデ	A	2
	289	10号住居跡検出面	赤褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	A △	4
	290	10号住居跡検出面	緑	暗赤褐			A △	4 1~3mm鉢物粒含む
	291	10号住居跡検出面	緑	緑	ナデ	ナデ	A	5
	292	10号住居跡検出面	緑	緑			A △	5
	293	10号住居跡検出面	緑	緑			A	7
	294	10号住居跡検出面	黒褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	A △	7
	295	10号住居跡検出面	緑	暗赤褐	オサエ・ナデ	オサエ・ナデ	A	7
44	296	10号住居跡検出面	明赤褐	明赤褐	オサエ・ナデ	ナデ	A	8
	297	10号住居跡検出面	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	オサエ・ナデ	A △	8
	298	10号住居跡検出面	褐色	褐色		ナデ	A △	8
	299	10号住居跡検出面	にぶい・褐	黄褐	オサエ・ナデ	オサエ・ナデ	A △	8
	300	10号住居跡検出面	緑	緑	ナデ	ナデ	A	8
	301	10号住居跡検出面	緑	暗褐	ナデ	オサエ・ナデ	A	8
	302	10号住居跡検出面	明赤褐	明赤褐			A	8
	303	10号住居跡検出面	赤褐	墨褐	ナデ	オサエ・ナデ	A	8 1mm粒多い
	304	10号住居跡検出面	緑	墨褐			A	8
	305	10号住居跡検出面	緑	にぶい・褐		オサエ	A	8 1~2mm粒含む
45	306	10号住居跡検出面	明赤褐	暗褐	ナデ	ナデ	A	8
	307	10号住居跡検出面	緑	赤褐			A △	8 1mm紙物粒多い
	308	10号住居跡検出面	明赤褐	明赤褐	オサエ	オサエ	A △	8
	309	10号住居跡検出面	明赤褐	明赤褐	オサエ・ナデ	オサエ	A	8
	310	10号住居跡検出面	緑	明赤褐	ナデ・オサエ	ナデ	A △	8
	311	10号住居跡検出面	にぶい・赤褐	にぶい・赤褐	ナデ		A	8
	312	10号住居跡検出面	淡黄褐	褐灰			A	8
	313	10号住居跡検出面	にぶい・褐	にぶい・赤褐	オサエ・外耳		A	10
	314	10号住居跡検出面	緑	褐灰	外耳	ナデ	A	10
	315	10号住居跡検出面	緑	にぶい・黄褐	オサエ	オサエ	A △	底
47	316	10号住居跡検出面	明赤褐	明赤褐			A	底
	317	11号住居跡	緑	墨褐	沈繩	ナデ	A △	1
	319	11号住居跡	明赤褐	明赤褐	ナデ	オサエ・ナデ	A △	8
	320	11号住居跡	黄褐	黄褐	ナデ	オサエ・ナデ	A △	8
	321	11号住居跡	褐色	褐色	ナデ	オサエ・ナデ	A	8
	322	11号住居跡	褐色	褐色	オサエ	ナデ	A △	8
	323	11号住居跡	緑	緑	ナデ	オサエ・ナデ	A △	8
	324	11号住居跡	明赤褐	赤褐	ナデ	オサエ・ナデ	A	8
	325	11号住居跡	明赤褐	明赤褐	ナデ	オサエ・ナデ	A	8
	326	11号住居跡	にぶい・赤褐	にぶい・赤褐	ナデ	オサエ・ナデ	A	8
50	327	11号住居跡	明赤褐	にぶい・褐	ナデ	オサエ	A △	8
	328	11号住居跡	明赤褐	明赤褐	喰繩・刺突	ナデ	A △	8
	329	11号住居跡	緑	緑	ナデ	ナデ	A	12
	330	11号住居跡	緑	緑	ナデ	ナデ	A	12
51	331	包含層	緑	緑	突葉・刺突	ナデ	A	12
	332	4.T	緑	緑	ナデ	オサエ・ナデ	A	8
	333	包含層	赤褐・暗褐	赤褐・暗褐	ナデ・沈繩	オサエ・ナデ	A △	1

第IV章 同定・分析

第1節 沖永良部島友留遺跡から得られた貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

はじめに

友留遺跡は、沖永良部島南西部の国指定史跡である住吉貝塚に近接した海岸段丘上に位置する縄文時代晚期から弥生時代前期（沖縄貝塚時代中期）の遺跡である。今回、本遺跡の発掘調査によって得られた貝類遺体を検討する機会を与えて頂いた。時期的に僅かに古い住吉貝塚の貝類遺体（黒住、2006a）と比較しながら、その組成等を報告したい。

サンプルの詳細

今回の発掘調査では、住居跡のうち、1-3号の3つは完掘されたが、残りのものは保存対象であり、住居跡内にサブトレンチ等を入れる調査が行われた。その他、遺跡全面に対するトレンチ調査も実施されている。これらの詳細に関しては、本報告書第III章を参照されたい。

今回対象とした貝類遺体は、発掘調査で得られたピックアップ（現場採集）資料の全てと、5つの住居跡の土壤サンプルから得られたものである。土壤サンプルは、水洗選別が行われ、沈殿部分は約5mmと1.6mmのメッシュで篩われた残りのものから、浮遊部分は1mmメッシュから回収されたものである。これらの残渣から同定可能な貝類遺体を抽出し、種の同定と同時に出土部位・焼けや水磨の検討等を行った。また、今回は沈殿部分にも貝殻片が少なかったので、メッシュごとの破片数もカウントし、焼けと水磨等を記録した。

結果および考察

今回の調査では、現地でのピックアップ法と土壤サンプルから、少なくとも海産腹足類16科30種、海産二枚貝類7科9種、陸産貝類5科6種が確認された（表1）。ただし、この中には、非食用の海岸の砂として遺跡に持ち込まれたと考えた海産微小種を含めていない。また、今回のサンプルでは、殻の溶解が大形厚質の種でも認められ、小形薄質の種は溶解してしまっているものも多いと考えられることを最初に断っておきたい。これら貝類遺体の由来と意味を以下に述べる。

1) 食用貝類

ピックアップ法で得られたものの詳細を表2に、優占種と全体の生息場所類型を表3に示した。表2で明らかのように、得られた個体数は極めて少なかった。優占種の組成は、タカラガイ類のハナマルユキ・チョウセンサザエ・ヤコウガイが10%以上と多く、シャコガイ類のシラナミ類・二枚貝類のリュウキュウマスオも5%以上であった（表3）。これらの中・大形種を中心とした種の生息場所類型では、I-3干瀬（リーフ）が約43%と半数近く、I-4礁斜面（18%）、I-2イノ内（17%）と、サンゴ礁域の貝類が得られていたことがわかる。これは、遺跡前面で貝類採集が行

表1. 友留遺跡で得られた貝類遺体.

腹足綱 Gastropoda	生息場所	オカケキラガイ科 Subulinidae	
3房カサガイ科 Nacellidae	種類	ホソオオタコウジウ <i>Allopeas pyrgula</i>	V-9/10
オベッコウガサ Cellana testudinaria	I-1-a	ナハニママイ科 Camenidae	
ユキハサゲ科 Lottiidae		エラブニママイ科 <i>Satsuma</i> (s.s.) <i>m. okinoerabuenus</i>	V-8
コガモガサ Lottia luchuanus	I-1-a	オナミマイ科 Bradybaenidae	
ミミガイ科 Haliotidae		タメトモマイマイ <i>Phaeohelix phaeogramma</i>	V-8-10
イボタナゴ Haliotis (<i>Sanhaliotis</i>) varia	I-2-a	エラブニママイ <i>Nesiohelix irreviviva</i>	V-7
リコテニア科 Turbinidae			
チョウセンサザエ Turbo (<i>Marma</i>) <i>argyrostomus</i>	I-3-a	二枚貝綱 Bivalvia	
ヤコウガイ Turbo (<i>Lunatia</i>) <i>marmoratus</i>	I-4-a	アカガイ科 Arcidae	
マオナガ科 Neritidae		ベニエガイ <i>Barbatia fusca</i>	I-2-a
イシダタミアマオブネ Nerita (<i>Ritena</i>) <i>helicinoides</i>	I-0-a	カキ科 Spondylidae	
キハマガイ Nerita (<i>Ritena</i>) <i>plicata</i>	I-0-a	メンガウミ?	I-2-a
アマオブネ Nerita (<i>Thelyosita</i>) <i>albilla</i>	I-1-b	スズキ科 Spondylidae	
コマツナ科 Planaxidae		ケイトウガイ? <i>Chama durkeni?</i>	I-2-a
ゴマニナ? Planaxis <i>sulcatus</i> ?	I-1-a	シロカイ科 Tridacnidae	
アツビ科 Littorinidae		オオシラミ? <i>Tridacna maxima</i>	I-2-a
イボタマタキビ Nodilittoria <i>trochoides</i>	I-0-a	ナガジャコ(ガリ) <i>Tridacna noae</i>	I-2-a
コンペイトウガイ <i>Echininus cumingii spinulosus</i>	I-0-a	ニコガイ科 Tellinidae	
スミカツカイ科 Strombidae		リュウキュウシラトリ <i>Quidnipagus palastam</i>	II-1-c
コホラ? Strombus (<i>Tricornis</i>) <i>latissimus</i> ?	I-4-c	イシウツボ科 Pammobidae	
ラクダガイ <i>Lambis truncata</i> <i>sebae</i>	I-4-c	リュウキュウスマオ <i>Asaphis violaceans</i>	II-1-c
スイジガイ Harpago <i>chiragra</i>	I-2-c	マルダリガイ科 Veneridae	
ムカデガイ科 Vermidae		アラヌメ? <i>Pterygylpta reticulata</i>	I-3-c
フトモチヘビガイ Dendropoma <i>maximus</i>	I-2-a	ヒメナミ <i>Gastrarium dispar</i>	I-1-b
カハカイ科 Cypraeidae			
キヨダカラ Cypraea (<i>Monetaria</i>) <i>moneta</i>	I-1-a	生息場所類型 (Habitat)	
ハバナルユキ Cypraea (<i>Ravridova</i>) <i>caputserpentis</i>	I-3-a	I. 外洋—サンゴ礁域	
ヤクシマダカラ Cypraea (<i>Arabica</i>) <i>arabica</i>	I-2-a	II. 内海—砾石域	
ジラフガイ科 Ranellidae		III. 河口平潟—マングローブ域	
ホラガイ Charonia <i>tritonis</i>	I-4-a	IV. 淡水域	
ヰキニ科 Bursidae		V. 陸域	
オキニニ Bursa <i>bufonis</i> <i>dunkeri</i>	I-3-a	VI. その他	
アカホリ科 Muricidae		0. 潮間帯上部(Iではノッチ、IIIではマンゴーブ)	
レイシダマシ? Moria <i>granulata</i> ?	I-1-a	1. 潮間帯中・下部	
ツリレイシ Mancinella <i>tuberosa</i>	I-3-a	2. 亜潮間帯上部(IIではイノー)	
シラクモガイ Thais (<i>Stramonita</i>) <i>armigera</i>	I-3-a	3. 干瀬(IIのみ適用)	
オニコジガイ科 Vasidae		4. 磨削面及びその下部	
コオニコブ Vinum <i>turbanellum</i>	I-2-a	5. 止水	
トマホラ科 Fasciolaridae		6. 流水	
ツノマタモキ? Latirus <i>belchen?</i>	I-3-a	7. 林内	
イモガイ科 Conidae		8. 林内・林縁部	
サザガタイモ Conus (<i>Viroconus</i>) <i>fulgetrum</i>	I-1-a	9. 林縁部	
ジユズカセサガタイモ Conus (<i>Viroconus</i>) <i>coronatus</i>	I-1-a	10. 海浜部	
アラレイモ? Conus (<i>Cheleyon</i>) <i>catus</i>	I-3-a	11. 打ち上げ物	
ヤナギボリイモ Conus (<i>Rhizoconus</i>) <i>miles</i>	I-3-a	12. 化石	
ニシキミナシ Conus (<i>Strioconus</i>) <i>striatus</i>	I-2-o	a: 岩礁／岩盤	
オカミカブ科 Ellobiidae		b: 駆石	
ガケシガイ Carychium <i>cymatopla</i>	V-8	c: 礁／砂／泥底	
サキガイ科 Pupillidae		d: 植物上	
スナガイ Gastrocopta <i>armigerella</i>	V-10	e: 淡水の流入する礁底	

われていた結果と考えられ、他の類型のものは少數であった。

土壤サンプルから抽出されるような小形種に關しても、やはり出土数が少なく（表4）、多数得られた種は認められなかつた。ただ、食用としては潮間帯上部に生息する小形カサガイ類のコガモガサや巻貝類のイシダタミアマオブネが少数認められ、潮間帯下部からのアマオブネが僅かに得られていた。本遺跡では、オカヤドカリ類の宿貝が少なかったので、海浜部の遺跡で宿貝の確認される小形種のタマキビ類（コンペイトウガイとイボタマタキ）やゴマニナも食用であったのかも知れない。近年、土壤サンプルが採取・分析されることによって、このような小形貝類の出土とそのダシ的な利用および小形魚類と関係を考えたことがあったが（黒住、2006b）、友留遺跡の場合、魚骨は住吉貝塚（樋泉、2006）よりは少ないものの、かなりの量が得られており（樋泉、本報告書）、土壤サンプルのフローテーションでも魚骨（骨片として示した）がいくつものサンプルから得られて

表2. 友留遺跡のピックアップ法で得られた貝類遺体の詳細

*: 食用具類の最少個体数。A: 鋼品、B: 銀け、C: 木履、D: 色刷り、E: 高級、F: 背面丸、G: 磨感+破片、H: 内器、I: 外器、J: 銀鏡、K: 銀具は方鏡/右鏡

表2. 友留流跡のピックアップ法で得られた異種液体の詳細(つづき)

表3. 沖永良部島友留遺跡の食用貝類遺体(ピックアップ法による)

個体数	頻度 (%)	生息場所 類型	生息場所類型	頻度 (%)	
ハナマルユキ	13	15.48	I-3-a	I: 外洋 -サンゴ礁域	
チヨウセンサザエ	11	13.10	I-3-a	I-0: 潮間帶上部	3.57
ヤクコウガ	11	13.10	I-4-a	I-1: 潮間帶中・下部	9.52
シラナミ類	7	7.14	I-2-a	I-2: イノリ(礁池)内	16.67
リュウキュウマスオ	5	5.95	II-1-c	I-3: 干瀬(リーフ)	42.86
スイジガイ	4	4.76	I-2-c	I-4: 露岩面	17.86
合計	[64]	59.52			

いる(表4)。つまり、本遺跡は、貝類が少なく、魚類が多いというタイプの遺跡であると言えよう。

本遺跡に隣接し、同じ貝塚時代中期で僅かに古い住吉貝塚の貝類遺体（黒住, 2006a）と、友留遺跡のピックアップ法で得られたものの組成を比較すると（図1）、友留遺跡で、礎斜面の割合の増加し、他の類型の多くが減少していることがわかる。友留遺跡

では、ヤコウガイが多く、その他にも礁斜面の種としてラクダガイと破片のみで多少同定が不確実であるがゴホウラが得られている（表2）。

住吉貝塚と友留遺跡は、縄文晩期から弥生前期に相当し、ほぼ同時代で、大きな時期差は認められない。つまり遺跡前面の貝類を採集した環境は、両遺跡の形成期間内に大きく変化したとは考えられない。それにもかかわらず、前述のような採集貝類の種組成には変化が生じており、これは人間の側の礁斜面で採集するという意図が生じた結果と考えられる。友留遺跡の時期には、いわゆる

表4. 友留遺跡の土塙サンプルから得られた貝類遺体の詳細

サンプル番号	15号 住居跡						8号 住居跡						11号 住居跡					
	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅶ層	Ⅷ層	Ⅸ層	Ⅹ層	Ⅺ層	Ⅻ層	Ⅼ層	Ⅽ層	Ⅾ層	Ⅿ層		
体積(L)	#16	#19	#25	#30	#42	#50	#56	#57	#59	#63								
分画とカタチ(△mm)	HF-5 HF-18 LF	HF-5 LF	HF-5 HF-18 LF	HF-5 HF-18 LF	HF-5 HF-18 LF	HF-5 LF												
重宝類																		
コモリサ																		
チカラシガザニ																		
ヤウボイ?	HF																	
コグダラサザエ																		
コグダラサザエ(フタ)																		
イシタミミマオブネ																		
アオハラ																		
ヒグマミカニモキ?																		
コマツナ?																		
イシタミミ																		
コベイタガ																		
スズタガ																		
ハマムラサキ																		
オニニシ		HF																
レイソ																		
コニニブシ																		
フココガタ																		
ツマモモキ?																		
中海イガイ																		
ジヌクサヤガタイキ																		
小マモロイ																		
巻貝類(同定不可)																		
一枚貝類																		
貝類片	9.06g	11.15g	15.06g	12.66g	42.92g	17.05g	12.26g	8.9g	13.31g	25.0g	11.03g	21.14g	10.0g	7.94g	6.79g	22.48g	21.15g	
重宝類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ホタルカタツブ																		
カカツブ類(8)																		
ヌナツガイ																		
ナガケンガイ																		
骨片	1	8	2															
筋(5mm以上)	17	29	16															
骨(2mm以上)																		
筋(3mm以上)	48	57	11															
骨(2mm以上)	29g	15g	36g															
ヌヌズ																		
ハネカツシ																		
他の甲壳成虫																		
貝類片	17.74g	19.23g	1.0g	19.22g	1.0g													
遺産類																		
ホタルカタツブ																		
カカツブ類(8)																		
ヌナツガイ																		
ナガケンガイ																		
骨片	6		1															
筋(5mm以上)	111		12	7	1	2	1	4	8	2								
骨(2mm以上)																		
ヌヌズ																		
ハネカツシ																		
他の甲壳成虫																		
一枚貝類																		
貝類片	17.74g	19.23g	1.0g	19.22g	1.0g													

表4. 友留遺跡の土塙サンプルから得られた貝類遺体の詳細(つづき)。

サンプル番号	15号 住居跡						8号 住居跡						11号 住居跡					
	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅶ層	Ⅷ層	Ⅸ層	Ⅹ層	Ⅺ層	Ⅻ層	Ⅼ層	Ⅽ層	Ⅾ層	Ⅿ層		
体積(L)	#37	#40	#41	#43	#47	#49	#51	#52	#53	#54	#55	#56	#57	#58	#59	#60	#61	
分画とカタチ(△mm)	HF-5 HF-18 LF	HF-5 LF	HF-5 HF-18 LF	HF-5 HF-18 LF	HF-5 HF-18 LF	HF-5 LF												
重宝類																		
コモリサ	1g		1															
チカラシガザニ	M																	
ヤウボイ?																		
コグダラサザエ																		
コグダラサザエ(フタ)																		
コモリサマオブネ	HF, 6.0g		21.05g															
アオハラ																		
ヒグマミカニモキ?																		
コマツナ?	1g																	
イシタミミ	1g																	
コベイタガ																		
スズタガ																		
ハマムラサキ																		
オニニシ																		
レイソ																		
コニニブシ																		
フココガタ																		
ツマモモキ?																		
中海イガイ																		
ジヌクサヤガタイキ																		
小マモロイ																		
巻貝類(同定不可)																		
一枚貝類																		
貝類片	17.74g	19.23g	1.0g	19.22g	1.0g													
遺産類																		
ホタルカタツブ																		
カカツブ類(8)																		
ヌナツガイ																		
ナガケンガイ																		
骨片	6		1															
筋(5mm以上)	111		12	7	1	2	1	4	8	2								
骨(2mm以上)																		
ヌヌズ																		
ハネカツシ																		
他の甲壳成虫																		
一枚貝類																		
貝類片	17.74g	19.23g	1.0g	19.22g	1.0g													

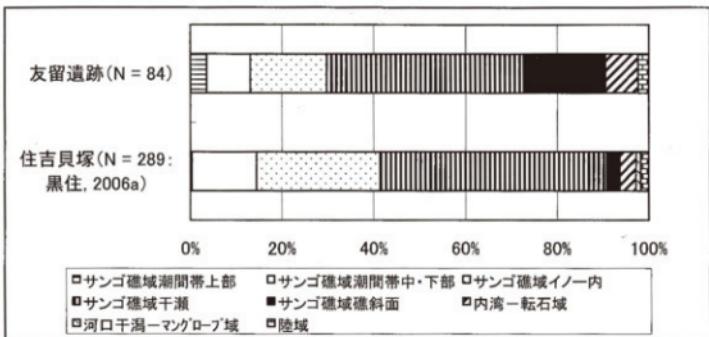


図1 友留遺跡と住吉貝塚出土貝類遺体の生息場所類型の比較

「ゴホウラ・イモガイ類の貝交易」(木下, 1989 等)が開始されている。ここでは、友留遺跡で礁斜面の貝類を採集する意図は、この貝交易の素材を得るために行われたと考えたい。

一方で、住吉貝塚で多数認められた多様な貝製品は、比較的多量の土壤サンプルを処理されたにもかかわらず、極めて少なかった(本報告書第III章)。ただ、貝製品の可能性のあるオオベッコウガサ等や、筒状の貝殻から装飾品として利用された可能性を指摘してきたフタモチヘビガイ(黒住, 1989, 2006a)も確認されている。また、螺塔部を中心に磨滅した小形イモガイが他の食用貝類と比較して多く出土しており(表2, 4)、これらは住吉貝塚で多數出土した貝珠(森田・堂込, 2006)の素材とも考えられよう。本遺跡における貝製品出土量の少なさは、比較的少ない発掘面積と後述する廃棄場所の問題に起因する部分も存在すると考えられる。

2) 包含層の形成等

今回の土壤サンプルでは、詳細に貝類の破片まで抽出されており、その数と焼けや磨滅の状況等もチェックした(表4)。なお、表には示していないが、8号と11号住居の土壤サンプルからは、貝類遺体はほぼ皆無であることが観察されている(樋泉、私信)。破片数は、ピックアップ法で得られた個体数と同様に6および15号住居で多かった。そして、割合に変化の認められるものの、全てのサンプルで焼けた破片(Bで示してある)が存在した。特に、6号I層・II層および15号IV層・VI層で、焼けている破片の割合は高かった。ただ、焼けている割合とフローテーションで回収された炭化物の量には関係は認められないようであった。これらの焼けた貝殻片の由来は、炭化物が少ないことからも、その場で焼けたわけではなく、以前に想定したように(黒住, 2006c)、炉の周囲で食用時等に破片となった貝殻片の一部が焼け、周囲の清掃等のゴミとして廃棄されたものと考えられる。

ただ、今回のサンプルでは、15号III層でのみ水磨を受けた貝殻片が約半数を占め、その大部分が

焼けていた。他のサンプルでは水磨を受けた貝殻片が少ないことから、この層位でのみ海岸から貝殻片を持ち込んで（粗い砂が意識された可能性もある）、さらに焼いたと考えられる。ただ、この場所で焼いたのか、別な場所で焼いた後に廃棄されたのかは不明である。この貝殻片を焼くということは、住吉貝塚で想定した「通常の食用種とは異なった貝製品の可能性を含む貝類が強く焼けているというような例が散見」する事例（黒住, 2006a）と類似した、祭祀的な意味を含め、何らかの意図を有しているものと考えられるのではないだろうか。

今回の土壤サンプルでは、溶解している可能性が高いものの、詳細に検討したいずれのサンプルからも海産微小貝類は極めて少なかった。不明瞭ではあるものの、海産微小貝類に基づく南島の貝塚時代における海藻（海草）利用・広義の製塩は認められず、これまでに指摘してきた状況（黒住, 2002）と同様であった。

一方で、今回の土壤サンプルからは微小種を含めて陸産貝類も極めて僅かしか得られなかった。これは前述のように薄質の陸産貝類では殻が溶解したためという可能性が高い。得られた種は、開放地から海岸に生息する種で、貝層より後の時代のものの可能性も高いように思われた。個体数が少なく明確ではなかったが、想定されるように本遺跡も住吉貝塚の出土状況・推定される古環境と同様であったようである。

なお、住吉貝塚から多数の炭化種子が確認されたと報告したが（黒住, 2006a）、これは、報告者の観察間違いで種子ではなかったので、ここに訂正しておきたい。

3) 出土地域

最初に述べたように、友留遺跡の貝類遺体の大きな特徴として、貝類遺体が極めて少なかったことがある。沖縄貝塚時代中期には、動物遺体が激減することは從来から指摘されており（例えば沖縄考古学会, 1978）、本遺跡もその典型的な例と言えよう。

ただ、出土貝類遺体は少ないながら、6および15住居と遺跡の海岸よりの平成17年調査1トレンチからは、他と比較して多く得られている。一方、ほぼ完掘された1-3号住居から、貝類遺体はほとんどの出土していなかった（表2）。このように、遺跡内でも貝類遺体廃棄場所が偏在していた。貝類遺体廃棄の集中する住居跡の例は、同時期の沖縄県本部町知場塚原遺跡（黒住, 1988）や同今帰仁村西長浜遺跡（黒住, 2006b）等でも知られており、後者に関しては、貝類廃棄の時期・地区ごとの変遷が示され、より詳細な層序・遺構の検討が必要であるとされている（瀬戸, 2006）。友留遺跡では、海岸よりのトレンチからの出土が比較的多かったことから、居住区域外に廃棄する傾向が強いのかもしれない。

また、これまでに報告されている貝塚中期の貝類遺体組成は、全体として前後の時期や優占種の変化、あるいは遺構ごとの組成の相違等は廃棄の少ない場合、一括廃棄的で組成に偏りの認められる場合もあるが（例えばシヌグ堂遺跡〔島袋, 1985〕や高嶺遺跡〔黒住, 1989〕）、大きな相違は明らかではない。

謝辞：報告に先立ち、土壤サンプルの処理を含め、お世話になった知名町教育委員会の森田太樹氏、土壤サンプル抽出等でご配慮いただいた早稲田大学の樋泉岳二氏にお礼申し上げる。本報告は、明治大学学術フロンティア「環境変遷史と人類活動に関する学際的研究」（代表者：杉原重夫）の成果の一部である。

引用文献

- 木下尚子. 1989. 南海産貝輪交易考. In 横山浩一先生退官記念論文集. 生産と流通の考古学. 横山浩一先生退官記念論文集刊行会, 福岡.
- 黒住耐二. 1988. 軟体動物遺存体. In 岸本義彦(編), 地場塚原遺跡, 本部町文化財調査報告書, (5):95-115. 本部町教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 1989. 高嶺遺跡出土の貝類遺存体. In 金武正紀・金城亀信(編), 宮城島遺跡分布調査報告, 沖縄県文化財調査報告書, (92):179-189, 2 pls. 沖縄県教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. In 木下尚子(編), 先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査からー, pp. 67-86. 熊本大学文学部, 熊本.
- 黒住耐二. 2006a. 貝類遺体からみた沖永良部島住吉貝塚の特徴. In 森田太樹・堂込秀人(編), 住吉貝塚, 知名町埋蔵文化財調査報告書, (10):132-141. 知名町教育委員会, 鹿児島.
- 黒住耐二. 2006b. 西長浜原遺跡の貝類遺体. In 瀬戸哲也(編), 西長浜原遺跡, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (39):211-220.
- 黒住耐二. 2006c. 貝類遺体からみた遺跡の立地環境と生活. In 木下尚子(編), 先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査からー, pp. 115-134, 285. 熊本大学, 熊本.
- 森田太樹・堂込秀人(編). 2006. 住吉貝塚, 知名町埋蔵文化財調査報告書, (10):1-144, 62 pls. 知名町教育委員会, 鹿児島.
- 沖縄考古学会(編). 1978. 石器時代の沖縄. 140pp. 新星図書, 沖縄.
- 瀬戸哲也. 2006. 西長浜原遺跡の遺構変遷. In 瀬戸哲也(編), 西長浜原遺跡, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (39):231-232.
- 島袋春美. 1985. 貝類. In 金武正紀(編), シヌグ堂遺跡, 沖縄県文化財調査報告書, (67):180-181. 沖縄県教育委員会, 沖縄.
- 樋泉岳二. 2006a. 魚類遺体群からみた住吉貝塚の特徴と重要性. In 森田太樹・堂込秀人(編), 住吉貝塚, 知名町埋蔵文化財調査報告書, (10):115-131. 知名町教育委員会, 鹿児島.

第2節 友留遺跡から出土した脊椎動物遺体群

樋泉岳二（早稲田大学）

はじめに

鹿児島県知名町友留遺跡は、沖永良部島西海岸に面した隆起サンゴ礁段丘上に立地する沖縄貝塚時代中期（調文時代晚期）中心の集落遺跡である。本遺跡では2005～2007年に実施された知名町教育委員会による発掘調査において、堅穴住居跡覆土および包含層から多数の脊椎動物遺体（骨類）が出土した。ここでは、その分析結果と特徴について報告する。

なお、本遺跡の谷を挟んだ南側約200mに位置する住吉貝塚でも、貝塚時代前期～中期の住居跡覆土などから多数の骨類が出土し、その詳細が報告されている（樋泉2006、西中川2006）。

1. 分析資料

今回得られた資料の年代は、共伴した土器類（仲原式土器など）からみて、貝塚時代中期のものが主体となると推定される（森田太樹氏のご教示による）。

分析した骨類には、発掘現場において手で拾い上げられた資料（以下「ピックアップ資料」と、遺構覆土のサンプルを水洗選別して採集された資料（以下「水洗選別資料」）がある。水洗選別用の堆積物サンプルは4号・6号・8号・11号・15号の各堅穴住居跡覆土から採集された（詳細は表1参照）。8号・11号住居跡では20cm角の柱状サンプル（厚さ5cm単位で分割）が採取され、1mm目のフルイを用いて水洗された（水洗後の残留物は、改めて4mm、2mm、1mmメッシュで分別した）。4号・6号・15号住居跡では覆土各層から任意にブロックサンプルが採取され、「大メッシュ」（約5mm目）、「中メッシュ」（約1.6mm目）、「小メッシュ」（1mm目）の3種類のフルイを用いて水洗された。サンプルの採取および水洗作業はすべて知名町教育委員会によって行われた。

2. 分析方法

水洗選別資料については、時間的な制約によりすべての資料を分析することが困難であったため、各遺構・各層準のサンプルから一部を抽出して分析対象とした（表1）。4号・6号・15号住居跡の「小メッシュ」分離資料は、予備的な観察の結果、同定可能資料があまり含まれていないと判断されたため、分析対象から除外した。ピックアップ資料はすべての資料を分析対象とした。

同定対象とした部位は、魚類では主上頸骨、前上頸骨、歯骨、角骨、方骨、椎骨の全標本（これらは同定未了の資料もすべてデータ化した）のほか、分類群ごとの骨格的特徴に応じてできるだけ多くの部位を対象とするよう努めた。魚類以外では、部位の判定可能な資料を同定対象とした。ただし、哺乳類の長骨のうち全周を残さない破片は、原則として除外した。

同定方法は現生標本との比較を原則とした。比較に用いた現生標本は、筆者の所蔵標本のほか、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏の所蔵標本も参考させていただいた。同定結果で「未同定」としたものは、比較標本中に該当するものが見いだせなかつたもの、「同定不可」としたものは、破損などのため分類群の特定が明らかに困難なものである。なお魚類椎骨の同定に関しては基礎研究がきわめて不十分なため、特徴の明確なもののみを同定し、その他は「保留」とした。

3. 分析結果

(1) 脊椎動物遺体の概要

同定結果を表3～表5および表7～表12に、同定標本数(NISP)・最小個体数(MNI)による組成を表6・表13・表14に示した。同定の結果、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類が確認された(表2)。脊椎動物全体の組成をMNI比でみると、魚類が水洗選別資料で92%(表14)、ピックアップ資料でも74%(図1)を占める。イノシシもピックアップ資料では13%と比較的多い。魚類・イノシシ以外は水洗選別資料・ピックアップ資料のいずれにおいても少數である。

この傾向は、基本的には各遺構および包含層に共通して認められる。ただし、NISP比によってピックアップ資料における脊椎動物全体の組成を各住居跡・包含層に分けてみると(図1)、8号住居跡ではとくに魚類の比率が高く、他の住居跡や包含層とは傾向が異なるようである。

(2) 魚類

魚骨の包含密度

現地採集資料・水洗選別資料とともに、多数の骨類が得られた。水洗選別資料における魚骨の包含密度(堆積物1000ccあたりの魚骨同定対象部位数)は、4号住居跡が10.5、6号住居跡が14.7、8号住居跡が14.0、15号住居跡が40.8、全体で17.5となった。

なお、本遺跡の11号住居跡や8号住居上層(試料No.2)の水洗サンプルからは骨がほとんど検出されず、微量の焼骨細片やエナメル質のみを残す魚歯が検出されたのみであった。また2号住居跡のピックアップ資料は焼骨のみであった。焼骨や歯のエナメル質は、一般的な骨に比べて溶けにくいことから、これらの遺構では、本来埋蔵されていた骨の大部分が溶解消失し、焼骨や歯だけが残された可能性が考えられる。

標本の記載

板鰓類1分類群・真骨類35分類群が同定された(表2)。これらの多くは住吉貝塚から検出された魚類遺体と同様の特徴をもつことから、同定所見については補足を要するものにとどめる。サメ類はピックアップ資料から検出された歯によってイタチザメが同定された(図版2-1)。ヒメジ科としたのはオジサンに近似する標本だが、歯骨は歯列からみて別種である(図版1-9)。他の種類については住吉貝塚の記載(樋泉2006)を参照されたい。

魚類遺体群の組成

ピックアップによって採集された比較的大型の魚骨の組成をみると(表6、図2)、MNI比ではブダイ科が最も多く、ベラ科、ハタ科、フエフキダイ科、モンガラカワハギ科がこれに次ぐ。NISP比ではサメ類も比較的多い。

水洗選別資料にみられる小型魚骨の組成をみると(表13・14、図3)、MNI比ではハタ科、ブダイ科、ベラ科、ニザダイ科が多く、フエフキダイ科、ウツボ科、ヒメジ科、アイゴ属がこれに次ぐ。NISP比ではトビウオ科も比較的多い。

以上を総合すると、全体的にブダイ科、ハタ科が最も優占しており、ベラ科がこれに次ぐ。ピックアップ資料ではフエフキダイ科、モンガラカワハギ科、サメ類、水洗資料ではニザダイ科、ウツボ科、トビウオ科、アイゴ属も多い。全体として、圧倒的な優占種がみられず、多くの種類が混在

する多様性の強い組成が形成されている点が特徴である。

出土魚類を生息環境別にみると、ブダイ科・ハタ科・ベラ科・エフキダイ科・モンガラカワハギ科・ニザダイ科・ツボ科・アイゴ属などサンゴ礁や岩礁域に棲む魚が圧倒的に多い。いっぽう、トビウオ科をはじめ、少数ではあるがニシン科、ダツ科、アジ科（小型種）、ソウダガツオ属、スマといった沿岸～沖合の表層～中層を生息域とする回遊魚も目立つ。マグロ類似種・サメ類についても、種を特定できていないが、このグループに含まれる可能性が高い。

（3）爬虫類・鳥類

出土数は少ない（表6・表13）。爬虫類ではウミガメ類がやや多くみられたほか、水洗選別資料からヘビ類が若干検出されている（ヘビ類は自然遺骸の可能性が高い）。鳥類では水洗選別資料から小型種の脛骨が1点検出されたが、詳細な同定は困難である。

（4）哺乳類

ネズミ類、イノシシ、シカ、ジュゴン、イルカ・クジラ類が同定された。

ピックアップ資料（表6）ではイノシシがMNI 6個体、NISP 170点と大部分を占める。現生のリュウキュウイノシシと同様の小型の個体である。その他では大型クジラ類の骨片が7点、イルカ類・ジュゴン・シカが各1点確認された。シカ（図版4-10）は中足骨近位端の小破片で、加工痕跡は認められない。形質的な特徴は詳細不明だが、島外（おそらく九州方面）から持ち込まれたものであることは確実である。

水洗選別資料（表13）からはネズミ類19点、イノシシ10点が得られた（ネズミ科は自然遺骸の可能性が高い）。ネズミ科の頸骨・臼歯はすべてネズミ亜科のものである。

4. 考察

冒頭でも述べたように、本遺跡に隣接する住吉貝塚（貝塚時代前期～中期）からも多数の骨類が出土しており、その詳細が報告されている（樋泉2006、西中川2006）。今回本遺跡から検出された骨類も、住吉貝塚と同様に、保存状態が良く出土量も豊富であり、年代の確定した資料が多い点、堆積物の水洗選別による小型骨の詳細な採集が行われている点など、質・量の両面で充実している。また、両遺跡の調査ではほぼ共通した資料の採集方法が採用されており、魚類については同定・集計方法も同様であることから、比較資料として好条件を備えている。このように両遺跡の出土骨は、貝塚時代中期における沖永良部島での動物資源利用の実態を示す資料として重要である。

本遺跡と住吉貝塚は、ともに貝塚時代中期を中心とする遺跡であり、海岸に隣接した段丘上に立地する点、多数の竪穴住居跡が検出された点など、類似性の高い様相を呈している。いっぽうで両遺跡の年代を詳細にみると、本遺跡の中心的な形成時期は住吉貝塚よりもやや新しいと推定されている。したがって、両遺跡の骨類の内容を比較すれば、ほぼ同一の立地・環境条件下にある遺跡において、貝塚時代中期という比較的短い期間の中での資源利用の変遷を詳細に把握できるものと期待される。以上の観点から、ここでは本遺跡と住吉貝塚の骨類の内容を比較し、その共通性と相違点について検討する。

（1）脊椎動物の構成

脊椎動物としては、魚類とイノシシが本遺跡の主要な食用資源であり、ピックアップ資料における

る両者の構成比は魚類が74%、イノシシが13%であった。これは奄美大島および沖縄諸島の貝塚時代遺跡に一般的な値（樋泉2002）といえる。住吉貝塚でも魚類とイノシシが主体となる点は同様と思われるが、同定・集計の方法が本遺跡と住吉貝塚とで異なるため、厳密な比較は困難である。

(2) 魚類

まず魚骨の包含密度をみると、堆積物1000ccあたりの魚骨同定対象部位数は、本遺跡では全体で17.5となった。これは貝塚時代の遺跡としてはかなり高い値といえるが、住吉貝塚の31.9耳には及ばない。したがって本遺跡における魚類の漁獲・消費量は、貝塚時代としては高いレベルを示しているものの、住吉貝塚に比べれば減少傾向にあると考えられる。

これに対し、魚類組成に関しては両遺跡の間できわめて高い類似性が認められた（図2・図3）。すなわち、(1)ブダイ科、ハタ科を最優占種として、ピックアップ資料ではペラ科、フエフキダイ科、サメ類など、水洗資料ではニザダイ科、ウツボ科、アイゴ属、トビウオ科などが多い点、(2)圧倒的な優占種がなく、多くの種類が混在しており、組成の多様性が強い点、(3)サンゴ礁・岩礁性の魚が大半を占める点、(4)トビウオ科、アジ科（小型種）、スマなどの回遊魚類がある程度の量含まれる点で、両遺跡とも一致した特徴を示している。相違点を強いて挙げれば、本遺跡ではサメ類、トビウオ科、モンガラカワハギ科がやや多く、ダツ科・カマス属などが少ない点などを指摘できるが、いずれも軽微な差と思われる。

以上から、本遺跡の魚類遺体の内容は住吉貝塚とほぼ同様であると考えられる。したがって、魚類資源利用の様相などに関しては住吉貝塚と内容が重複するため、ここでは詳細は割愛し、以下に要点を挙げるにとどめる：(1)出土魚類相から当時の海岸環境は現在と基本的に同様のものであったと推定される。(2)魚類組成の特徴は奄美大島に類似し、沖縄諸島とは異なる。(3)漁労の内容はサンゴ礁域での多様な魚を対象とした漁が主力であり、とくに小型魚を対象とした漁が活発であったと推定される。(4)トビウオ科などに代表される外洋性回遊魚の出土から、外海域での回遊魚漁の展開が確認された。詳細は住吉貝塚の報文（樋泉2006）を参照されたい。

(3) 爬虫類・鳥類・哺乳類

本遺跡も住吉貝塚も、イノシシを最多とし、ウミガメがこれに次ぐ点、少數ながらイルカ・クジラ類や、島外から持ち込まれたと思われるシカ混じる点で共通している。したがって、これらについても両遺跡の利用状況の基本的特徴は共通している。

ただし、住吉貝塚では本遺跡よりもウミガメ類の骨がかなり多いように思われる。両遺跡のピックアップ資料におけるイノシシとウミガメ類の比率をみると、本遺跡ではNISP比で170:26(1:0.15)、住吉貝塚では破片数比で509:185(1:0.36)、重量(g)比で4129:2339（西中川2006）となっている。住吉貝塚における同定部位や集計方法の詳細が不明なので厳密な比較ではないが、住吉貝塚におけるウミガメ類の多さは明らかであると思われる。

5.まとめ

友留遺跡から出土した多数の骨類を同定し、住吉貝塚と比較した。この結果、両遺跡は魚類とイノシシを主要な食用資源とする点で共通しており、魚類組成にも高い類似性が認められた。本遺跡における脊椎動物資源利用（狩猟・魚類利用）の様相は住吉貝塚からの連続性を強く示していると

考えられる。

一方で、本遺跡における魚骨の包含密度は住吉貝塚に比べて減少している。ウミガメ類も、住吉貝塚に比べて減少傾向にあると推測される。本遺跡では貝類の出土量がきわめて少ない点も指摘されており（黒住 2009=本報告書）、全体として海産資源への依存度が低下している可能性が高い。

こうした変化がいかなる原因で生じたかについては今後の課題だが、少なくとも魚類遺体群からみる限り、組成に目立った変化は認められず、沿岸部の海域環境に魚類相や漁法に影響を与えるような変化が生じた証拠は見いだせない。おそらく何らかの文化社会的な要因によって陸産資源（動物資源ではイノシシ類）への依存度が高まったのではないかと想像されるが、この点については骨類以外の遺物も含めた総合的な検討が必要である。

謝辞：知名町教育委員会森田太樹氏には分析に際して多大なるご助力・ご教示を賜った。国立歴史民俗博物館西本豊弘氏には所蔵の現生標本を閲覧させていただいたほか、資料分析の便宜を図っていただいた。末筆ながら厚く御礼申し上げる。

註：住吉貝塚の魚骨包含密度は、報告（樋泉 2006）では 53.9 となっているが、これは堆積時の体積に基づく値である。本遺跡の魚骨包含密度は採取後のサンプルの体積に基づいて算出したため、住吉貝塚もこれに合わせて再計算した。

参考文献

- 樋泉岳二 2002 「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」『先史琉球の生業と交易 一奄美・沖縄の発掘調査から一』熊本大学文学部、pp. 47-66。
樋泉岳二 2006 「魚類遺体群からみた住吉貝塚の特徴と重要性」『住吉貝塚』知名町教育委員会、pp. 115-131。
西中川駿 2006 「知名町住吉貝塚出土の動物遺体」『住吉貝塚』知名町教育委員会、pp. 108-114。

表1. 水洗選別試料一覧。* 重量はすべて乾燥重量、小メッシュの骨重量は同定対象部位のみ。

試料番号	遺構	雇用	サンプルのサイズ(cm)	体積	総重量(kg)	水洗後重量(g)	分析	大メッシュ (骨肉)	大メッシュ (魚骨)	中メッシュ	小メッシュ (1mm)	同定対象資料数	包含密度N/1000cc	備考
1	8号住	1	20×20×5	3.0	2.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	8号住	2	20×20×5	2.0	2.3	70.6	●	0	0.10	0.20	0.05	0	0	骨はおそらく溶解
3	8号住	3	20×20×5	2.0	2.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4	8号住	4	20×20×5	1.5	1.3	63.1	●	0.10	2.25	1.10	0.10	8	5.3	-
5	8号住	5	20×20×5	2.0	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6	8号住	6	20×20×5	1.0	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7	8号住	7	20×20×5	1.0	0.9	55.8	●	2.50	2.70	1.55	0.20	27	27.0	-
8	8号住	8	20×20×5	1.0	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9	11号住	1	20×20×5	3.0	3.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10	11号住	2	20×20×5	3.0	3.1	-	●	0	0	0.05	0.05	0	0	骨はおそらく溶解
11	11号住	3	20×20×5	2.0	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12	11号住	4	20×20×5	2.0	2.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
13	11号住	5	20×20×5	2.0	2.2	-	●	0	0	0	0.05	1	0.5	骨はおそらく溶解
14	11号住	6	20×20×5	2.5	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15	11号住	7	20×20×5	2.0	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16	4号住	I	-	12.5	-	-	●	11.90	48.7	6.80	-	171	13.7	-
17	4号住	II	-	17.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
18	4号住	III	-	13.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19	4号住	IV	-	10.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20	4号住	V	-	16.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21	4号住	VI	-	17.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22	4号住	II	-	15.0	-	-	●	5.80	48.00	3.55	-	213	14.2	-
23	4号住	III ¹	-	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24	4号住	III	-	14.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
25	4号住	III	-	10.5	-	-	●	0.20	5.55	1.00	-	66	6.3	-
26	4号住	III	-	12.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27	4号住	III	-	3.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	種多數
28	4号住	III	-	9.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	種多數
29	4号住	IV	-	5.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	種多數
30	4号住	IV	-	1.5	-	-	●	0.05	0.75	0.15	-	16	10.7	-
31	4号住	IV	-	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
32	4号住	V	-	6.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
33	4号住	V	-	7.0	-	-	●	1.20	2.65	0.20	-	22	3.1	-
34	4号住	V	-	4.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	種多數
35	4号住	VI	-	7.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	種多數
36	15号住	I	-	13.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	種多數
37	15号住	I	-	18.0	-	-	●	14.4	134.6	9.20	-	735	40.8	種多數
38	15号住	I	-	12.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	種多數
39	15号住	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
40	15号住	II	-	10.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
41	15号住	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
42	15号住	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
43	15号住	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
44	15号住	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
45	15号住	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
46	6号住	I	-	13.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
47	6号住	I	-	15.0	-	-	●	10.7	79.35	27.5	-	356	23.7	Intraにも微量の椎骨あり
48	6号住	I	-	8.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
49	6号住	II	-	4.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
50	6号住	II	-	12.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
51	6号住	II	-	8.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
52	6号住	II	-	10.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
53	6号住	II	-	6.0	-	-	●	0.40	2.55	0.35	-	23	3.8	-
54	6号住	II	-	8.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
55	6号住	II	-	9.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
56	6号住	III	-	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
57	6号住	IV	-	1.5	-	-	●	0.20	0.20	0.10	-	2	1.3	-
58	6号住	V	-	6.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
59	6号住	V	-	12.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
60	6号住	V	-	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
61	6号住	V	-	5.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
62	6号住	VI	-	2.0	-	-	●	0.50	4.50	0.35	-	37	6.2	-
63	6号住	VI	-	6.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
64	6号住	VI	-	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表3. 住居跡埋土からピックアップで採集された脊椎動物遺体

表2. 友南遠跡から検出された脊椎動物遺体の種名一覧

また、遺物包含層からピックアップで採集された脊椎動物遺体

134

表4(つづき)

表5. ピックアップで採集されたイノシシ頸骨・遊離歯の詳細。

〔〕は吸骨残存範囲、()は未萌出値、×は脱落歯を示す。

包含層/ 遺構	遺構	地区	層準	部位	残存位置	左右	計測	性別
包含層	-	5号住	遺構検出面	上顎骨	[P3x P4 M1]	R		
包含層	-	8号住の東側	遺構検出面	上顎骨	[P3 P4]	R		
包含層	-	IT南	-	上顎C		R	c ^a	
遺構覆土	8号住	北サブトレ	1層	下顎骨	[P4 M1 M2 (M3)]	R MIL:14.7, M2L:15.8		
包含層	-	6号住	遺構検出面	下顎骨	[M3x]	R		
包含層	-	B	遺構検出面	下顎C		R	♀	
包含層	-	9号住	遺構検出面	下顎骨	連合部	L+R		
包含層	-	9号住	遺構検出面	下顎骨	[m3 M1 (M2)]	L MIL:15.5		
包含層	-	C4	-	下顎骨	[M2 M3]	L M2L:18.2, M3L:30.2		
遺構覆土	8号住	北サブトレ	1層	下顎I2		L		

表7. 8号住居跡覆土の水洗選別試料から検出された脊椎動物遺体

分類群	部位	No.2			No.4			No.7			合計		
		1mm	4mm	2mm	1mm	4mm	2mm	1mm	4mm	2mm	1mm	総計	
ニシン科	尾椎				1			1			1	1	
ウツボ科	稚骨							1			1	1	
トビウオ科	腹椎					1			1			1	
ハタ科	主上顎骨					1 /			1 /			1 /	
ハタ科	擬歯骨					1 /			1 /			1 /	
ハタ科	第1椎骨					1			1			1	
タイ型	齒	+			+			+			+	+	
アオブダイ属	下咽頭骨					1			1			1	
ブダイ科	主上顎骨		1 /						1 /			1 /	
ブダイ科	咽頭骨(遊離歯)	+						+			+	+	
ブダイ科	尾椎					1			1			2	
ゾウガツオ属	尾椎					1			1			1	
ニザダイ科	腹椎			1							1	1	
ニザダイ科	尾椎	1									1	1	
アイゴ属	腹椎						1			1		1	
アイゴ属	尾椎					1			1			2	
真骨盤保留	方骨					/ 1			/ 1			/ 1	
真骨盤保留	稚骨					2	6		2	6		8	
真骨盤固定不可	稚骨	1	2	1		3	3	1	5	4	10		
ネズミ亞科	臼齒					1			1			1	
ネズミ科	下顎II					1 /			1 /			1 /	
イノシシ	基節骨					1			1			1	
	合計	+	3	3	2	11	10	9	14	13	11	38	

表8. 11号住居跡覆土の水洗選別試料から検出された脊椎動物遺体

層準	個体数	種類	部位	数	備考
2	2	ブダイ科	咽頭骨(遊離歯)	+	
2	1	タイ型	齒	+	
2	1	ブダイ科	咽頭骨(遊離歯)	+	
5	1	ベラ科	腹椎	1	純
5	1	ブダイ科	咽頭骨(遊離歯)	+	

表6. 友留遺跡からピックアップで採集された脊椎動物遺体の組成。MNUは迷津+含層全資料の合計に基づき算出した。

(dSIN) R

表9. 4号住居跡覆土の水洗選別試料(大メッシュ)から検出された脊椎動物遺体

分類群	部位	No.16	No.22	No.25	No.30	No.33	合計
板鰓類	椎骨	1		1			2
ウツボ科	椎骨	2	1				3
アゴ科?	椎骨	1					1
ダツ科	脊骨		1				1
ダツ科	尾椎		2				2
サヨリ科	腹椎	2	2				4
トタウオ科	腹椎	2	5				7
ハタ科(マハタ型)	前上頸骨	/ 3					/ 3
ハタ科(マハタ型)	垂骨		1				/ 1
ハタ科	主上頸骨	1					1 /
ハタ科	角骨		1				1 / 1
ハタ科	方骨		1 / 2				1 / 4
ハタ科?	主縦蓋骨			/ 1			1 / 1
ハタ科?	第1椎骨	1					1
ハタ型	腹椎	1	1				1 / 3
ハタ型	尾椎	2	3	1			6
アジ科(小型種)	腹椎	2	1				3
アジ科(小型種)	尾椎	1	2				3
ヒメジ科	主上頸骨		2 / 1				2 / 1
ヒメジ科	垂骨			1 /			1 /
ヒメジ科	方骨	1 /					1 /
エフダクダイ属	方骨		1 /				1 /
エフダクダイ科	主上頸骨		/ 1				1 /
エフダクダイ科	垂骨		/ 1				1 /
エフダクダイ科	角骨			/ 1			1 /
タイ型	腹椎		1				1
タイ型	尾椎		2	2			4
ベラ科	歯骨	2 /					2 /
ベラ科	角骨		/ 1				1 /
ベラ科	方骨	1 /		1 /			2 /
ベラ科	尾椎	3					3
ブダイ属	上咽頭骨		/ 1				1 /
ブダイ属	下咽頭骨	1	1				2
ブダイ属	前上頸骨	1 /					1 /
ブダイ属	歯骨		1 /				1 /
オブブダイ属	上咽頭骨	/ 1					1 /
オブブダイ属	前上頸骨		/ 1				1 /
オブブダイ属	歯骨	2 /	1 / 3				3 / 3
ブダイ科	主上頸骨		1 / 1				1 / 1
ブダイ科	方骨		1 /				1 /
ブダイ科	第1椎骨	1	1				2
ブダイ科	腹椎	5	1				6
ブダイ科	尾椎	12	7			3	22
スマ	尾椎	1					1
ニザダイ科	第1椎骨			1			1
ニザダイ科	腹椎	1	3	1			5
ニザダイ科	尾椎	4	14	4			22
ニザダイ科?	主縦蓋骨			/ 1			1 / 1
アイゴ属	腹椎				1		1
アイゴ属	尾椎		1				1
アイゴ属?	主縦蓋骨		/ 1				1 / 1
カレイ目	尾椎			1			1
モンガラカラハギ科	前上頸骨	1 /					1
モンガラカラハギ科	歯骨	2	1				3
モンガラカラハギ科	方骨	1 /					1
ハコフグ科?	鱗板	1		1			2
真骨類未定	方骨	1 /					1 /
真骨類保留	主縦蓋骨		/ 1				1 / 1
真骨類保留	第1椎骨			1			1
真骨類保留	椎骨	17	22	8	3	3	53
真骨類未定不可	椎骨	13	14	4	1		32
ウミガメ類	中手骨	1 /					1 /
ウミガメ類	不明(長骨)	5					5
ネズミ亜科	上頸骨		1 /				1 /
ネズミ科	下頸骨		1 /				1 /
イノシシ	肋骨	1					1
合計		99	114	28	5	9	255

表10. 4号住居跡遺土の水洗選別試料(中メッシュ)から検出された脊椎動物遺体

分類群	部位	No.16	No.22	No.25	No.30	No.33	合計
ウツボ科	椎骨		1				1
ダン科	腹椎	1	3				4
サリモ科	腹椎	1					1
トビウオ科	腹椎			2			2
ハタ科(マハタ型)	前上頸骨		/ 1				/ 1
ハタ科(マハタ型)	齒骨		/ 1				/ 1
ハタ科	主上頸骨	1 /					1 / 0
ハタ科	方骨	1 /					1 / 0
ハタ科	第1椎骨					1	1
ハタ科?	主鰓蓋骨	/ 1					/ 1
ハタ型	腹椎		4	1			5
アジ科(小型種)	第1椎骨		2				2
アジ科(小型種)	腹椎		1				1
ヒジン科	齒骨	1 /					1 / 0
ヒジン科	第1椎骨		1				1
ヒジン科	腹椎		1				1
フエウキダイ属	方骨		/ 1				0 / 1
テヨウチヂウオ科	腹椎		1				1
ベラ科	齒骨		1 /	1 /			2 / 0
ベラ科	角骨			1 /			1 / 0
ベラ科	第1椎骨		1				1
ベラ科	腹椎		1	1			2
ブダイ属	前上頸骨		1 /				1 / 0
アオブダイ属	前上頸骨	/ 1					0 / 1
ブダイ科	尾椎		1				1
ニザギイ科	第1椎骨		1				1
ニザギイ科	腹椎	3	6	2	1		12
ニザギイ科	尾椎	8	7	5			20
アイゴ属	腹椎	2	3				5
アイゴ属	尾椎	5	2				7
モンガラカワハギ科	齒	3					3
モンガラカワハギ科	鱗	2					2
ハコブグ科?	鱗板		1				1
真骨類未定	方骨					1 /	1 / 0
真骨類未定	第1椎骨		1				1
真骨類保留	椎骨	42	39	16	10	9	116
真骨類未定不可	主上頸骨		/ 1				0 / 1
真骨類未定不可	椎骨	15	20	10		2	47
ネズミ科	臼歯		2				2
ネズミ科	下頸1	/ 1					/ 1
合計		88	105	39	11	13	256

表11. 6号・15号住居跡覆土の水洗選別試料(大マッシュ)から検出された脊椎動物遺体

分類群	部位	15号住居					合計
		No.37 南I層	No.47 北I層	No.53 北II層	No.57 北IV層	No.63 北VI層	
サメ類	椎骨	2	1				3
板鰓類	椎骨			1			1
ニンジン科	尾椎		1				1
ウツボ科A	椎骨	1 /					1 / 0
ウツボ科B	前軸椎板		1				1
ウツボ科B?	主上顎骨	1 /					1 / 0
ウツボ科	椎骨	10	2				12
ウツボ科?	主上顎骨	1 /					1 / 0
ダツ科	前上顎骨台	2	2				4
ダツ科	齒骨台	4					4
ダツ科	版椎	1	1	1			3
ダツ科	尾椎	1					1
サリ科	腹椎	2	1				3
トビウオ科	腹椎	15	9			8	32
トビウオ科	尾椎					9	9
イカクダイ科?	前軸椎骨	/ 1					0 / 1
ハタ科(マダラ型)	前上顎骨	5 / 1	/ 1				5 / 2
ハタ科(マダラ型)	齒骨	1 / 1					1 / 1
ハタ科(マダラ型)	前軸椎骨	1 / 3					1 / 3
ハタ科	主上顎骨	/ 2					0 / 2
ハタ科	角骨	2 / 1					2 / 1
ハタ科	方骨	4 / 1	1 / 1				5 / 2
ハタ科	擬椎骨	3 / 2	1 / 1				4 / 3
ハタ科	第1椎骨	3					4
ハタ科?	主軸椎骨	2 /					2 / 0
ハタ型	腹椎	3	1				4
ハタ型	尾椎	11		1			12
アジ科(小型種)	腹椎	1					1
アジ科(小型種)	尾椎	1					1
ガングンジン属	主上顎骨	1 /					1 / 0
ヒメジ科	角骨	1 /	1				1 / 0
ヒメジ科	第1椎骨		1				1
ヒメジ科	腹椎	1					1
フエダイ科	主上顎骨	/ 1					0 / 1
フエダイ科	前上顎骨		/ 1				0 / 1
フエダイ科?	角骨		/ 1				0 / 1
ロコマクダライ?	齒骨	1 /					1 / 0
フニフキダイ属	前上顎骨	1 /	/ 2				1 / 2
フニフキダイ属	方骨	1 /					1 / 0
フニフキダイ属	口盤骨		/ 2				0 / 2
フニフキダイ科	齒骨		/ 1			1	0 / 1
フニフキダイ科	角骨	/ 1	1 / 1				1 / 2
フニフキダイ科	第1椎骨	2	1				3
タイ型	尾椎	2	1				3
ベラ科A	下頬頭骨	1					1
ベラ科B	上頬頭骨		1 /				1 / 0
ベラ科(その他)	上頬頭骨	/ 1	/ 1				0 / 2
ベラ科(その他)	下頬頭骨	1	1				2
ベラ科	前上顎骨	1 / 1					1 / 1
ベラ科	齒骨	1 / 1					1 / 1
ベラ科	方骨	2 /					2 / 0
ベラ科	第1椎骨	1					1
ベラ科(コブダイ型)	腹椎	3	1				4
ベラ科(シロクマベラ型)	尾椎	2					2
ベラ科?	腹椎		1				1
ベラ科?	第1椎骨		1				1
ブダイ属	上頬頭骨		/ 1				0 / 1
ブダイ属	下頬頭骨	1	1				2
ブダイ属	前上顎骨	1 /	1 /				2 / 0
ブダイ属	齒骨	1 / 1	/ 1				1 / 2
アオブダイ属	上頬頭骨	4 / 2	2 / 1			1 /	7 / 3
アオブダイ属	下頬頭骨	3	1	1			6
アオブダイ属	前上顎骨	1 / 1	1 / 2				2 / 3
アオブダイ属	齒骨	1 / 2	1 / 1				1 / 3

(次ページへつづく)

表11(つづき)

分類群	部位	15号住居					合計
		No.37 南I層	No.47 北I層	No.53 北II層	No.57 北IV層	No.63 北VI層	
ブダイ科	主上顎骨	/ 2					0 / 2
ブダイ科	角骨		1 /				1 / 0
ブダイ科	方骨	1 /	1 / 1				2 / 1
ブダイ科	第1椎骨	1				1	2
ブダイ科	腹椎	6	5				11
ブダイ科	尾椎	25	4				29
サバ科(カツオ類)	尾椎	1					1
ニザダイ科	前上顎骨	1 /					1 / 0
ニザダイ科	方骨	1 /					1 / 0
ニザダイ科	舌顎骨	1 /	1 /				2 / 0
ニザダイ科	主總齒骨	/ 1					0 / 1
ニザダイ科	擬歯骨	1 / 1	2 /			1 /	4 / 1
ニザダイ科	腹椎	9	2			3	14
ニザダイ科	尾椎	35	8	2		2	47
ニザダイ科	頭骨	2	1				3
アゴノ属	歯骨		/ 1				0 / 1
アゴノ属	主總齒骨	/ 1					0 / 1
アゴノ属	第1椎骨	1					1
アゴノ属	腹椎	3	1				4
アゴノ属	尾椎	8	1				9
アゴノ属?	主總齒骨	/ 1					0 / 1
モンガラカワハギ科	歯骨		1				1
モンガラカワハギ科	方骨	1 /	2 /				3 / 0
モンガラカワハギ科	第1椎骨		1				1
モンガラカワハギ科	背鱗棘		1				1
ハコフグ科?	鱗板	4	1			1	6
ハリセンボン科	歯骨	1					1
ハリセンボン科	前上顎/歯骨		1				1
ハリセンボン科	鱗	1					1
真骨類未同定	主上顎骨		1 /				1 / 0
真骨類未同定	歯骨		/ 1				0 / 1
真骨類未同定	角骨		1 / 1				1 / 1
真骨類未同定	第1椎骨	1					1
真骨類保留	前上顎骨	1					1
真骨類保留	方骨	1 /					1 / 0
真骨類保留	性骨	105	38	3		2	148
真骨類同定不可	角骨	1					1
真骨類同定不可	方骨		1				1
真骨類同定不可	主總齒骨		/ 1				0 / 1
真骨類同定不可	第1椎骨	1					1
真骨類同定不可	椎骨	30	9	1		1	41
ウミガメ類	不明長骨	1					1
ウミガメ類	背甲板	1					1
ヘビ類	椎骨	3					3
鳥類同定不可	脛骨	1					1
ヌズミ科	下顎骨	1 /					1 / 0
ヌズミ科	上顎骨		/ 1				0 / 1
ヌズミ科	下顎骨		1 /				1 / 0
ヌズミ科	上腕骨	1 /					1 / 0
ヌズミ科	大脛骨	1					1
イノシシ	下顎骨	1 /					1 / 0
イノシシ	軸椎	1					1
イノシシ	第5中手骨		/ 1				0 / 1
イノシシ	中心足椎骨		/ 1				0 / 1
イノシシ	中手/中足骨	1					1
イノシシ	中筋骨	2					2
イノシシ	末筋骨	1					1
合計		393	153	10	1	30	587

表12. 6号・15号住跡覆土の水洗選別試料(中メッシュ)から検出された脊椎動物遺体

分類群	部位	15号住跡				合計
		No.37 南I層	No.47 北I層	No.53 北II層	No.57 北IV層	
ニンジン科	腹椎	1				1
ウツボ科A	背骨	1 /				1 /
ウツボ科	方背+舌領骨	/ 1				/ 1
ウツボ科	椎骨	14	13			27
ダツ科	腹椎	1				1
サヨリ科	腹椎	4	2			6
トビウオ科	腹椎				1	1
ハタ科(マニア型)	前上頸骨	/ 1	1 / 1			1 / 2
ハタ科(マニア型)	背骨	3 / 2	1 / 1	1 /		5 / 3
ハタ科	主上頸骨	2 / 5				2 / 5
ハタ科	角骨	1 /	1 /			2 /
ハタ科	方骨	/ 3				/ 3
ハタ科	主頭蓋骨	1 /				1 /
ハタ科	副頭蓋骨	1 /				1 /
ハタ科	第1椎骨	3	1	1		6
ハタ型	腹椎	1	6	1		8
ハタ型	尾椎	1	1			2
アジ科(小型種)	第1椎骨	1				1
アジ科(小型種)	腹椎	3				3
ヒジキ科	腹椎	1	1			2
チャラチャラウオ科	腹椎	2				2
ペラ科(その他)	上咽頭骨	/ 1				/ 1
ペラ科(その他)	下咽頭骨	1				1
ペラ科(小型種)	尾椎	1				1
ペラ科	主上頸骨		/ 1			/ 1
ペラ科	前上頸骨	/ 1				/ 1
ペラ科	方骨		1 /			1 /
ペラ科	第1椎骨		1			1
ペラ科	腹椎	1	1			2
アオノリカワハギ科	歯骨	1 / 1				1 / 1
ブダイ科	主上頸骨				/ 1	/ 1
ブダイ科	第1椎骨		1			1
ブダイ科	腹椎	2				2
ブダイ科	尾椎	2	2			4
ニザダイ科	第1椎骨	4	2			7
ニザダイ科	腹椎	5	6			11
ニザダイ科	尾椎	20	12			32
アイゴ属	第1椎骨		1			1
アイゴ属	腹椎	6	1			7
アイゴ属	尾椎	12	2			14
モングラカラハギ科	鱗	1	2			3
真骨類未同定	主上頸骨	/ 1				/ 1
真骨類未同定	前上頸骨	/ 1	1			1 / 1
真骨類未同定	第1椎骨	1	1			2
真骨類保留	椎骨	212	116	7	1	337
真骨類同定不可	方骨		1			1
真骨類同定不可	椎骨	38	31	3		75
ヘビ類	椎骨	2				2
ネズミ亜科	臼齒	3	2			5
ネズミ科	上頸1		1			1
ネズミ科	下頸2	1 /				1 /
合計		368	218	13	1	608

注13. 古留遺跡の水歩選別試料から検出された脊椎動物遺体の組成(1)－NISP. 大中・小はデジタルの種類(詳細は本文参照).

表14. 友留遺跡の水洗選別試料から検出された脊椎動物遺体の組成(2)－MNI

分類群	8号 住居	11号 住居	4号 住居	6号 住居	15号 住居	合計
サメ類			1	1		2
板鰓類		1	-	-	1	
ニシン科	1			1	2	
ウツボ科A			1	1	2	
ウツボ科B			1	1	2	
ウツボ科	1	1	-	-	2	
アナゴ属?		1			1	
ダツ科		1	1	1	3	
サヨリ科		1	1	1	3	
トビウオ科	1	1	1	1	4	
イシトウダイ科			1		1	
ハタ科(マンタ型)		4	<1>	<1>	4	
ハタ科	1	-	7	4	12	
アジ科(小型種)		2	1		3	
ギンガメアジ属			1		1	
ヒメジ科		2	1	1	4	
フエダイ科		1	1	1	3	
ヨコシマロカダイ?			1		1	
フエキダイ属		1	<1>	2	3	
フエキダイ科		-	2	-	2	
チヌ科(ウカツクサ科)		1	1		2	

(右後につづく)

分類群	8号 住居	11号 住居	4号 住居	6号 住居	15号 住居	合計
ペラ科A					1	1
ペラ科B					2	1
ペラ科(その他)			1	4	-	5
ペラ科						
ブタノ属				2	1	4
アオブタノ属	1			3	4	11
ブタノ属	-		+	-	-	+
ゾウガガオノ属	1					1
スマ				1		1
サバ科(カツオ属)					1	1
ニザギ科	1		2	4	3	10
アゴノ属	1		1	2	1	5
カレイ目				1		1
モンガラカワノギ科				1	1	2
ハコブタ科?			1	1	1	3
ハリセンボン科				1	1	2
ウミガメ類				1	1	2
ヘビ類				1		1
鳥類同定不可				1		1
ネコ科				1	1	3
イソシ				1	1	3
合計	8	1	36	45	31	121

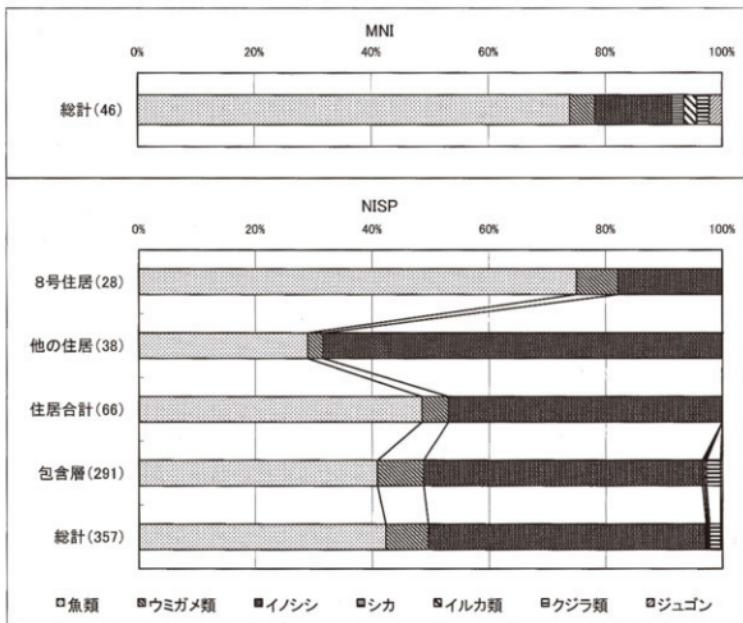


図1. 友留遺跡からピックアップによって採集された脊椎動物遺体の組成。

上:MNI比、下:NISP比。

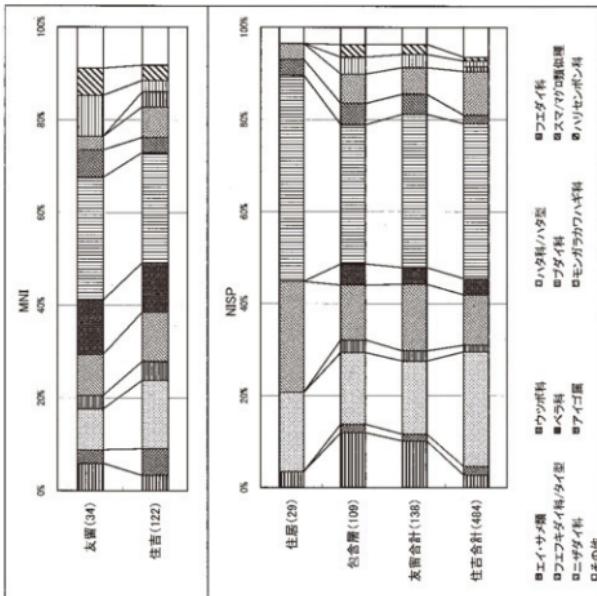


図2. 友留過塩からピックアップによって採取された魚類遺体の組成。
上: MNH; 下: NISP(水洗別別は料から検出された魚類遺体のデータも併せて示した)。

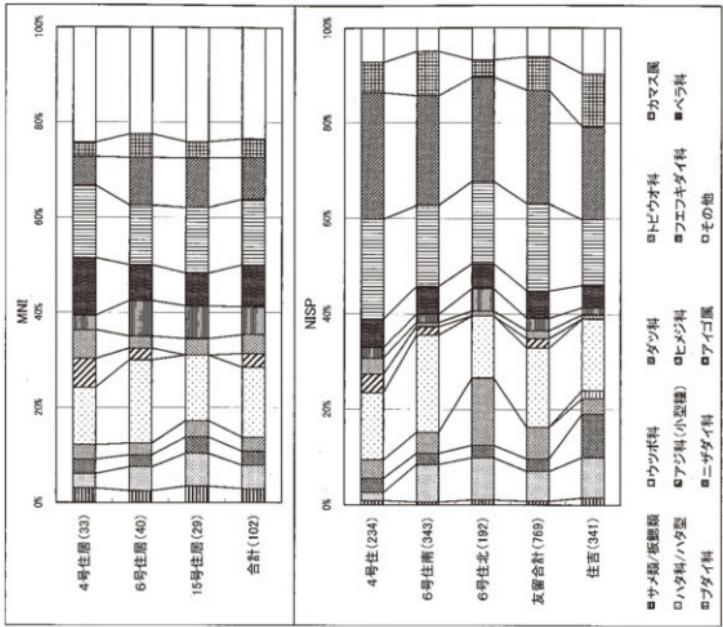
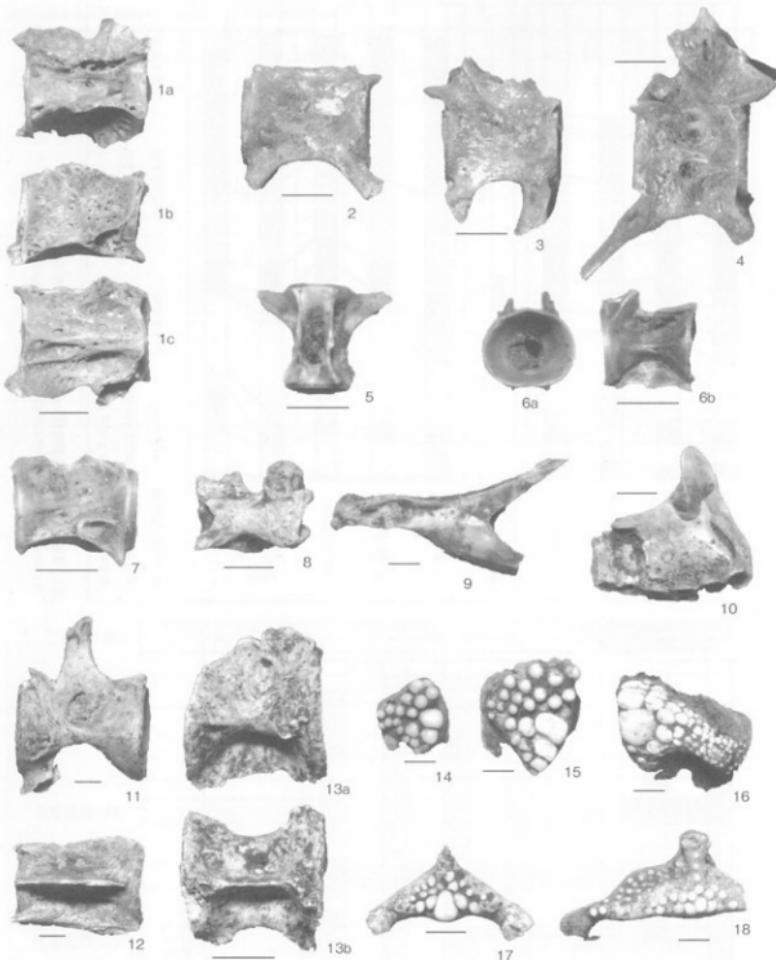
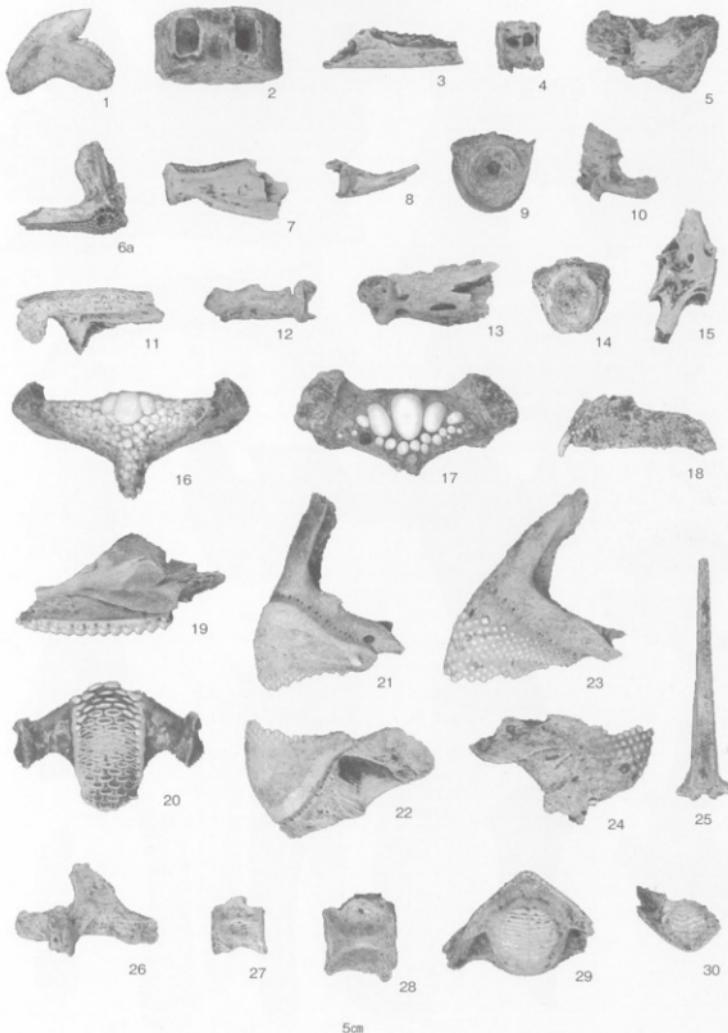


図3. 友留過塩の水洗別別は料から検出された魚類遺体の組成。
上: MNH; 下: NISP(水洗別別は料から検出された魚類遺体のデータも併せて示した)。



魚類(1)

1~4 トビウオ科 (1a~1c・2 腹椎, 3・4 尾椎), 5. サヨリ科腹椎, 6a・6b ニシン科尾椎, 7 アジ科腹椎, 8・9 ヒメジ科 (8 主上顎骨 L, 9 前上顎骨 L), 10 ニザダイ科前上顎骨 L, 11 ソウダガツオ属尾椎, 12 サバ科 (カツオ類) 尾椎, 13a・13b スマ尾椎, 14・15 ベラ科 (その他) 上咽頭骨 R, 16 ベラ科 B 上咽頭骨 L, 17・18 ベラ科 (その他) 下咽頭骨。スケール・バーは 6: 1mm, 13: 5mm, 他は 2mm.



魚類(2)

1イタチザメ歯、2サメ類(メジロザメ型)椎骨、3ウツボ科A歯骨L、4ウツボ科椎骨、5ハタ科(スジアラ型)歯骨L、6・7ハタ科(マハタ型)(6前上顎骨L, 7歯骨R)、8・9ハタ科(8主上顎骨L, 9第1椎骨)、10・11フエキダイ属(10方骨L, 11口蓋骨L)、12・14フエキダイ科(12主上顎骨L, 13歯骨L, 14第1椎骨)、15ニザダイ科尾椎、16ベラ科B下咽頭骨、17ベラ科(タキベラ型)下咽頭骨、18ベラ科前上顎骨R、19・22オブダイ属(19上咽頭骨R, 20下咽頭骨, 21前上顎骨L, 22歯骨L)、23・24イロブダイ属(23前上顎骨L, 24歯骨R)、25モンガラカワハギ科背鰭棘、26・27ブダイ科(26主上顎骨R, 27尾椎)、28マグロ類似種尾椎、29・30ハリセンボン科(29前上顎骨, 30歯骨)



イノシシ(1)

1 上顎骨 R, 2・3 下顎骨 L, 4 下顎骨 R, 5 上顎犬歯 (♂) R, 6 環椎, 7 胸椎, 8 肩甲骨 R, 9 上腕骨 R, 10 上腕骨 L, 11 桡骨 R, 12 桡骨 L, 13 尺骨 R, 14 第3中手骨 R, 15 第5中手骨 L



イノシシ(2)・シカ

1~9 イノシシ (1 寛骨R, 2 大腿骨L, 3・4 大腿骨L, 5 腰骨L, 6 膝骨L, 7 距骨L, 8 踝骨R, 9 中節骨),
10a~10c シカ中足骨L (a 内面, b 後面, c 外面)



ウミガメ・海獣類

1～7 ウミガメ類 (1a・1b 上腕骨 L, 2 横骨 R, 3 尺骨 R, 4 烏口一肩甲骨 L, 5 脊/肺骨 R, 6 指骨, 7 腹甲板),
8 イルカ類椎骨, 9 ジュゴン環椎, 10・11 クジラ類部位不明破片

第V章 調査のまとめ

本遺跡の調査は、当初の記録保存の予定から盛土保存することとなり確認調査として引き続き調査を実施した。限られた時間ではあったが住吉貝塚と同様に住居跡埋土についてサンプリングを行い、より多くの情報を得られるよう努めた。黒住・福泉両氏には詳細な分析をしていただいた。最後に、本遺跡についてまとめてみたい。

遺物について

土器は、12類に分類した。第1類～第3類は壺形土器である。第1類は、喜念I式土器と文様構成が類似するもので、大きく分けると細縁帶と沈線の組み合わせと沈線のみのものがある。与論島の上城遺跡で完形の良好な資料が出土している。第2類は、縄文時代晩期の系統を残すものである。第3類は、仲原式土器期に伴うもので、ウフタIII遺跡などで出土例がみられる。第4類から第9類は壺形(深鉢形)土器である。第4類は、宇宿上層式土器・宇佐浜式土器に該当する。第5類～第8類は、いわゆる仲原式土器期の一類に該当する。第5類～第7類は、口縁部の肥厚形態により細分したが、全体的には口縁部幅が比較的狭いもので宇宿上層式土器や宇佐浜式土器の系統が考えられる。第8類は口縁部が比較的幅広のものでカヤウチバンタ式の系統を想定し、a類とした。肥厚が不明瞭なものはb類としたが、このほかに口縁部下端が突尖化するものなどもあり細分可能と思われるが、詳しい検討は今後の課題したい。b類は、沖縄の阿波連浦下層式に近いものと判断される。第9類は、口縁部が内傾し屈折部分に最大径を有する土器で、4号・7号・8号・15号住居跡で出土しているが量は多くない。肩部径で大型26～29cm、中型17～18.5cm、小型13cmのものに分けられ、中・小型のものは胎土や調整が類似する。第10類の外耳土器は、直状・弧状ものが多く、ビーナツ状を呈するものは1点のみである。第11類は、塊形・浅鉢形土器で、275などは本土の縄文時代晩

期末の土器の影響が考えられる。第12類は、分類不明などを一括した。底部は、尖底・丸底が中心であり、平底・脚台状のものも少量の出土がみられた。胎土は上記の分類可能な土器では、A類が約95%を占める。B類の胎土は2類にやや多い。金雲母を含むものは、1類と4類が多い。縄文時代後期に併行する時期に見られる有文土器は、遺跡全体でほとんど見られず、縄文時代併行の犬田布式土器や突堤をもつ喜念I式土器は出土していない。土器は、仲原式土器期のものが主体であるが、口縁部が屈曲・内傾するようなより新しい要素がみられることから本遺跡の時期は、縄文時代晩期後半頃(貝塚時代中期)を中心とし、弥生時代中期前半頃(貝塚時代後期)まで及ぶことが考えられる。

石器は、磨石・敲石類が多く約4割を占め、石皿も一定量出土している。石斧は2割程度を占め、磨製石斧は破損品や敲石に転用されたものが多い。有溝研石は1点確認され、貝製品等の加工に利用された可能性がある。包含層から出土した黒曜石は、島外からの搬入品と思われる。また、チャートが2号・5号住居跡から出土しており、島内で产地が確認されていないため搬入の可能性を示しておきたい。

骨製品は、奄美・沖縄諸島でみられる海獣骨を利用したかんざし状骨製品の破損品と思われるものやサメの椎骨に穿孔したいわゆる耳栓が出土した。一方、貝製品は加工の可能性が考えられるヤコウガイやオオベッコウガサが少量みられたもの。住吉貝塚で多く出土したオオツタノハ・ゴウホウラ貝輪や貝玉などの製品は確認されなかった。貝玉については、水洗選別をおこなったものの確認されず、第IV章で指摘されているように溶解の可能性も考えられる。

遺構について

1号～3号以外の住居跡は、検出のみ、あるいはサブトレレンチにより一部を掘り下げたのみである。切り合い状況からすると15号住居跡が6号住居跡に先行すること14号住居跡が8号住居に先行することが言える。7号・8号住居跡周辺は、複雑な切り合

い関係を持ちながら住居跡が構築されたものと思われる。住居跡の石組みは、1号・4号・5号・6号・7号・8号住居跡は、比較的しっかりとしている。11号住居跡は、全体プランは不明であるが、他の住居跡に比べやや規模が多いこと、比較的大きな石灰岩礫が配置されていることが特徴的である。4号住居跡北側のピットが周囲に廻る部分については、掘立柱建物の可能性を考えておきたい。3類土器と8類、9類、10類土器の組み合わせが新しいと仮定すると、2号住居跡、5号住居跡、7号住居跡、8号住居跡が新しい可能性があり、6号・15号住居跡、8号・14号住居跡とその周辺の数基の切り合い状況も考え合わせると、住居跡群は3期以上に分かれる可能性がある。

貝類遺体・脊椎動物骨遺体

貝類遺体については、出土量が極めて少なく、小形薄質の貝類については溶解の可能性が指摘された。食用貝類は、サンゴ礁域の貝類が得られていることから遺跡前面での貝類採集状況が示され、住吉貝塚との比較では礁斜面の種であるヤコウガイなどの割合が増加し、他の類型の多くが減少していることから貝交易の素材獲得の意図が指摘された。また、貝製品については極めて少ない状況ながらも、可能性があるものとしてオオベッコウガサやフタモチヘビガイが確認されたこと、蝶塔部を中心に摩滅した小形イモガイについては、貝珠の素材である可能性が示された。15号Ⅲ層でみられる水磨を受け、大部分が焼けた貝殻片については、祭祀的な意味を含め何らかの意図があったことが推測されている。陸産貝類の状況からは、住吉貝塚と同様の古環境が想定された。遺跡内では、貝類遺体廃棄場所に偏在が認められ、海岸よりのトレンチからの出土が比較的多いことから居住区域外へ廃棄する傾向が強いことが示された。

脊椎動物遺体については、魚類・イノシシを主要な食用資源とすることや魚類組成についても住吉貝塚との高い類似性が認められることから、脊椎動物資源利用の様相は住吉貝塚からの連続性が強いこと

が示された。また、島外からシカの持ち込みも確認されている。一方で、魚骨の包含密度やウミガメ類の減少、貝類が極めて少ないとことなどから、全体的に海産資源への依存度が減少している可能性が高いことが指摘された。これらの変化の要因については、より詳細な層序・遺構の検討や他の遺物を含めた総合的な検討が求められている。2号住居跡から炭化種子が得られていることから植物遺体の分析も含め、今後、詳細な検討をする。

土器の編年から本遺跡の時期は、住吉貝塚に一部重複する繩文晩期に併行する仲原式土器期から、阿波連浦下層式土器期の弥生時代中期前半頃までの集落跡と考えられる。貝類遺体、動物骨遺体からも、住吉貝塚との連続性とわずかな生業の変化が窺われ、それが弥生時代の貝交易と関連する可能性があるなど、土器編年と合致する社会状況が明らかとなる可能性をもつ遺跡と言ふことができる。住吉貝塚と連続する集落跡という点では、遺跡間の比較資料を得られる貴重な遺跡である。友留遺跡は、畠地帯総合整備事業区内の遺跡であったが、地元の理解と協力により盛土されて保存されている。

（引用参考文献）

- 青崎和憲・松村智行 2002 『ウツタⅢ遺跡』龍郷町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 龍郷町教育委員会
上原 静・当真嗣一 1984 「仲原式土器の提唱について」『紀要』第一号 神奈川県教育委員会文化課
新里貴之 2004 「沖縄諸島の土器」『考古資料大観』第12卷 小学館
新里貴之 1999 「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』第11号 人類史研究会
吉永正史・堂込秀人 1990 『上城跡・上城遺跡』与論町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 与論町教育委員会

図 版



友留遺跡周辺航空写真（昭和 52 年撮影）

国土画像情報 国土交通省



①友留遺跡航空写真 ②沖縄方面を望む
③海岸での湧水

④調査前風景



表土剥ぎ状況



発掘調査風景



埋め戻し状況

図版4



① A地点全景
④ 1号住居跡遺物出土状況
② 1号住居跡検出状況
⑤ 1号住居跡完掘状況

③ 1号住居跡遺物集中箇所



① 2号・3号住居跡検出状況 ③土器・炭化物検出状況
② 2号住居跡遺物出土状況 ④ 2号・3号住居跡完掘状況
⑤ 1号土坑 ⑦ 3号土坑検出状況
⑥ 2号土坑 ⑧ 3号土坑完掘状況

図版6



①ピット2 ②A地点完掘状況



① B 地点遠景 ② 4号住居跡 ④ 5号住居跡

③ 4号住居跡サブトレンチ ⑤ 5号住居跡躓検出状況

図版8



①



②



③



⑤

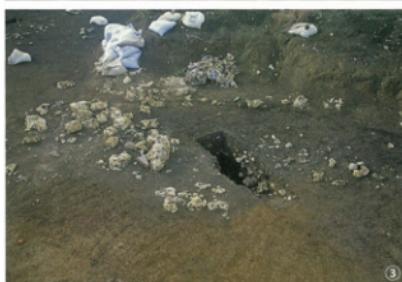


④



⑥

① 6号・15号住居跡 ② 15号住居跡サブトレンチ ③ 6号住居跡サブトレンチ ④ 15号住居跡シャコガイ出土状況
⑤ 7号住居跡 ⑥ 7号住居跡サブトレンチ



① 8号・14号住居跡（奥） ③ 9号住居跡
⑤ 9号住居跡サブトレンチ ⑦ 11号住居跡

② 14号住居跡サブトレンチ ④ 8号住居跡サブトレンチ
⑥ 10号住居跡 ⑧ 11号住居跡サブトレンチ

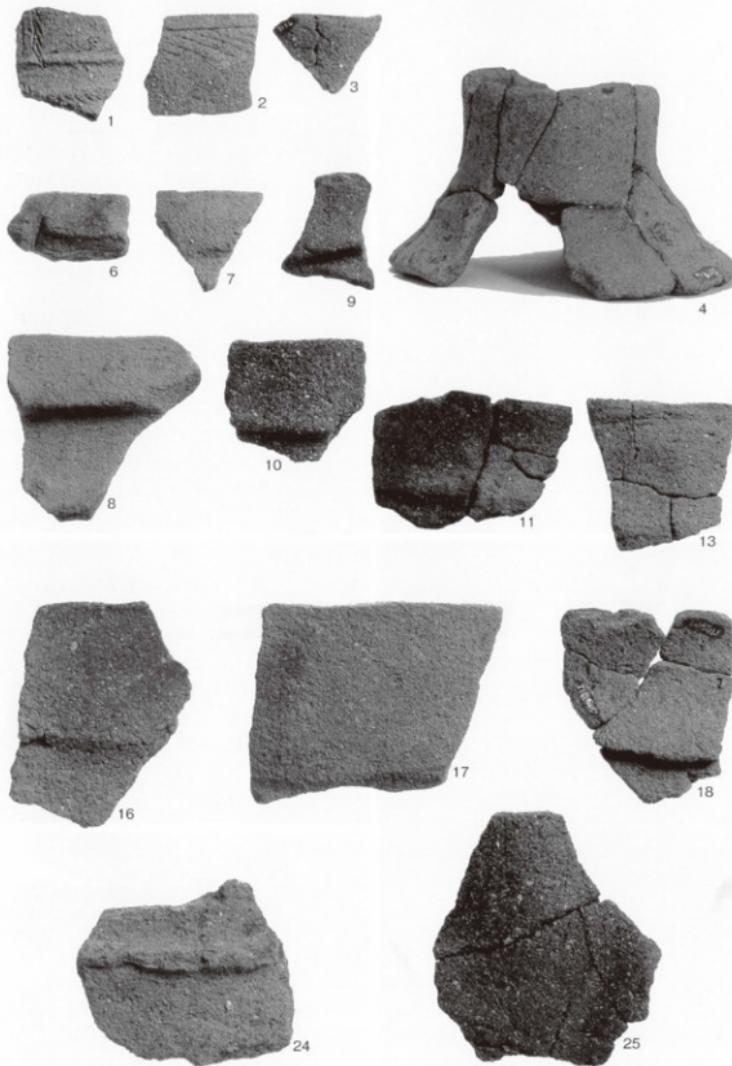
図版 10



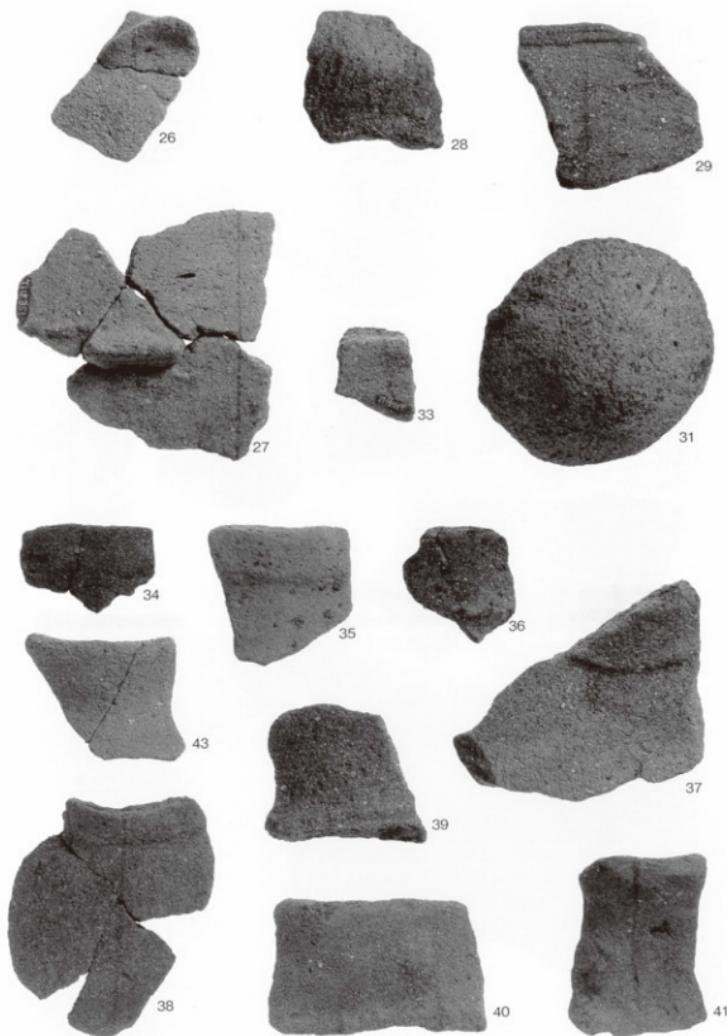
① 10号・12号住居跡（奥） ② ピット検出状況 ③ 13号住居跡 ④ 1トレンチ（H17調査）
⑤ 1T（H18調査） ⑥ 5トレンチ ⑦ 6トレンチ ⑧ 5トレンチ落ち込み ⑨ 石列・遺物集中部分



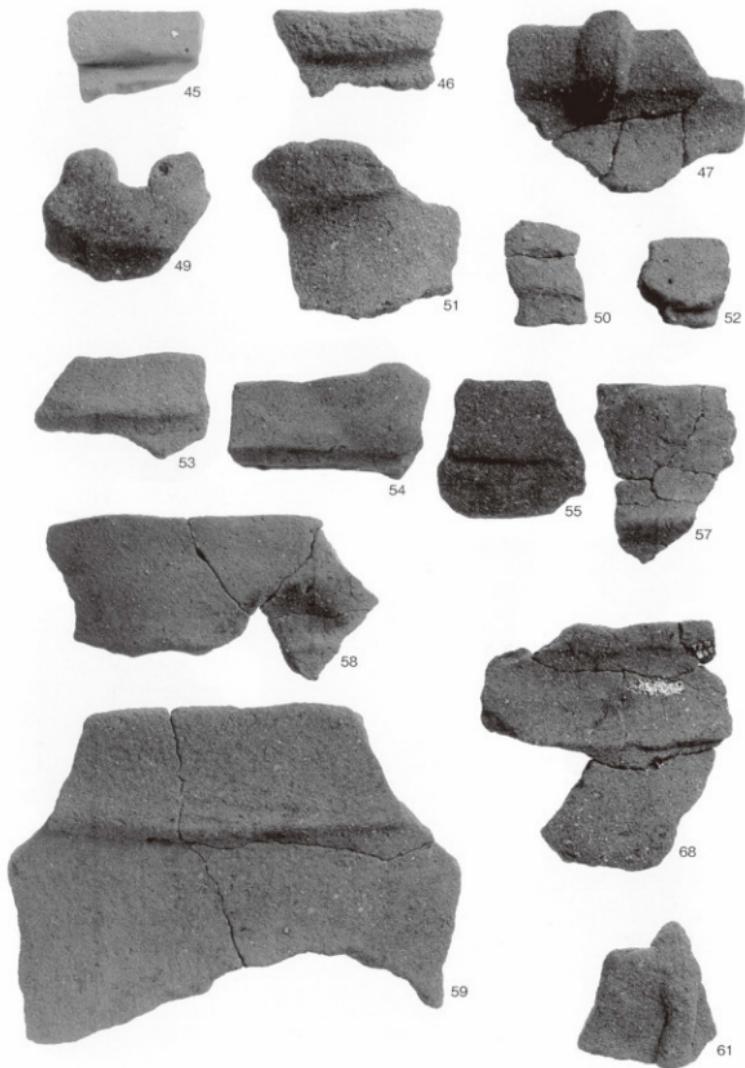
①C 3サブトレンチ1 ②C 5サブトレンチ1 ③D 3サブトレンチ2 ④発掘体験 ⑤土器づくり体験



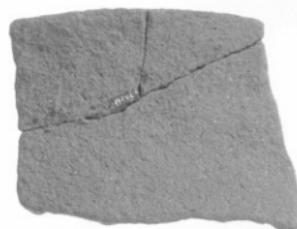
1号住居跡出土土器



1号住居跡（上）・2号住居跡（下）出土土器



2号住居跡出土土器



67



70



88

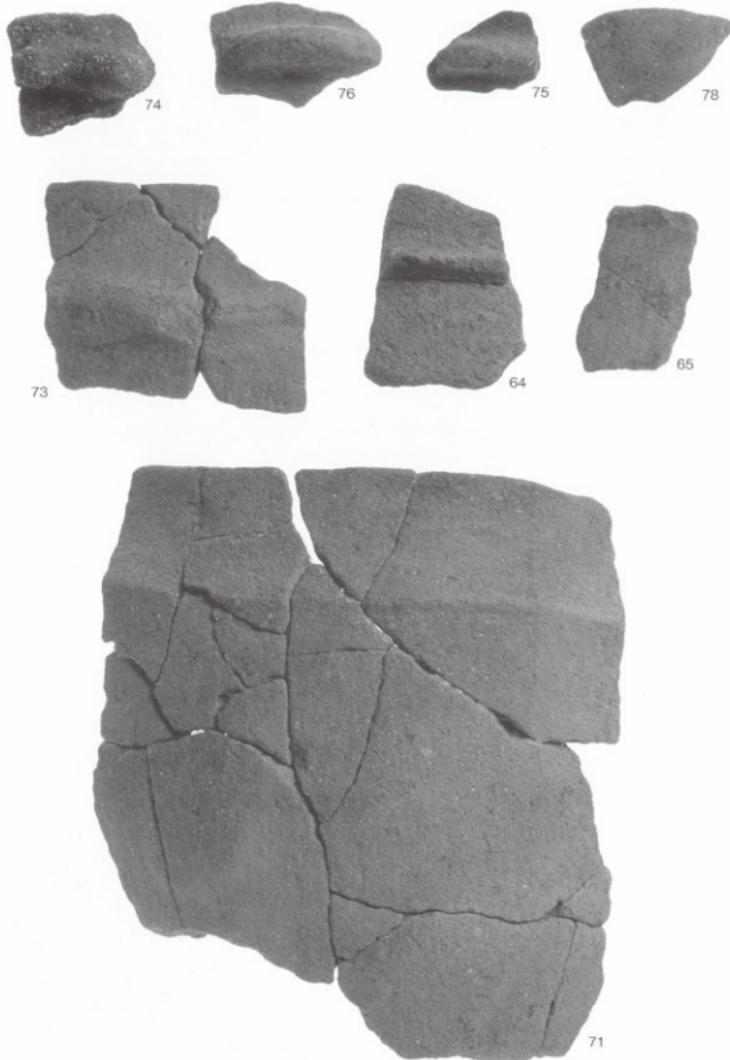


69

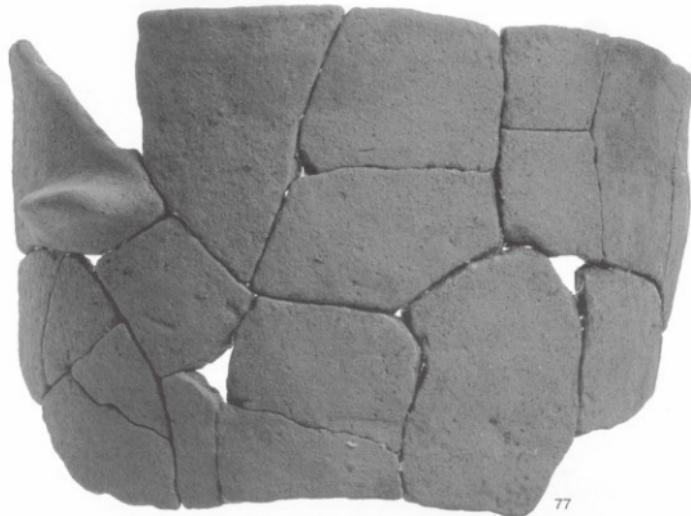


72

2号住居跡出土土器



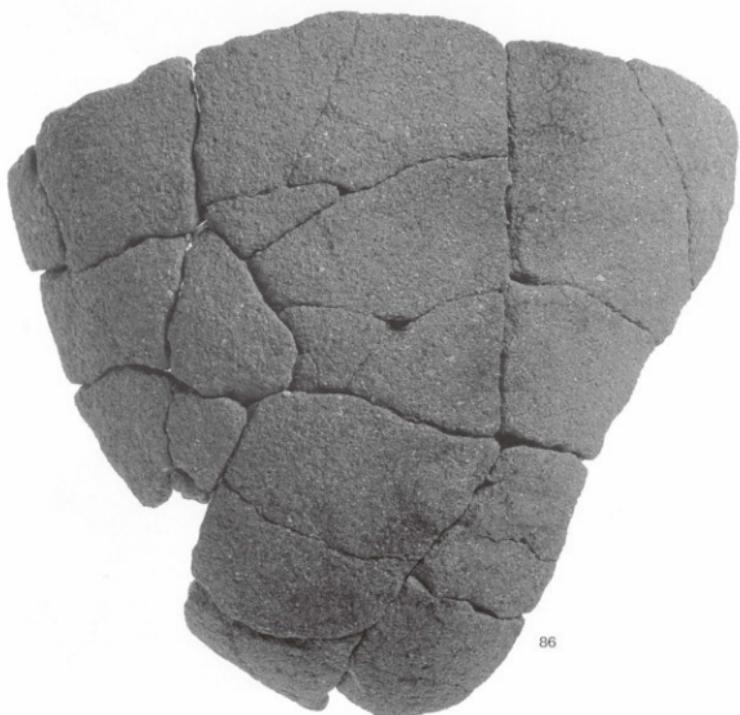
2号住居跡出土土器



2号住居跡出土土器

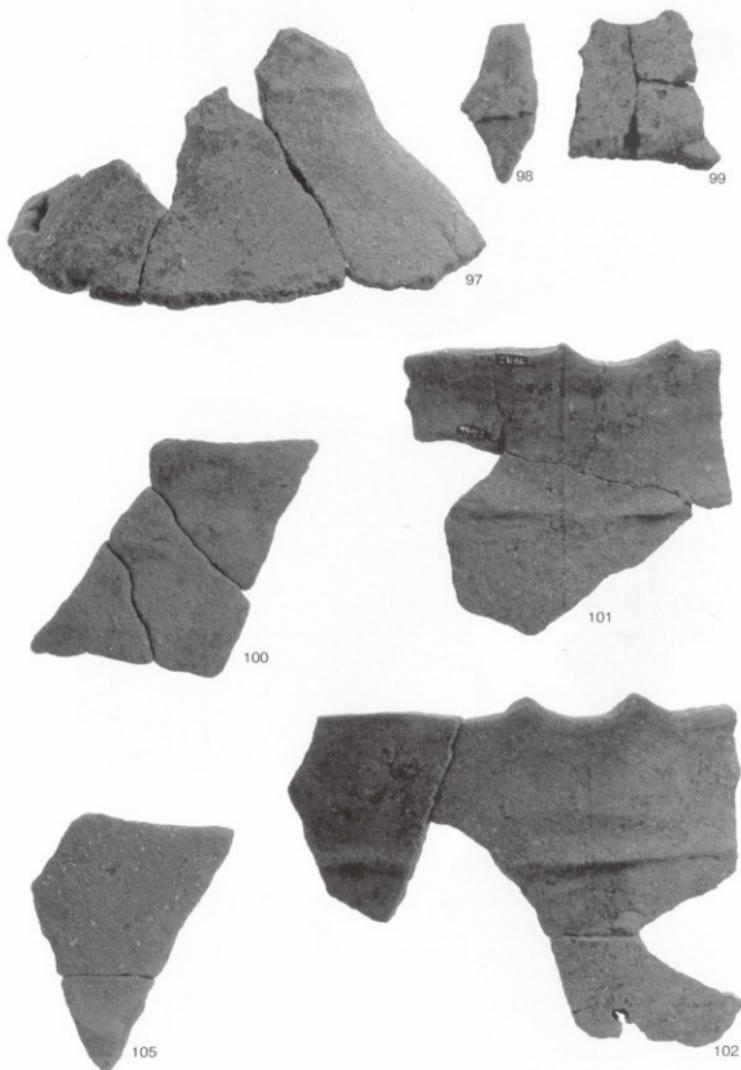


87

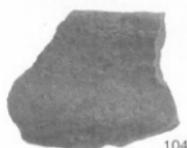
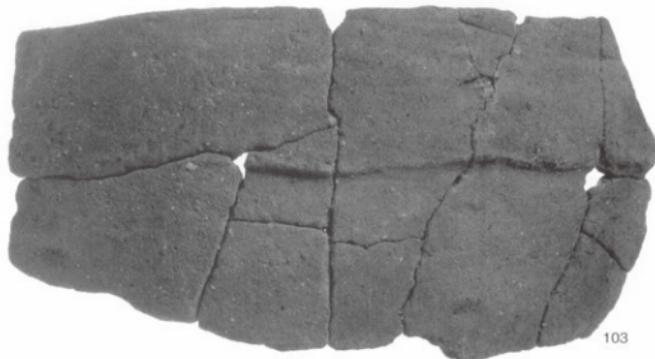


86

2号住居跡出土土器



4号住居跡出土土器



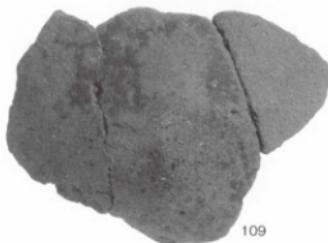
104



108

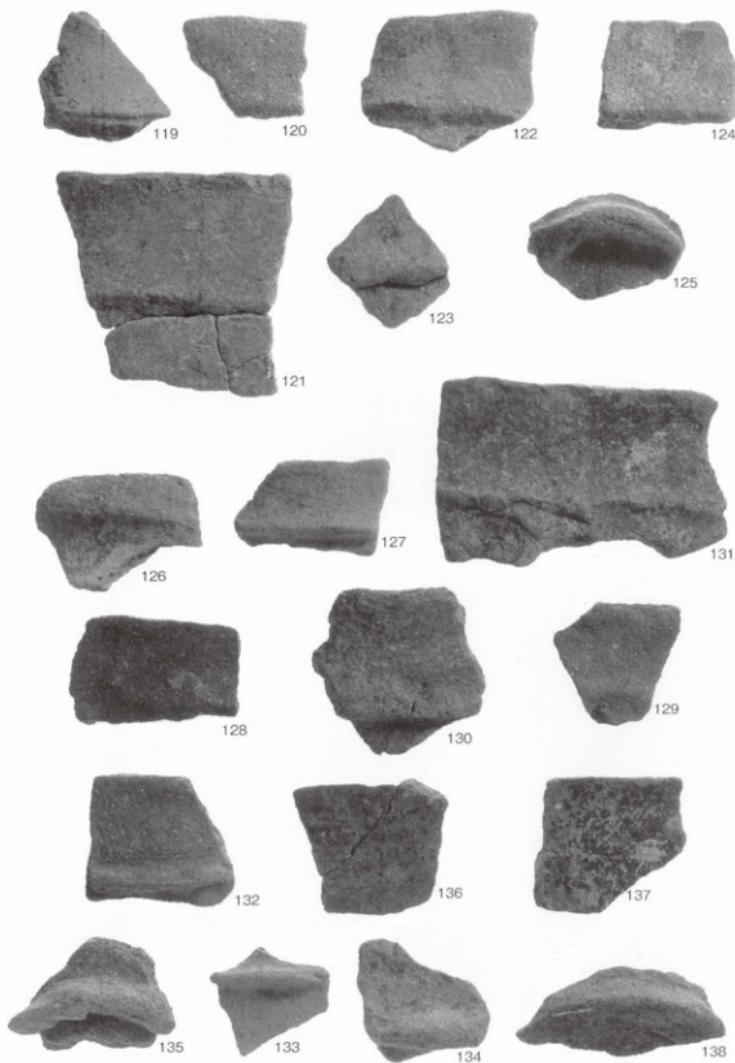


107

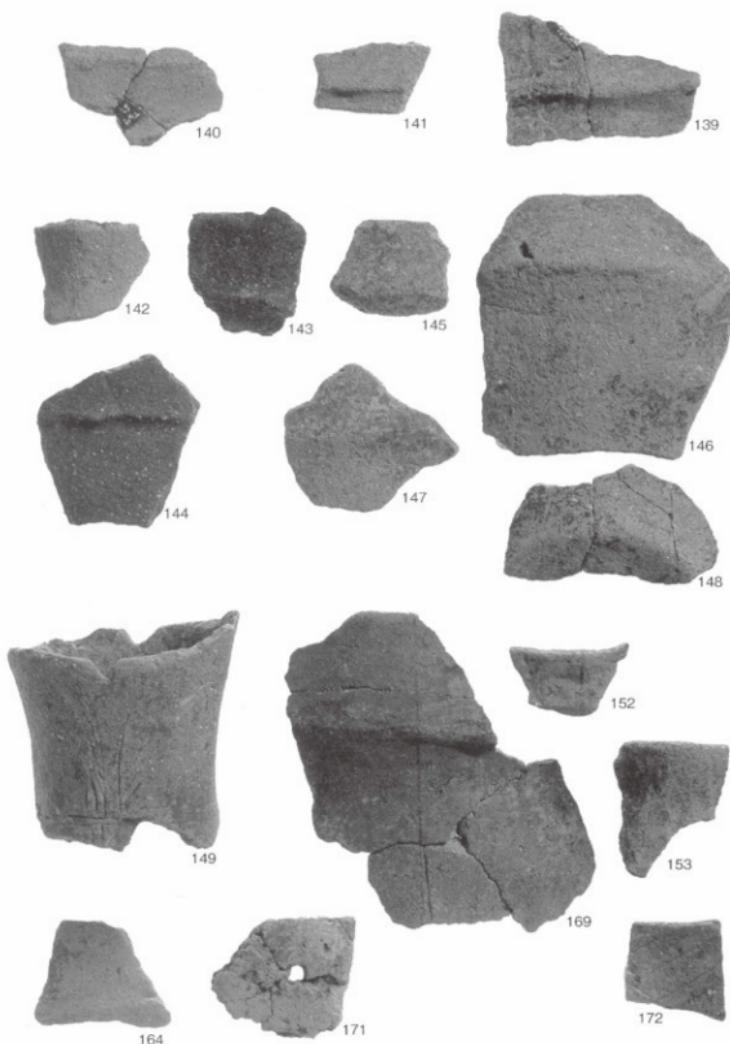


109

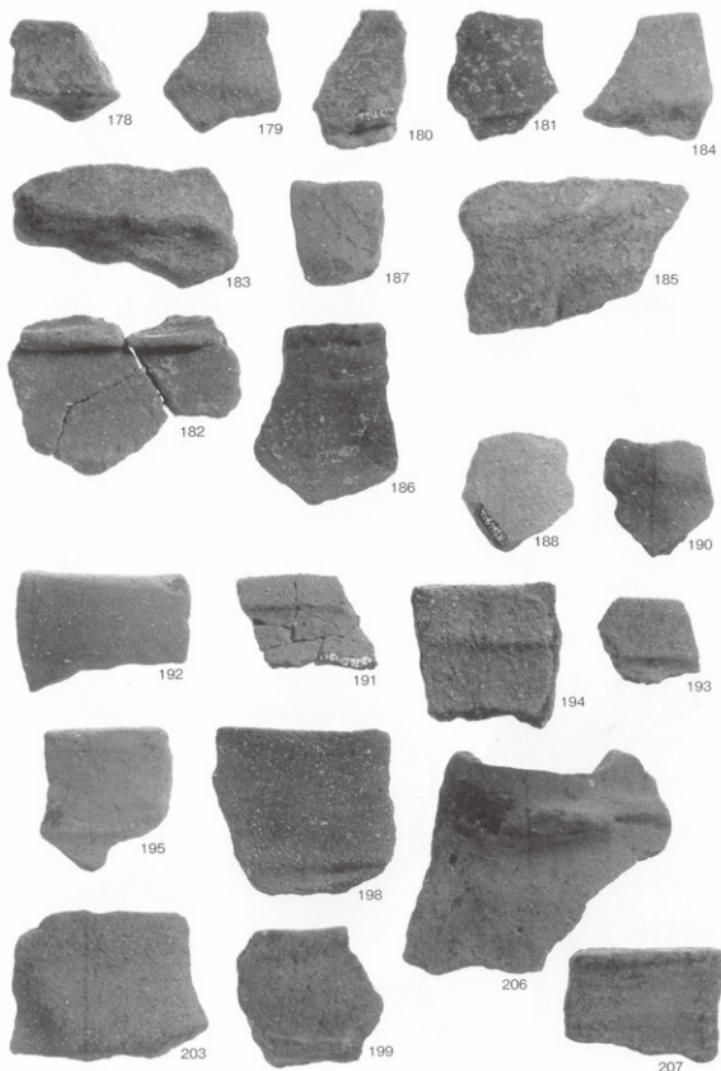
4号住居跡出土土器



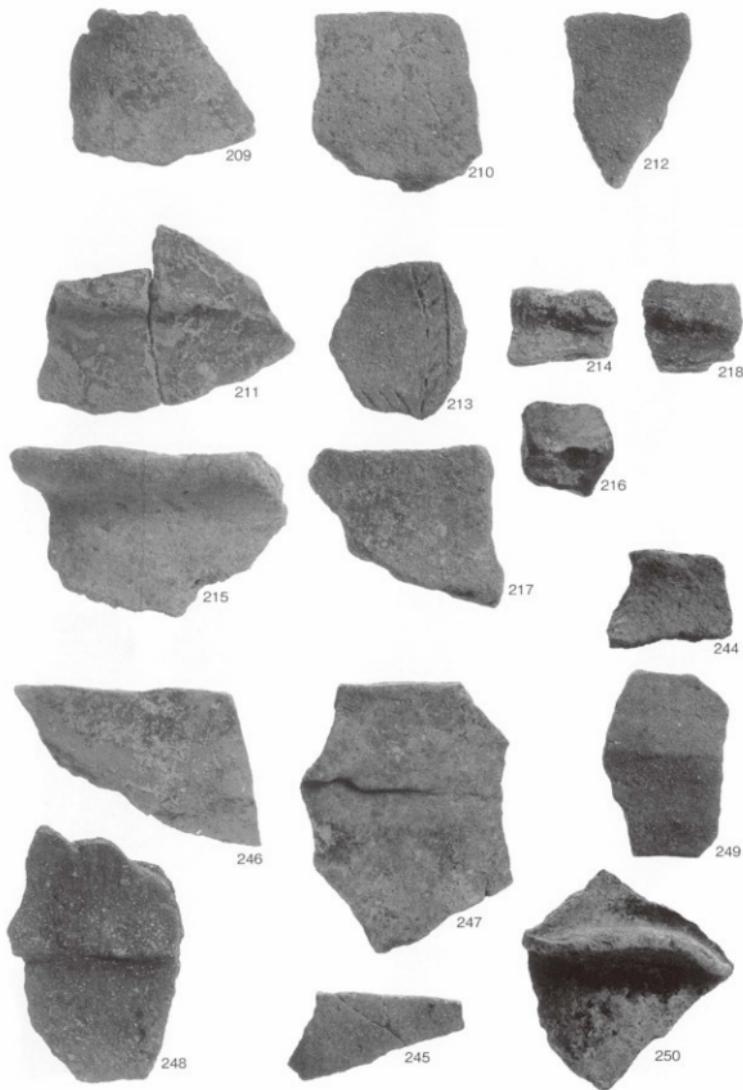
5号住居跡・検出面出土土器



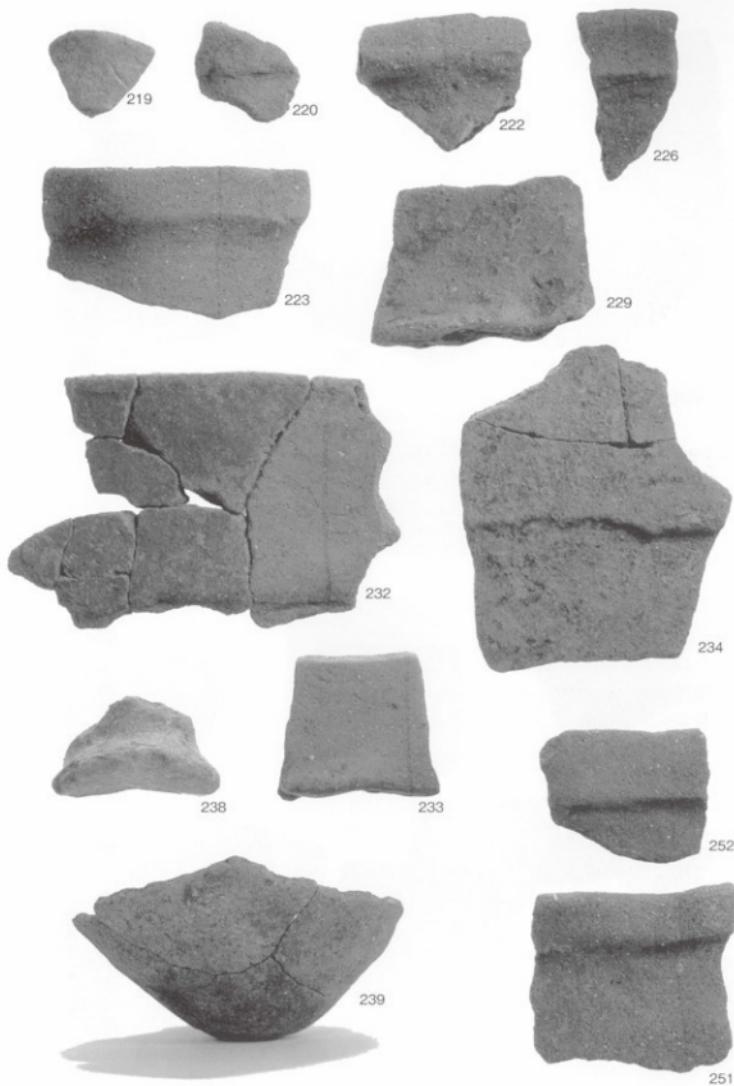
6号住居跡（上）・15号住居跡（中）・6号・15号住居跡検出面（下）出土土器



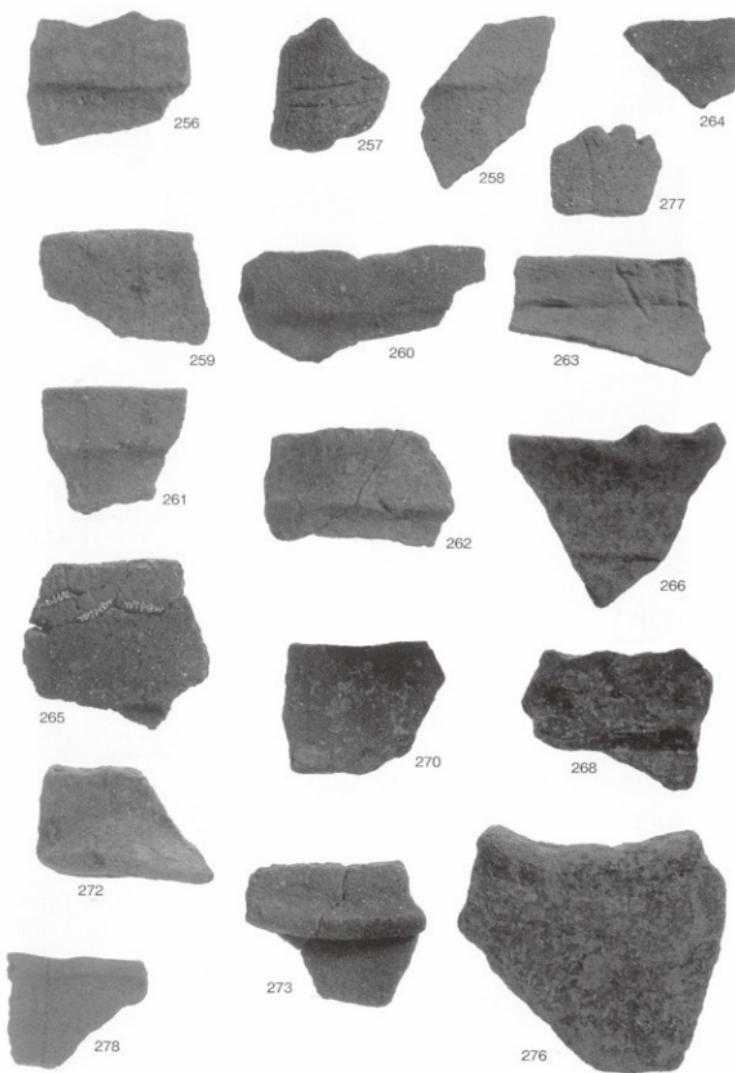
7号住居跡（上）・検出面（下）出土土器



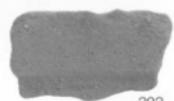
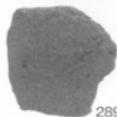
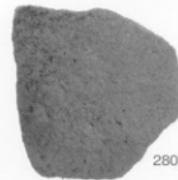
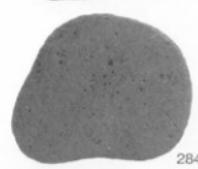
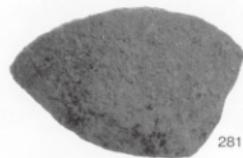
8号住居跡（上）・8号住居跡南側遺構（中）・14号住居跡（下）出土土器



8号住居跡検出面・14号住居跡検出面（右下）出土土器



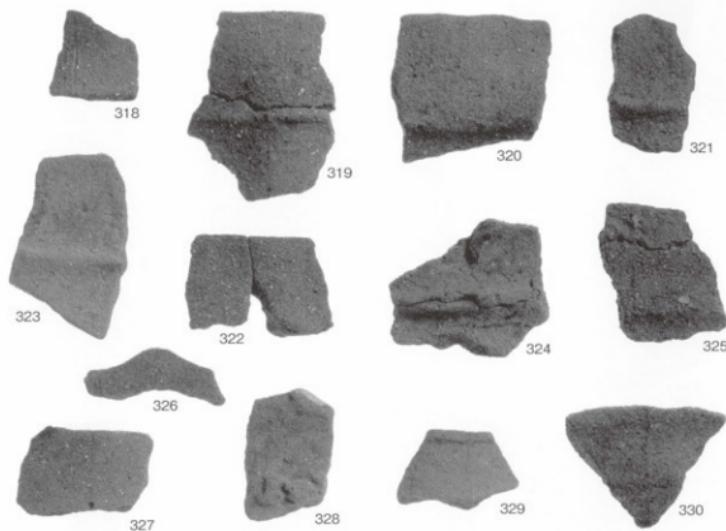
9号住居跡（左上）・検出面出土土器



9号住居跡検出面（上）・10号住居跡検出面（下）出土土器



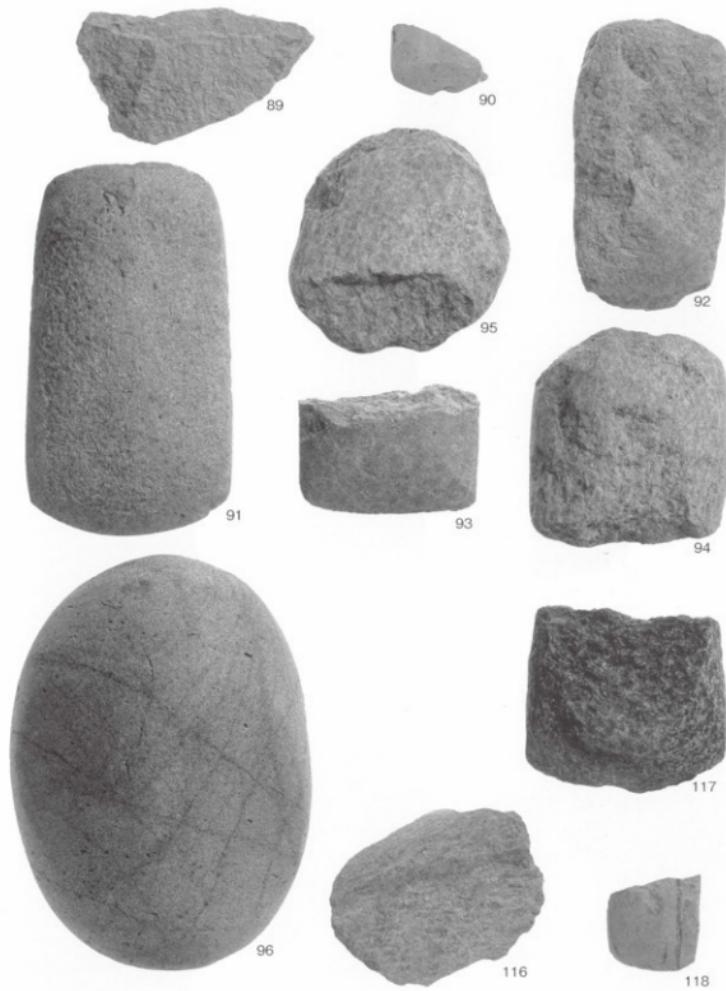
10号住居跡検出面出土土器



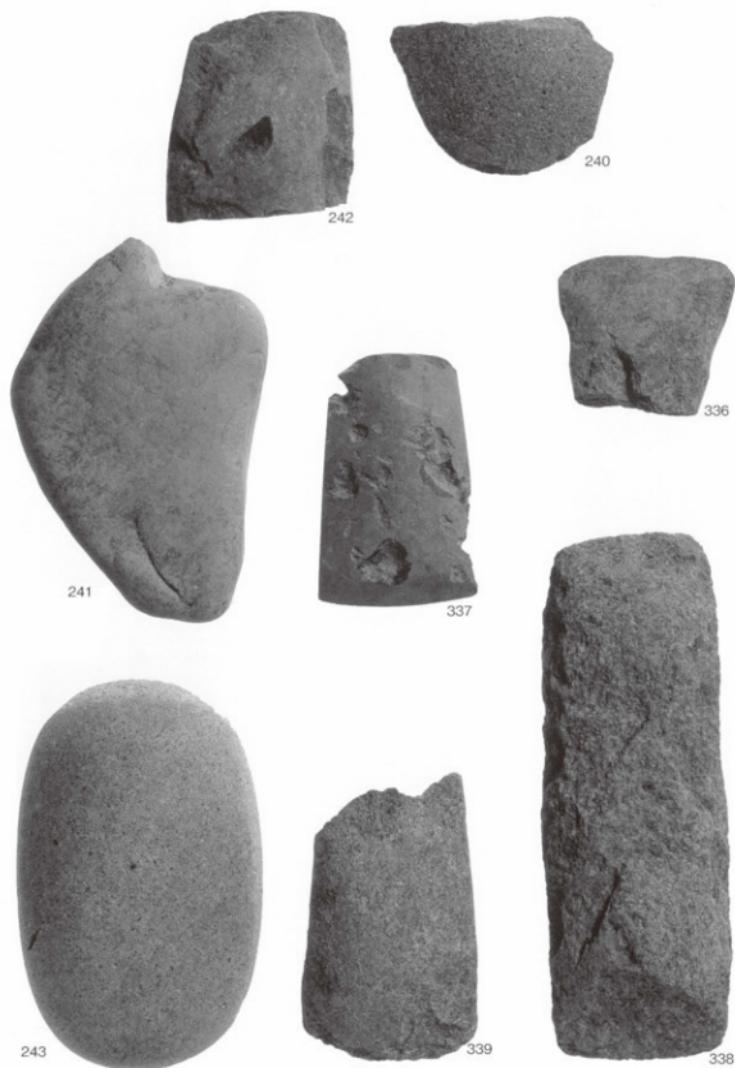
11号住居跡出土土器（上）・骨製品、黒曜石（下）



包含層出土土器



2号住居跡（89～96）・4号住居跡（116・117）・4号住居跡棟出面（118）出土石器



6号住居跡(241)・6号住居跡検出面(240)・8号住居跡(242)・10号住居跡検出面(243)・包含層(336~339)出土石器

知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

友留遺跡範囲確認調査報告書

友留遺跡

発行日 2009年3月31日

編集・発行 知名町教育委員会

〒891-9295 鹿児島県大島郡知名町知名307

印 刷 潟上印刷株式会社

〒892-0845 鹿児島市樋之口町6-6